赤松中学
緋弾のアリア
Aria the Scarlet Ammo
秋霜烈日の獅子
リヴラス・サスペクト
XXI
21
MF文庫J

緋弾のアリア XXI

Aria the Scarlet Ammo

秋霜烈日の獅子（リゴラス・サスペクト）

赤松中学

緋弾のアリアXXI

リゴラス・サスペクト
秋霜烈日の獅子

赤松中学

MF文庫J

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

P11 1弾 Scarlet for Scarlet 緋の因果律

P82 2弾 STS-132-1/2 アトランティス

P114 3弾 やる気学

P141 4弾 いま万感の想いを込めて

P179 5弾 神崎家の事情

P215 6弾 あの娘に薔薇石英（ローズクォーツ）の約束を

P248 Go For The NEXT!!! 19時のラッキーストライク

Contents

Contents

1弾　Scarlet for Scarlet 緋の因果律
2弾　アトランティス STS-132-1/2
3弾　やる気学
4弾　いま万感の想いを込めて
5弾　神崎家の事情
6弾　あの娘（こ）に薔薇石英（ローズクォーツ）の約束を
Go For The NEXT!!!　19時のラッキーストライク

1弾　緋の因果律
Scarlet for Scarlet

星伽とは。
星に伽ぐ、とは。
星を安らがせ、眠らせ、鎮める。と、いうこと。
そして、その星とは。
宇宙から降ってきた、この緋緋色金のＵＦＯだったのだ。
メヌエットは、緋緋色金の正体を白雪が知ってるような話をしてたが……
――『星伽』。
白雪の名字が、最初から答えだって事かよ。
神の隠れる岩戸・神奈備と呼ばれる洞窟の中、
「この御星様が、星伽神社の御神体なの」
そう言った白雪の前方には、注連縄が掛けられた円盤が鎮座している。
緋緋神アリアが腰掛けるその金属塊は、直径およそ10ｍ。
緋色の光沢があり、中央が半球状に大きく盛り上がっていて、巨大な笠や麦わら帽子のような形をしている。
つまり、アダムスキー型と呼ばれる典型的な未確認飛行物体（Unidentified Flying Object）の形状だ。
星伽家の家紋『星に笠』――にも、これがハッキリ描かれてあった。あれが笠じゃなく色金の原石を描いた図だとは俺も類推してたが、ＵＦＯを家紋にしてたのかよ。ご丁寧に星マークで囲んで。
うち以上にブッ飛んでるな、星伽家は。
「その、宇宙から来たこいつは……なんで、この形をしてるんだ」
驚愕に打ちのめされる俺は、まず緋緋色金の形状について尋ねる。

パッと見での判断だが、これはいわゆる宇宙船ではないのだろう。
というのも出入口や窓、ノズルといった部品が一切見当たらないのだ。
あくまで、ＵＦＯっぽい形をした一塊の金属でしかない。
「元々は真球に近い形をしてたんだけどな。地球の引力に捕まって大気圏に墜落した時、あたしは空気との摩擦熱で柔らかくなったんだ」
緋色の円盤に座るアリアが、いや、緋緋神が答えてきた。
今――『着陸』とは言わず、『墜落』と言ったな。
「柔らかくなった時、あたしは少しずつなら自分の意志で自分の形を変えられる。空中でバラバラに割れて燃え尽きたくはなかったから、この形になって空力ブレーキを掛けたんだ」
続けられたこの発言と合わせて考えても、緋緋色金が地球に降ってきたのは……
どうやら、事故・遭難みたいな出来事だったらしい。
緋緋神アリアは前方のナナメ上を指すような指付きをしてから、スッ、と、後ろ下方へ指を走らせ、
「で、ここにドーン！　だ。もう２０００年も前の話だから、ちょっと記憶がウロなんだけどな」
と、話した。墜落時の角度は垂直ではなかったらしい。この形ってことは、つまり……この山肌の斜面に、ほぼ直角に墜落してきた感じか。
緋緋色金が墜落して出来た、クレーターだったんだ。
どうやら石材を埋めて色金を隠したのが、この神奈備なんかじゃない。
そこに後から石材を埋めて色金を隠したのが、この神奈備。
さっき俺が渡ってきた、不自然な三日月形の湖――水弓は、その埋め残りの窪地に水が溜まったもの。
そういえば、璃璃色金も丸い湖の底にあったとレキが話してたな。そこもクレーターに水が溜まった、クレーター湖だったんだろう。
あの時レキがクレヨンで描いた璃璃色金も、この緋緋色金と同じ形だった。
地球上での場所は違うが、璃璃色金も墜落したんだ。

そしてきっと、瑠瑠色金もな。

瑠瑠色金が保管されていたエリア51も、ＵＦＯがよく目撃される上地。

それは米空軍が、元々の色金の形状を参考に航空機を作ろうとしていたのかもしれないな。

（……こういう推理が、頭の中にポンポン出てくるって事は……）

星崎温泉の猴＆ハビでなれた俺のヒステリアモードは、まだキープできてるって事だ。

だがそれも、体感的に……持って、あと15分ってとこだろう。

今のうちに、全ての謎を解き明かさせてもらうぜ。

「なんで緋色なのかは未だに分からないんだけど、御星様の成分はほとんど鉄なの。でも、墜落が起きたのは紀元前7年のことで……当時の人たちは鉄を知らなかったから、色から『ヒヒイロカネ』って名付けたんだよ」

もう洗いざらい教えてくれるつもりらしく、白雪が隣からそう教えてくれる。

「星伽巫女――緋巫女の歴史も、その頃から続いてるの」

ＵＦＯを囲んで無数に突き立てられた、歴代の色金殺女と思われる刀剣を――白雪は、先祖の巫女たちの墓標のように眺める。

「……」

俺は、その光景を見て……

遠山家の男が古くから星伽家と関わってきた理由も、推理できていく。

星伽では、男は代々別の家に移されてきたと兄さんに教わった。レキの部族も女ばかりらしい。

それはきっと、同性の女の方が色金たちと共感できるから。

しかし、そこに……遠山家の男は、例外として出入りさせられてたのだ。それはきっと、性的興奮を――見かけ上では恋心を戦闘力に替える力が、星伽に注目されていたからだ。

（俺たち遠山家の男も、恋と戦を象徴するような存在だからな）

ヒステリアモードをどこまで認知しているかは別として、星伽は恋と戦を好む緋緋神の性質と連関しそうな性質を

持つ遠山と通じ続けてきた。玉藻が語っていたような、星伽と遠山が組んで戦っていた昔話の時代からずっと。

うちは家系図の管理がズサンなので、ヒステリアモードを利用していた事が明確に判明してる祖先は遠山金四郎までしか遡れないのだが――それ以前にも当然、ご先祖様はいたワケだからな。閻の話によれば、千年程前の摂津守頼光とかいう人もヒステリアモードを持ってたくさいし。

とはいえ……

ヒステリアモードについて、白雪個人がどの程度知っているかは不明だ。

緋緋色金が恋心に反応することをシャーロックが俺とアリアに伏せたように、そういう感情にまつわる反応は意識すると逆にギクシャクしてうまく働かない事がある。

今までの俺への接し方を思い起こすに、白雪はヒステリアモードの事を教わってないか、違う形で教わっている可能性が高い。

なので俺は藪蛇にならぬよう、

「この件、もうちょっと踏み込ませてもらうぜ。星伽家と遠山家は昔から、家族ぐるみの仲なんだしな」

緋緋色金という星伽家の重大問題に『家族付き合いのよしみで関与する』的な前置きを、白雪にはしておいた。

そして、改めて緋神アリアへ語りかける。

「さて――ようやく腑に落ちてきたが、お前は地球外の金属だったわけか。意志を持った金属とか、どうりで地球人の発想を超えてると思ったぜ」

「理解が早くて助かるぜ、キンジ」

「超常現象に慣れっこの俺とはいえ、最初はちょっと面食らったけどな。鉄のくせに心があって、超能力まで使いこなすってのには」

「鉄のくせに？　ニュートリノやクォークやレプトンすらボンヤリとしか見えないくせに、よく言うぜ。お前ら地球人は、見える物だけが全てだと決めつける。地動説の頃から全く進歩が無い」

……そういや、璃璃神もそんな事を言ってたな。

色金の心は極微小の素粒子の世界にある、とか。
まあいいや。その辺の話はスッ飛ばそう。バカにされそうな流れだし、実際バカだから科学的な話をされても分からないんでね。
というわけで物理学的な話は早々に打ち切り、
「――よし、緋緋神。ここで俺なりの定義を宣言しておく。お前は宇宙人だ」
と、俺は俺なりの分類学的な解釈を緋緋神に伝えておいた。
エリア51じゃ色金たちを『金属人』だと考えたが、ここで『宇宙人』に改めたのだ。
このざっくり感には、緋緋神アリアも白雪もちょっとキョトンとしてる。
だが、メヌエットが言っていた。相手の正体が理解できなければ、どう戦えばいいのか、どう話し合えばいいのか、その行動指針が立てられない。
まず今は取るべき行動の基盤となるような、理解が必要なのだ。
しかし、相手はそれこそ宇宙由来の存在。地球の枠に囚われた発想をチマチマしてたら、理解なんか到底できやしないだろう。
だから俺はヒステリアモードの頭で、発想の枠を大きめに、柔軟めに作る事にした。
――何をもって人を人とするかは別腹の議論だが、人格を持つような知的生命体が絶対、必ず有機物から出来ると考えるのは、地球を基準にしてしか物を考えられない地球人的な発想だろう。
形状はＵＦＯに見えるが、あの形状のＵＦＯが宇宙人の乗り物だというのも、宇宙船に乗ってしか宇宙へ行けない地球人の発想にすぎない。他にどんな形のＵＦＯがあるのかは詳しくないが、色金シリーズの場合は色金ＵＦＯ自体が知的生命体。
つまり今そこにある緋緋色金は『宇宙から来た、人格を持つ金属』という――宇宙人、なのだ。
「つまりタコみたいな火星人とか、グレイとか、バルタン星人とかそういうのと同じだ。だから白雪、もう金輪際こいつに対して敬意とか持たなくていいぞ。お前たち星伽は代々、こいつを御神体として敬ってきたみたいだがな」
俺がここに来たのは、心を乗っ取られたアリアを助けるためだ。

とはいえ、それが俺1人で出来る可能性は全くのゼロ。打つ手ナシの無策で来てる。

だが、超能力捜査研究科（SSR）の優等生・白雪なら――緋緋神（ヒヒガミ）とアリアを引っぺがす何らかの手立てがあるかもしれない。

ここでの重要人物（キーパーソン）は、白雪だ。

その白雪が御星様（おほしさま）に忠誠心（ちゅうせいしん）とかを持ってると事が進めづらくなるので、俺はまずここで白雪をハッキリ味方に付けておこうとした。

しかしそれは取り越し苦労だったらしく、

「キンちゃん……」

大きな垂れ気味の目でこっちを見る白雪の……その目つきは、俺に言われるまでもなくそもそも緋緋神を盲目的に崇拝（すうはい）してはいなかった感じだった。

「……気を遣ってくれて、ありがとう。でも、敬意とは違うの。星伽が緋緋色金を封印し続けたのは、危険だからなの」

そう話す白雪の声は、言いづらい秘密をそれでも話すトーンになり――

「最初は自然と、この辺りに住んでいた地球産の超能力者（ステルス）……巫女（みこ）が、宙（そら）から墜（お）ちてきたこの星を管理するようになったの。それが星伽の始まり。でも、それから200年ぐらい経（た）った頃、星伽巫女のリーダー――当時の緋巫女（ヒミコ）が、緋緋色金の超々能力（ハイパーステルス）を使って世界を支配しようとしちゃったの。実際、手始めに日本はほとんど制圧しちゃって……」

「お、おいッ。それって、3世紀の……」

「うん。その卑弥呼だよ。彼女は途中で病死しちゃったけど、見て……緋緋色金の危険性に気づいたの。それで、それからは未来永劫（みらいえいごう）、守りに徹（てっ）することにしたんだよ。星伽の巫女は、守護（まも）り巫女――その精神は、『緋緋神から世の中を守る』という精神が端緒（たんちょ）なの」

やっちまってるなあ……星伽さん家（ち）も。

現代でも手に負えない緋緋神の力を、弥生（やよい）時代にバーッと使っちまったってか。そりゃ日本史に残るような、大事

件になるっての。

だがそれ以降、星伽は方針転換し……緋緋色金が世界に拡散しないよう封印してきた。

緋緋色金の適合者が暴走したら、世の中がどうなるか分からないから。緋緋色金という危険物質の拡散を防ぐために、排他的で引きこもりの――守護り巫女として。何百年も、何千年も。殻金や色金殺女など、制御する技術を編み出し、時には戦ったりもしながら。

「それでも、時代時代で色金の流出は起きた。星伽巫女すら、ずっと一枚岩ってわけにはいかなかったから……」

白雪の代は、守りに徹してくれているようだが――

卑弥呼に倣い、星伽が緋緋色金を利用しようとした事もあったのだろう。人工緋緋神・孫／猴がその証拠だ。星伽は少なくとも１４００年以上前には、緋緋色金を使って武神を造り出そうとかそういう事をやっていた。信長が持っていたという緋緋色金も、アリアの緋弾も、過去どこかの時代で星伽神社から流出した緋緋色金だ。

つまり、長い目で見れば……

緋緋色金の封印は、うまくいってないんだ。

星伽神社だけの手には余る、難しいことなんだ。

ただその一族の長女に生まれたという理由だけで、そんな事案を引き継がされた当代の緋巫女……白雪にとっての緋緋色金は、とにかく迷惑な、困った存在だったのだろう。

管理を押しつけられた『祟り神』、といったところかな。

「その色金流出の結果の現代版が、緋緋神アリア……って事か。まあ、ここに至るまでの歴史的な経緯はよく分かった。白雪も、こんなのを任されて辛かっただろう。でも別に、お前個人が悩むことはないぞ。お前はそういう家に生まれて、単に押しつけられただけだ。何かに使おうとしたワケでもないだろうし、アリアがこうなっちまったのは緋神が悪い――ああ、今のところ他に名前が無いから引き続き緋緋神と呼ぶが、こいつは神様でも何でもない。人間に乗り移って地球を小規模に侵略してる、ただのエイリアンだぜ」

宇宙人はツチノコ級に珍しいクリーチャーなので、ただのエイリアンという言い方には少し語弊があるかもしれんが……

俺クラスの不幸マンともなると、今まで魔女、超能力者、吸血鬼、ロボット、魔獣、鬼その他と対戦してるんでね。

今さらこのリストに異星人が書き加えられたところで、他と大差ないさ。

「――だから緋緋神の正体を教えてもらった今でも、俺の意志は変わらないぞ。俺がここまで来たのは、アリアから緋緋神を取り外して助けるためだ。白雪、お前も手を貸せ」

「……」

緋緋神アリアを睨む俺と、隣でなぜか口をつぐむ白雪に――

「あたしと戦うつもりか？　この、あたしと？」

緋緋神アリアはセーラー服の上から平たい胸を自ら押さえ、笑いかけてくる。

「それはできないだろ、キンジ？　この体はアリアだ。お前は戦えない。アリアは２００年に１人いるかいないかの、あたしとピッタリ適合する心の持ち主だ。絶対返さないぞ」

「……」

「というわけで、どうせ戦えないお前はあたしに従え。一緒に楽しく生きようぜ」

「楽しく？」

「楽しいってことは、興奮するってことだ。そして人に最も興奮をもたらすものは、恋と戦。その命の続く限り、恋と戦をくれてやるぜ」

「どっちもいらん。それが俺だ」

「あたしは楽しみたいんだよ！」

……この緋緋神の人格を、探偵科の犯罪心理学で習った基準に照らすと――

退屈しやすく、欲求不満耐性が低い。刺激を好む。短気、衝動的。生活は寄生的。

サイコパス人格――サイコパシーの特徴が、ハッキリ出てるな。

しかしもちろん、そういった人格が必ず犯罪者になるとは限らない。緋緋神にピッタリ適合すると言われるだけあって、アリアだってスレッスレの女だ。

だがそれに他人に対する良心や共感の欠如が加わると、一気に危うくなる。緋緋神にはそういう対人情動に欠陥があるのだ。

しかしそれは当然だろう。

コイツは、人間じゃないから。

（こういうヤツが、罪を犯す理由には……）

それをなんとか人間に当てはめて対処法を探る俺が、授業内容を思い出していく。

刺激を好み、他人に共感する力の弱い者がヒマをもてあますと――ゲーム感覚で犯罪に走ることは、事実、あるのだ。アメリカなんかじゃ「退屈だったから銃を乱射した」とかいう供述調書が昔から間々見られる。

そういうヤツが犯罪のトリガーを引く力となる陰の動機は……

ほぼ必ず、欲求不満。

何らかの『自分で解決できない欲求不満』があって、その苦しみから目をそらすはけ口として悪事を働くのがパターンなのだ。

では、緋緋神は何が不満なのか。

そこを見つけ出せれば――

それを解決してやる事で、アリアから出ていってくれるかもしれないぞ。

「白雪。アリアを助けるために、緋緋神と対話する。お前も、まずは刀を収めろ」

とりあえず交渉で何とかしようとする俺が、抜き身の刀を持ったままの白雪がいきなり仕掛けたりしないようそう言うと。

「……キンちゃん。せっかくここまで来てくれたけど……もう、アリアは……いないよ」

遮るように、白雪が悲しげな声で呟いた。

「いない……？　どういう意味だ」

そこにいるだろう、と俺は緋緋神アリアを目で示す。

「さっきの神楽舞は、緋袄舞。依り代から緋緋神を祓う、一番強い、最終手段だったの。あの舞を前にしても少しも

アリアに戻らなかったのは、完全に乗っ取られちゃった証拠。パソコンのファイルを上書きしちゃったのと同じで……もう、元には戻せないの……」

白雪は涙声でそう言うと、きゅっ……

と、イロカネアヤメを下げて握る右手に力を込めた。

「白雪……？」

「完全に乗っ取られちゃった人は、昔も何人かいたの。でも、それを元に戻す事は誰にもできなかったんだよ。私よりずっと優秀な当時の星伽巫女たちが、ありとあらゆる方法を命懸けで試した。それでも、完全に乗っ取られた人を元に戻す方法は見つからなかった。完全に乗っ取った後、ああやって1日ぐらい祖鋼に接触して、力を充填するの。それが終わったらここを出ていって、世の中に祟りをもたらしちゃう——だから、その前に——」

カタカタと、握る刀を小さく震わせながら——

前髪の影で目元の涙を隠すようにうつむいた白雪が、絶望的なその話を伝えてくる。

（世の中に、祟りを……）

それは玉藻が俺の部屋で語った、あの昔話。

恋と戦を司る緋緋神に憑かれた者の、なれの果ての話。

その者は帝を蠱惑し、戦を起こし……

ついには遠山侍と星伽巫女とに打ち殺された。

「星伽が2000年の歴史で唯一見つけた、緋緋神の降臨を阻めるタイミングは……ああやって緋色金の上にいる間……今が、最後のチャンスなんだよ……」

もう、元には戻せない——

最後のチャンス——

何だ。白雪。

何の話をしているんだ。よせ。

「私も、アリアを助けたかった。こんな形で……アリアと、決着をつけたくなかった」

泣きながら言う白雪、から……
悲しみと共に、立ち上ってくる。
黒雲のような――
――殺気が。
「よせ、白雪っ……お前、どうするつもりなんだッ」
「キンちゃん、ごめんね。これは定めなの」
白雪は、謝る時はちゃんと謝る子だ。
その白雪が、今――俺には謝ったが、アリアには謝らなかった。
それはつまり、もう本当にそこにアリアがいないという事を示している。
「……白雪……！」
「キンちゃんは戦わないで。逃げて」
かつん、と赤い鼻緒の下駄を鳴らして踏み出した白雪が、しゅるっ、と髪に留めていた白い封じ布を解く。もう、問答無用のムードで。
そして、右手に握った刀を頭上に掲げた。
柄頭のギリギリ先端を握り、刀の腹を見せるように横倒しにして。
この右片手大上段は、ジャンヌ戦で見たことがある。
白雪が本気で戦うときの構えだ。
「緋緋神に体を与えちゃうと、悪さをするの。アリアだったあの体を、悪用させちゃだめ……アリアの、ために……」
「よせッ、アリアを殺す気か！」
「キンちゃん……アリアは、もう……そこにいるのは、アリアじゃないんだよ……」
白雪が俺に、涙目を向けてそう言った。
友の死を受け入れようとしない者を、哀れむように。

「肉体が無ければ、緋緋神は暴れられないの。だから、緋緋神から肉体を取り上げる……それは、緋巫女の役目なの」

星伽の巫女は、守護り巫女。

だが、守るためには。防衛するためには。

戦いが伴われる。犠牲が伴われる。

イロカネアヤメを手に緋緋神アリアを睨み上げた白雪は、もうアリアを元に戻す方法は持っていなくとも……

緋緋神の体を殺すことは、できる。そんな表情だ。

それを俺に宣言するように、

「色金殺女は、星伽が造り出した――逆サ色金の刀。他にもいろんな機能を持ってるけど、その固有の力は……鏡みたいに緋緋神とは真逆の力を放出して、機能を相殺できる力なの。あらゆる緋緋神の力を透過して依り代の肉体まで届く、唯一の刃なの……！」

白雪が、色金殺女の真の力について教えてくれる。

（……能動逆位相兵器……！）

それは敵が放ってきた攻撃と寸分違わず全く同じ威力・種類の攻撃を放ち、全てを打ち消そうという発想のＳＦ兵器だ。高級なヘッドホンに搭載されているＡＮＣなどが似た装置と言えなくもない。

もちろん現代の科学力では未完成のそれを、星伽は何千何百年も前に発想し、開発していたのだ。

その対緋緋色金専用の、『逆位相の剣』を前にして――

「緋巫女よ。お前らはここで甲斐甲斐しくあたしの世話をするくせに、イザとなりゃ代々あたしのジャマばかりしやがるんだよな」

白雪を睨み下ろす緋緋神の表情にも、さっきほどの余裕はない。

来るなら、受けて立つ。

そう言いたげな顔だ。

「……本当に、面倒なヤツらだぜ……！」

……ぐらりっ……

ぐらっ……ズズズ……ズズズズズズズン……

――揺れている。この岩窒が微震を始めている。星伽山ごと。

この現象は今までも何度か体験した事がある。緋緋神の闘気によって起きる震動だ。

緋緋神も、闘る気なんだ。

（……ッ……）

クソッ、始まっちまうぞ。

緋巫女の白雪・対・緋緋神アリアが……！

「勸、請、艮下艮上。緋緋の色金を神名火に艮め寘き給え。禍、稜、北辰北斗。祓い給え、清め給え。鎮め給え、禊ぎ給え。僮、籠、色金殺女。緋緋の色金に、聯鎚を下し給え」

白雪が唱え始めたその呪文は、何らかのパスワードを含むものらしく――

――それで隠していた真の力を解放させられたらしい色金殺女が、緋色に輝き始める。

緋緋色金と全く同じ色に。緋緋色金よりも、強く。

機能し始めたんだ。太古より伝わる、対緋緋色金の能動的逆位相システムが。

その依り代となったアリアの肉体を、斬るために。

「――よせ、白雪ッ！」

白雪は俺の声に、ぴくんっ、と小さく反応したが――

眩しいほど輝く色金殺女をトーチのように掲げたまま、かつん、かつん、と、前に出る。

緋緋神の方へ。

アリアの、方へ……！

「白雪。お前、あたしを裏切るのかよ。あたしを神と崇め、鎮守する役目の分際で」
「なんと言われようと構わないよ」
「あたしの何が気に入らないのさ？」
「あなたは、キンちゃんを……巻き込んではいけない人を、巻き込むつもりだから」
言いながら、一歩、一歩、白雪が緋緋神に近づいていく。
緋緋色金の円盤は傾いているので、しがみついたりせずとも登れないことはない。
一方の緋緋神は、円盤の上から動かない。緋緋色金からアリアの体に力を充填している間は、動けない様子だ。見えないヘソの緒で母体と繋がった、胎児のように。
つまり白雪は、緋緋神アリアの所まで行けるのだろう。自らがさっき宣言した『最後のチャンス』を捉えることができる、ゼロ距離まで。
――そうしたら、一刀のもとに斬るつもりなのか。
どうする。
どうするキンジ。
「目には目を、歯には歯をだ。白雪、お前が殺りに来るつもりなら、あたしが先にお前を殺ってやるぞ」
そう言った緋緋神は、チラッと俺の方を見た。
動け、白雪を止めろ、とでも言いたげに。
言われずとも、俺は白雪を止めるべきだ。
だが、もう白雪と緋緋神は始まってる。
俺が割って入った瞬間、白雪の気が逸れて、それを見た緋緋神が何らかの遠隔攻撃でもしてみろ。今度は白雪が殺られるぞ。今さっきの緋緋神の視線は、きっとそういう展開を狙ってのものなんだ。
……ダメだ、動けない。
だが、じゃあどう止めればいいんだ。どう……！

「星伽の巫女は、守護り巫女。私は何が大切で、誰を守りたいか分かってるつもりだから。その人が誰のものでも、もういなくなってしまったアリアのものでも……その人の世界を、日常を、守りたいから……！」

ヒステリアモードの俺には、白雪が――

幼なじみの俺のことを言ってくれているのだという事が、分かる。

（白雪……！）

動けずにいる俺の前、緋緋色金の上でそれを聞いた緋緋神に……その時。

ごく僅かな、しかし予想外の反応が見られた。

「……あれっ？」

という声と共に。

……ぽろっ……

その赤紫色の瞳から、涙を一粒、こぼしたのだ。

だがそれは緋緋神にとっても意外だったらしく、涙をこぼしてから自分が泣いたことに気づいたようなリアクションを見せたのだ。

その表情を見た時――

（……！）

俺の脳裏を、よぎる映像があった。

ヒステリアモードの頭脳は、俺に勝利への糸口となるようなイメージを断片的に見せることがある。

過去の記憶から想起されるそれは、一見その戦いとは関係の無い、見た瞬間には自分にすら意味の分からないヒントである事が多い。

今回もご多分に漏れず、見えたイメージは――

（……発電所……？）

――品川。品川火力発電所。そこで、先端科学兵装で戦いを仕掛けてきたかなめに対し、ホバー・スカートを装備して空襲で応じたアリアの姿だ。

いつものようにそれが何かの新技を示唆しているとは思えなかったが……

「……っ……！」

深く考えるヒマは無かった。

白雪が――

――ぶわっ――！　と、緋緋神アリアから叩きつけるように放たれた緋色の波動――

緋緋神が纏う緋色のオーラを拡大したような、未知の斥力によって弾かれたからだ。

「……！」

「白雪っ……！」

自らが掲げた色金殺女を見上げて何歩か後退してきた白雪の背を、俺が支える。

吹き抜ける烈風は、身を焦がす程に熱かったが――

一瞬の事だったので、俺もなんとか耐えられた感じだ。

「――白雪、今の色金殺女は隙だらけの穴だらけだったぜ。今まで見てきた緋巫女の中で一番ヘタクソな制御だった。なんでそんな難しい術を、この大一番で、ちゃんと集中せずやった？　吹きで解除式できるなんて、拍子抜けしちまったよ。心ぐらぐら。ふふっ、あははっ！」

ははは、ははははっ！　――緋緋神の笑いが、神奈備に響く。

さっきまで緊迫感を持っていたのか、緋緋神アリアの額には冷や汗が残っていたものの……今の笑い声はもう、白雪を一蹴した勝利の高笑いって感じだ。

その理由も分かる。緋緋神を討つ逆位相の剣・色金殺女が、光を失っていくのだ。

今の波動は、白雪本体を狙ったものじゃない。

色金殺女の力を吹き消すための術だったんだ。

「……白雪……」

かしゃん、と、力無く――白雪はただの刀になってしまった色金殺女を、岩窒の足下に落として……その手で、自

らの顔を覆った。

そして……ひっく、ひっく……ひんっ……と、泣いている。

いや、さっきもずっと泣いていたのだ、白雪は。緋緋神アリアの方へ向かいながら。

「キンちゃん……私は……私には、できない。できなかったよ……」

緋祓舞・色金殺女と2種類の必殺技を使用した白雪はそれで力を使い果たし、立ってもいられなくなったらしく……

「迷ってはいけなかったの。他のことを考えては、いけなかったの。でも……」

その場に、崩れ落ちるように座り込んでいく。

俺も片膝をつきながら、それを支えた。

「だって……あれは、まだアリアに見えるんだもん……！」

うわあぁ、と、白雪は俺の胸に顔を寄せて――

堰を切ったように、泣き声を上げた。

「私はアリアを殺せない、キンちゃんの目の前で、そんなことできない……！　だって、キンちゃんは、アリアを……そうしたら、キンちゃんが悲しむから……！」

その足下で、色金殺女が――パキ、パキパキ、と……

見る間に、錆びていく。
抜け目の無い緋緋神が、もう甦らないようトドメを刺しているのだ。
自分を殺しかねなかった武器、色金殺女に。
「それでも、それでも、キンちゃんに嫌われても……私は……緋緋神を斬ろうと思ったの。もう嫌われちゃって、二度と会えなくなっても……どんなに自分が不幸になっても、緋緋神を解き放たないために。それが、緋巫女の定めだから。運命、だから……！」
「白雪……」
「でも、私は、キンちゃんのことを……諦めきれなかったの。キンちゃんを諦めるくらいなら、運命に逆らって不幸になった方が……どっちみち不幸になるんなら、キンちゃんのことを諦めないで不幸になった方がいい……心の奥底で、そう思ってしまったの。迷ってしまったの。考えて、しまったの……！」
迷い。それが生じると――
――人は、敗れる。
その戦いが遊びだろうと、世界の命運を賭けた勝負だろうと。
白雪にその迷いを生じさせたのは、俺だ。
何もできないくせに首を突っ込んで、ここまで踏み込んできた俺のせいだ。
だから――
「白雪、俺を諦めないでくれ。俺も、白雪を諦めない」
――責任は、取るぞ。
俺が。
お前の選択を、正しかった事にしてやる。後付けで悪いけどな。
「……！」
はらはらと泣きながら、白雪が……白い雪肌の手を、自らの口元に寄せた。何もかもがないまぜになった声を、その嗚咽を漏らさぬよう自制するために。

こんな時にも、本当にお行儀のいい子だね。白雪は。
「運命なんか、気に入らなけりゃ覆すもんだろ。俺も運命に従順なタイプじゃない。覆さなきゃ、生き残れなかったからな」
――『定め』？
そんなもんは無視だ。
みんなそうしてきたから。伝統だから。
それが当たり前だから。そうすれば、今まで通りだから。
日常でも、よく言われることだよな。そういうのって。
だがそんな事をブツブツ自分に言い聞かせながら同じ事を繰り返してたら、いつまでも変われない。永久に苦しみ続けることになっちまうんだよ。
事なかれ主義に甘んじて、不幸を受け入れ、不満を抱えながら現状維持をし続ける――
そんなのは、もうやめろ！
俺も、もうやめるから。そういうの一切合切。
覆す。ひっくり返す。終わらせる。俺たちの代で、俺が。今、ここで！
「あとな、白雪。不幸は俺の専売特許だ。勝手に取るな。お前のことは、俺が幸せにしてやるから」
「……キン、ちゃん……！」
ぽろぽろと真珠みたいな涙をこぼして俺を見上げ、絞り出すように、縋るように、俺の名を呼ぶ白雪……
白雪。お前は今まで、よくやってくれた。
この件――星伽がダメなら、遠山がやるぞ。いいよな？　それで。
立ち上がり、白雪を守るように、一歩前に出た俺を……
「いいもん見せてくれるなぁ遠山。あたしはそういうの大好きだぜ」
ゾクゾクきたような顔で……

茶化してくれるねえ、緋緋神さんよ。

「さあ、ジャマな刀も無くなって――これで決まりだな。遠山。アリアのことは諦めて、幸せになろうぜ。お前のことは、あたしが幸せにしてやるからさ！」

今の白雪と俺の会話をパロるような感じで言う、緋緋神アリア――

「アリアの事を諦めれば幸せになれるのか。じゃあ、諦めずに不幸になってやるよ。俺は元から不幸さに定評があるんだ。これ以上不幸になったって大差無いんでね」

――アリア。

「緋緋神、アリアは渡さないぞ」

――アリア。

「白雪を傷つけた事も、許さない」

この事態を解決できるのは――

やっぱり、アリア。

お前だけだ。

俺は、お前を信じるぞ。

かつてお前が言ってた精神。

あの信念を貫く事を、信じるぞ。

信じて、ここで命を張るぞ。

世間的には安い武偵の命で悪いが、俺にとっちゃかけがえの無い、世界に1つだけの命だ。それを張るんだから、このギャンブルも応援してくれよ？　アリア。

「緋緋神、今まで冷たくして悪かったな。お前は恋と戦いのどっちかをお望みらしいが……さっき、白雪は俺に戦わないでと言った。だから、戦わない」

俺はそう言って、緋緋神アリアを見据える。

残るは、恋。消去法でそうなるワケなんだから、これから俺がしようとしてる事を、々説明しなくてもいいだろ

う。
ヒステリアモードも曖昧になってきてて、真顔で『恋』とか発言するのも恥ずいし。
――だから、
「今、お前の所に行く」
俺は緋緋神アリアに、それだけ宣言した。
正直、恋なんて……
よく分からないんだよ、俺は。未だに。
だが緋緋神が欲しがるから、俺なりの表現をすることにしたんだ。
俺は、お前の所まで行く。
それだけだ。
だって……
戦いとは、斥力。退ける力だろ？　だから――
恋とは、その逆。引力。近づく力だと思うんだ。
だから、俺はお前のところに行く。
それが、俺なりのやり方だ。
「アリア」
あれだけ白雪に『アリアはもう死んだ』と言われ、緋緋神も自分の中にアリアの存在をカケラほども感じてない顔をしてるけど――
俺は、アリアの名を呼んだ。
「信じてるぞ。昔、地下倉庫で『生涯信じる』と約束した通り」
俺がアリアに語りかけるのを、当のアリアの肉体を使っている緋緋神はキョトンとして聞いている。
「お前はまだ死んでない。殺しても死なない女だもんな。あと……なんとなく分かるぜ。お前がそれをやろうとしてるのが」

「それって何だ」
「さっき自分で答え言ってたぜ、緋緋神」
緋緋神の問いかけには、雑に答え……
ザッ、と……俺は、歩き始めた。さっきの白雪と同様に。
アリア。お前にそれができるのか？
できるかどうかは、分からない。
この智（エネイブル）こと俺は、『できるかどうか分からない』からの『やればできるもんだな』をお家芸にしてきた。だが、お前にそれができるかどうかは分からない。
今できてないって事は、それにはきっともっと力が必要なんだろう。
力――遺憾（いかん）ながら、今や緋緋神（ヒヒガミ）とアリアは一心同体だ。アリアに力を与えるという事は、緋緋神に力を与える事に他ならないだろう。
緋緋神の力の源は、戦いか、恋。
その内、恋で力を与える。
俺（おれ）が与えるから、それを使って――
後は、お前がなんとかしろ。
それを実現しろ。
アリア。
「……キンちゃん……」
女の子座りしたままの白雪（しらゆき）の声が、背後から聞こえてくる。
俺がやろうとしている事が読めず、心配している声だ。
まあ見てろよ、白雪。とばかりに……
一歩、二歩、さらに俺は進む。
「来るな、遠山（とおやま）。お前、何をしようとしてるんだ」

「お前と、恋しようとしてる」
「――はぁ？　いッ……今……？　バカかよ……！」
かぁあぁあ、と赤くなった緋緋神アリアと、俺の間で――
ぐにぃ……と、何やら、空間が歪んで見える。
アリアへの距離が、遠ざかっていくような感じに。
これは――実際、緋緋神が空間を歪めているんだ。俺を近づけないために。
そのせいか、傾いで見える岩窒の天井から――パラパラと岩の破片が微細な砂となって降ってくる。ここの岩はガラス質の結晶を含んでいるのか、キラキラと美しく燦めきつつ。
「大がかりなことすんなよ、緋緋神。男に迫られてイヤだったら、逃げればいい。昔から、世界のどこでだって、女はそうしてきただろ」
ズンッ……ズズンッ……
緋緋神の闘気による微震が、再び始まっている。怒ってるのかな。
ぴっ、ぴしっ！　と、緋緋色金に掛けられた注連縄から垂れ下がる紙垂に切れ目が入り、あるいは細かい火の粉を散らして吹っ飛ぶ。
乃木坂や八甲田山で木の葉なんかを弾けさせてたのと同じ現象だ。シロウト考えだけど、プラズマとかかな。
「あ、あたしが？　逃げる？　あたしは戦神だぞ。逃げるなんてできっかよ！」
「じゃあどうする」
「こ、これだって太古から女がやってきた事だ――突き飛ばしてやるッ！」
――ッッッゴウウウウウウウウウウッ――！
と、さっき白雪を押し返した緋色の斥力が、火炎放射器のような威力で吹き付けてきた。
さっきの20倍、いや、30倍は下らない威力で。
「――！」

ガスンッッッ！　と、俺は足の桜花で踏みとどまる。
自力だけじゃない。緋緋神の斥力を、完全にではないまでも――何割か遮る、見えない超能力的な力場が俺の周囲に生じているのだ。太陽風プラズマから地球を守る、磁場圏のように。
「……キン、ちゃんっ……！」
光沢を持つ緋緋色金の表面に、背後の白雪が映っている。俺に向けて両手を突き出す、その光景で視覚的に分かった。白雪は残り僅かな力を投げ打って、俺を守るための力場を作ってくれているのだ。
――ゴウッ――ゴウッ！　と、何度も、緋色の斥力の波が放たれてくる。
そのたび、ガツンッ！　ガツンッ！　と、むしろ俺は桜花で踏み出す。
これは――斥力と、引力の勝負だ。
……戦と、恋の、勝負だッ……！
一歩ごとに桜花を使うせいで、体力の消耗は激しい。
白雪の助けがあっても、俺の体には阻み切れない熱が伝わってくる。
熱い。燃える。燃えてしまう。
苦しい。辛い。
だが、恋ってそういうもんなんだ。きっと。
だから――
「……うおおおおっ……！」
俺は、緋緋神に近づいていく。緋に、火に、近づいていく。
近づけば近づくほど、緋色の烈風の威力は増す。
今やそれはもう、炎の波動――
「来るな、遠山ァ……！　熱いんだろう!?　下がれよォ！」
緋緋神アリアはやはり、緋緋色金のＵＦＯの上から移動する事が今はできないらしい。
自分は引かず、とにかく俺を遠ざけようと攻撃の手を強めるばかりだ。

「さっきまで雪山で、寒かったからな。今は暑くて、ちょうどいいぐらいさ」
吹き付ける炎の波を突き破って、俺はアリアに近づいていく。
2人の距離は。
あと、7mだ。
「盛大な、ツンデレのツンってやつだろ。お前の、これ。理子が言うところの」
目には目をで、さっき茶化された俺が緋緋神にそう言うと――
かあああぁあっ……！　思いっきり赤面した緋緋神アリアは、口ゲンカ中に図星を突かれた女の子そのものの表情を見せた。
恥ずかしくて、ムカついて、っていうそんな顔を。
「わ、わ、分かりきったような顔すんな！　は、腹立つぜ……！」
「腹が立つ？　それは嬉しいな」
「なんでだよッ！」
「たいてい、うまくいく男女の第一印象は悪いからだ」
ヒステリアモード的な事を言って、ガスンッ！　と、また一歩近づいた俺に、
「――ッ！」
真っ赤になって、緋緋神アリアはセーラー服のスカートを跳ね上げ――
――白銀のガバメントを抜いた。
そしてすぐさま、バツンンンンンンッ！
通常の発砲音とは異なる、超能力による加速弾を放ってきた。
その弾速は推定マッハ8～9。絶対に避けられない。右にも、左にも。上にも下にも。
だから――ギイイイイイインッッッ！
対する俺は、真っ正面から.45ACP弾をブッたぎった。
元スクラマ・サクスの、マニアゴナイフで。

――銃弾斬り。

アリアと当たった最初の大きな事件、理子との戦いの中で使った技だ。

俺の顔面の左右を、真っ二つに断たれた弾丸がそれぞれ通過していく。

――ツバッ！　バオッ！

それを追うように、前そしてナナメ下から、俺に熱風が吹きつける。

「遠山ァっ！　お前は、なんであたしを否定するんだッ！　どうして、楽しく生きようとしないんだよ！　恋と戦いで、遊ぼうとしないんだ！」

ヒュルルルッ！　と、熱風を切って、緋緋色金の左右から扇風機の羽根のように回る剣が2本、緋緋神アリアの手元に飛び上がっていく。歴代の緋巫女たちが遺していった、青銅の剣だ。

緋緋神アリアはそれを、

「人生なんて、遊びだろ！」

大きな手のようにしたツインテールで、俺めがけて投擲してくる。それぞれ回転させたまま。

俺は前に出ながら、軽くトスした自らのナイフを小指と薬指に挟み――

――バシッ――バシッ！

「どっちも、俺は遊びでやってないんでね」

左右の手による二指真剣白刃取りで、左右ともに受け止める。

アリア・白雪・俺。今と同じパーティーで戦ったあの地下倉庫で、ジャンヌの剣を受け止めた技だ。

「――もう……殺す！　遠山、お前はもう殺すッ！」

アリアとそっくりな地団駄を踏んでスカートを跳ね上げさせ、漆黒のガバメントも抜き放った緋緋神は――

バツンッ！　バツンバツンッ！　今度は二丁拳銃の超加速弾で、俺を撃ってきた。

「俺が殺す気だったら、緋緋神。お前はとっくに死んでるぜ」

マッハ4の弾丸に対し、青銅剣を捨てた俺は――突き出した左右の指を＃形に構え――ココ姉妹に東京駅で見せた

技、スラッシュで弾丸を払う。

触れる瞬間だけ秋水で加速する事で、この技も最近はオロチ無しで出来るようになってきた。

「お前は延々と生きられるし、死生観が人間と違う。たとえ死んでも体は借り物で、本体じゃない。だから、死んでも後がある、次があると思ってる。それで隙だらけなんだ」

さらに飛来した超音速弾は、こっちも抜いたベレッタで銃弾撃ち――ブラド戦で使ったあの技を使って散らした。

緋緋神の影響で空間が歪み、蜃気楼で照準がズレる事も計算に入れた曲撃ちで。

「だが人間は常に後が無い。死ねば終わりだ。だから、腹を括ってる。その時点で、お前より俺の方がこの戦いに賭ける想いが強いんだ」

弾の嵐をくぐり抜け、とうとう桜花で踏み出す俺の足が――緋緋色金のＵＦＯ、その縁に掛かる。

緋緋神アリアまで、あと５ｍだ。

「寄るな遠山ッ……それ以上、寄るなッ！」

「恋が怖いのか。恋心を司る神のくせに」

だけど、男と女の間の５ｍは遠いものだ。

「うわあああああっ！」

緋緋神アリアは、バスバスバスバスッ！

ガバメントを連射してくる。灼熱の波動と共に。

炎と見分けの付かないようなその波動に巻かれながら、俺はワトソン戦で使った螺旋、ヤクザ相手に使った銃弾掴みで弾丸を逸らし、或いは掴み捨てる。

「お前は、孫やハビやアリアを使って――アウェー戦ばかりやってきた。遠隔操作で駒を使ってばかりで、直接戦に慣れてない。自分の体を使って敵と直接戦ってばかりきた俺と、ホーム戦になった時点で……お前はもう追い詰められてたんだ、緋緋神ッ！」

ガスンッ、と、俺の足が緋緋色金の斜面を登り始める。
緋緋神アリアは、今や炎の中にいる状態だ。
俺はそこへ向けて、その炎を掻き分けて歩いている。
距離が近づけば近づくほど、高温になっていく。緋緋神という熱源に迫り、炎と自分が一体化していくような錯覚さえする。
その熱に浮かされるようにして、俺の意識が薄れ始める。
俺は今、前進しているのだろうか。
その意識はあるが、もう――
体が、燃え上がっているようだ。
『キンジ』
父さん。
父さんの。
声が、聞こえる。
ような、気がする。
『キンジ』
殉職した、父さんの声が。
幼い頃に父さんと語った会話が、俺の脳内でリピートされている。
走馬燈のように、ゆっくりと。
『ＨＳＳは、最強じゃない。最弱なんだ。世界の半分の人間は、たやすく俺たちＨＳＳを殺せるんだから』
世界の半分の人間？
それは、誰？
『それは、女だ。女のためになら、俺たちＨＳＳは命を投げ打ってしまう』
じゃあ、そうならないようにするためにはどうしたら……？

『自分を殺しに来た女を、惚れさせるのさ』
どうやって？
『愛してあげなさい』
愛して……
『それができれば、ＨＳＳは最弱から最強になれる』
――炎の中で、緋緋神アリアと――
接触した。
左右から、ツインテールでできた大きな拳が俺を挟むように殴ってきて……右を桜花で、左を橘花で逸らし……そこからの絶牢で回すように弾いて、テールの門を開く。
触れられる圏内に入り込む。
緋緋神アリアに、手を伸ばせば届く範囲に。
だが、あと一歩、及ばなかった。
燃え盛る、緋緋色金の上で――
俺は――息絶えている。
立ったまま、既に。
それが、分かる。
心臓が停止している。
理子と戦った、ハイジャック便での……あの時の、アリアのように。
「――――」
武偵憲章ッ。
10条！
（――回天ッ――！）

諦めるな！

武偵は決して、諦めるな！

俺はヒステリア・アゴニザンテによる覚醒と共に、自分の心臓に亜音速の振動を与えた。

心臓を自分の肋骨の内側でバウンドさせまくる、恐らく世界一乱暴な心臓マッサージによって――

甦る。甦らせる。自分自身を。

そして、

「――ッ！」

最後の一歩を、詰めた。

「……！」

いま目の前に、緋緋神アリアの。

驚きに見開かれた、赤紫色の瞳が見える。

ジャンプして俺を緋色金から蹴り落とそうとした、アリアのアンヨの――膝裏を抱え、背中を抱え、久々の――

お姫様抱っこを、してやった。

出会ったあの日、体育倉庫でしてやった時のように。

そして、

「この桜吹雪――」

恋とは、男と女がとことん近づくこと。

2人の距離を、ゼロにするということ。

つまり、こういうことだ。

ああ、安心していい。炎の中での出来事だから、誰にも、白雪にも見られてはいないよ。

ここは俺たちだけの、火の――緋の、お城だ。

「――見忘れたとは、言わせないぞ？」

そうして、俺は……桜の花びらみたいなアリアの唇（くちびる）へと、辿（たど）り着（つ）いた。

『ああ……』

俺の頭の中に、直接聞こえてくる。

ビックリしてる緋緋神（ヒヒガミ）の、心の声が。

『恋してる』

緋緋神。

俺の勝因は……

緋緋神、君が女だったことだね。

君は戦いたいだけ戦い、俺は恋したいだけ恋したつもりだ。

『恋してる。恋してる。恋してる』

だからこれでもう、満腹だろう？

そして、さあ。

起きておいで、アリア。

眠ったお姫様を目覚めさせるのは、キスなんだろう。それはかつて、兄さんも言ってた事だ。だから、そこに不思議はない。

という、俺の想いの通り――

そのキスは、前半は緋緋神と、後半は……アリアと、してる感覚になっていく。

――ああ、アリア。

やってのけたんだな。

目には目を、歯には歯を、乗っ取りには乗っ取りを。

（……やっぱりお前は、本当に勝負強い女だよ……！）

いや、そうさ。

そうでなきゃ困る。

お前は俺と生きるも死ぬも一緒の、パートナーなんだからな！

「つぷはぁ！　こらっ！　調子乗らない！　このバカキンジ！」

がすっ！

ちっこい手が、俺の顔面の中心・中央をストレートで打ち抜いてくる。

この殴られ感。

アリアだ。

アリアが帰ってきた！

ぱあああぁぁぁぁぁっ――と、緋色の烈風は渦を巻いて拡散し、消えていき――

「……アリア……!?」

ようやく改めて見えた緋緋神が、俺にお姫様抱っこされていて――アリアに戻っている事に、白雪がすっとんきょうな声を上げて仰天してる。

そう。

アリアは、かなめと戦った時――目には目を、歯には歯を、科学には科学を――と考え、先端科学のホバー・スカートを装備し、かなめの先端科学兵装に立ち向かった。

俺がさっき想起した品川のイメージは、その戦地となった火力発電所の光景だったのだ。

そして今回は、『乗っ取りには乗っ取りを』。

ビギナーとはいえ超能力を習っていたアリアが、ぶっつけ本番の応用技で――緋緋神を、乗っ取ったのだ。乗っ取られた体を取り戻すために、その魂に憑依し返したのだ。

そんな事が、何の練習もナシに一発で出来ちまうとは。

「アリア！　やればできるもんだな、お前も！　さすがだぜ！」

感極まって、俺は抱っこしていたアリアのちっこい体を改めて抱き寄せる。

……が。

ごちんっ。

今度は顔面じゃなく、後頭部に何か硬い物がぶつかった。

「……痛って……！」

「キンジ！　細かくは後よ！　早くっ……避難しないと！」

後頭部を押さえてしゃがむ俺から降りたアリアは、シュルーッ！　緋緋色金のＵＦＯを滑り台みたいにして、去っていく。

お礼の一言もなく置き去りにされた俺の頭に、背中に、ごちんっ、ごつんっ、と、次々石が落ちてくる。岩室の、天井から。

「……！」

崩れつつあるのだ。この、岩室が。

「ここ、今まで、緋緋神が地盤……地脈？　を、ずいぶん無茶な押さえ方してたみたいね。崩れるわ」

上を見て急に超能力的な事を言うアリアの向こうで、この広間からの出口となる通路が――無数の鳥居ごと、崩落していくのが見える。

（ヤバいっ……）

このままじゃ、ここに生き埋めになっちまう。

俺も緋緋色金から駆け下りるが、落盤のスピードは速い。
今はもう、天井から砂利が雨のように降り注いでいる状態だ。
「……そんな。神奈備が壊れるなんて……千年以上、どんな地震があっても崩れなかったのに……！」
岩室が崩れ出すとは思っていなかったらしく、キョロキョロしていた白雪――めがけて、上からズルリッ……と、自動車サイズの岩が……落ちて来かけている！
「「――あぶないッ！」」
俺とアリアが同じタイミングで白雪に飛びつき、緋緋色金の方へ引っ張り寄せる。
スレッスレのタイミングで――
――ズドンンンンッッッッ……！
落雷のような轟音を上げ、白雪を掠めるように岩盤が落下した。
その落盤で立体パズルのピースが抜けたように、大きな岩がドッカンドッカン落ちてくる。
もう、逃げる逃げないじゃない状態になったぞ。
――とにかく、身を守らないと。
（……！）
岩から剥離したガラス質の混じった上煙が立ちこめ、周囲の視界はほぼ利かなくなってしまった。だが、俺の手が白雪を掴んでいるのは分かる。アリアもいる。
なので俺は――ドンっ、ドンっ、と――緋緋色金ＵＦＯの壁面に2人を押しつけた。
そして落石に潰される確率を少しでも減らすため、コンパクトに座らせる。壁にドンと押しつけられた女子は身を縮こまらせる本能があるのか、そこは2人とも従ってくれたよ。上煙のせいでよく見えないが、多分アリアは体育座り、白雪は女の子座りで。
後はもう、運任せだ。
「……ッ……！」
俺は緋緋色金に手を突き、2人に覆い被さるように立って自分の背を屋根にする。

俺の背中には真上から射撃されてるように次々と石が当たり、がつんっ、がつんっ、と、背骨を粉砕しかねないサイズの岩も落下してくる。

その責め苦が止まる事無く続くもんだから、痛いの痛くないので心が折れそうになるぜ。

背には次第に、乗ったままになる石や岩が重みをかけてくる。

落石が当たる痛みは緩和されるが、刻一刻とその重さが増していくので――

（……う、うっ……！）

がつん、と、俺は片膝を突いてしまう。

緋緋色金はボンヤリ発光し続けているので、視界が真っ暗になる事はないが――目が、チカチカしてきた。口には、体内から上がってきた血の味が満ちている。

（もう、限界って事かよ……っ……）

だが俺の真下には、縮こまったアリアと白雪がいる。

2人を、守らないと……！

「キンジ！」

「キンちゃんっ……！」

アリアと白雪の声が、遠く聞こえる。すぐそこにいるのに。

チクショウ。ここまで生き延びてきたのに。ここまで戦い抜いたのに。

こんな形で、こんな所で。

俺は、俺たちは。

（……おわり、なの、かよ……）

桁外れの圧力が真上からかかってきて、俺が自分の意志とは関係なく前のめりに倒れたその時――足下から巨大なシンバルを鳴らすような轟音が響き、俺たちは跳ね上がった。

アリアと白雪が俺を抱き留める、その感覚に続いて……日跳ねた体が、転げ落ちる。

そうして、3人とも岩に潰されるかと思ったが……違った。

「……っ……？」

俺を上から圧していた岩や石は、背中から脇に落ちただけだ。俺の体は、文字通り肩の荷が下りたような状態になっている。

倒れた身をよじり、ボンヤリする目でなんとか上を仰ぐと……

俺たち3人は落盤の影響でシーソーのように揺れた緋緋色金から振り落とされ、むしろその下にナナメに出来た空間に潜り込むような形で――

――助かって、いる。奇跡的にも。

笠のような形だと思っていた緋緋色金のＵＦＯが、偶然、本当に笠となり……続く落盤からも、俺たちを守ってくれている。

この幸運っぷり。ルルや粉雪が武運を祈ってくれたおかげかな。

「落盤が……終わってきたわ」

天井のようになっている緋緋色金に触れながら、アリアが呟き……

でかいシンバルを打ち鳴らすようだった落盤の音が、止む。

（……）

緋緋色金は薄ボンヤリ赤く発光しているので、周囲は赤色灯で照らされた室内みたいに見えるのだが……

出口は、なさそうだ。

生き埋めか。さっきは幸運だとか思ったけど、世の中そこまで都合良くはいかないね。

だが、

「……とりあえずここは、緋緋色金のおかげで助かったってワケか」

地中に閉じ込められはしたものの、ひとまず3人とも命拾いしたのは確かなようだ。

俺は緋緋色金の屋根を見上げて、苦笑いし――

「さっきまでは敵だったが、最後は偶然とはいえ味方してくれたみたいだな」

ヘタに周囲の岩をイジって今の均衡を崩れさせたりしないよう、静かに座り込む。
俺の体はあちこちからかなり出血してるっぽいが、緋緋色金の光のおかげで目立たない。
まあ傷が見えたところで辛さが増すだけなんで、これはこれで気が楽かな。
「実際、そうみたいよ。キンジ、これはあんたの特技ね」
俺たちの屋根になってくれている緋緋色金ＵＦＯの底を見上げて、アリアが呟く。
九死に一生を得たこの奇跡に、何かコメントがあるっぽい感じで。
「これって何がだよ」
「――いつも戦った相手を仲間に変えるでしょ、あんた。それが緋緋神にも通じたのよ」
にこ、と、犬歯を見せて笑いかけてきたアリアに……
ブラドとかセーラとか妖刀＆魔剣とか腐るほど反例は脳裏をよぎったものの、
「じゃあ俺の手柄ってことにしといてくれ。あとで料金取るぞ」
お金持ちのアリアさんに恩を売れるビジネスチャンスは、しっかり掴んでおいた。
実際ここに至るまで、けっこう経費もかさんでますんでね。
しかし――マジで請求書を作るつもりの俺を、「クスッ。キンジも極々たまには面白いジョークが言えるのよね」と笑ったアリア。
（……アリア……）
この、アリアは……
身も心も……本物の、アリアだな。
ドキッとしちまう、その可愛い笑い方は。
お前もやっと緋緋神の呪いが解けた、そんな感じだよ。
一方、白雪は――
「……キンちゃん、アリア……ごめんね……私、ずっと、2人に隠してた。こんな大事なことを……」

めそめそ泣いてるせいで、俺の負傷に気づかないでくれており……鬱陶しい事にならず済んでる。
俺は白雪には何をふっかけようかなと一瞬思ったが、
「隠しきれてなかったでしょ。はい泣かない」
悲しい空気がキライなアリアが、平たい胸を張ってそう仕切ってしまう。
実際、ここまで大きな事となると……
言えなかったのを責める気には、なれないな。
白雪の性格も加味して考えると、なおさら。
むしろ最後の最後に、粗方ちゃんと説明してくれたのを誉めてやりたいぐらいだ。
「さっき神奈備が崩れてきた時、私……きっと、自分は天罰で死んじゃうんだって思ったの。でも、キンちゃんとアリアが助けてくれて……」
つぶらな目に涙をためて、白雪がクドクドお礼を言ってきそうになった時――
「それは武偵憲章1条。ううん、それ以前の話よ。仲間を助けるのに理由がいる？」
肩をすくめたアリアが、それも遮ってくれた。
俺も、アリアに異論ナシだよ。
本当に、理由なんて無かったからな。
さっきの落盤から白雪を助けたのも。ここまでアリアを助けに来たのも。
男が女を助けるのに、いや、人が人を助けるのに――
理由なんて、ないんだよ。
しばらくすると、人間にはくぐれない狭い岩と岩の隙間を縫って……コロコロコロ……と、どこかで見覚えのある和風の毬が自走してきた。
「――玉藻か」

座り込んだまま俺が呼ぶと、ぼんっ。
白煙を上げて、毬は四つん這いの玉藻に変化した。
体の向き的にセーフだったが、そのミニスカート和服で這うポーズはマジほんとやめてほしい。お前、下着はいてないんだし。
玉藻は緋緋神アリアを殺す派だったので、一応警戒する俺と――神道業界的には玉藻が目上の存在らしく、正座する白雪だったが……
当の玉藻は、
「……なんと。なんとっ。アリアお主、緋緋神に憑いておるのか」
アリアを見て、くりくりお目々を見開いてブッたまげてる。
「たぶんそうよ」
「ど、どうやったのじゃ」
「イメージしただけよ。オバケに人が憑依される絵本を小さい頃に読んだ事があったから、そのオバケになったつもりで」
アリアの『小さい頃に』という発言に俺は「今も小さいじゃん」とツッコみたかったが、ツッコんだら風穴なのでやめておいた。
「そんなに驚くことじゃないでしょ。あたしに緋緋神がやった事を、やり返しただけよ。向こうがこっちの精神を乗っ取れるんなら、その逆もできて当然だわ」
「……と……」
「……当然……」
胸を張るアリアに、玉藻と白雪はポカーンと口を開けて絶句してる。
「アリア、お主が『いめーじ』するだけで術式を使える天才だったとしてもじゃ、憑こうにも――緋緋神には隙など無かったろう。緋緋神の強い式力の障壁を、いかに超えた」
尋ねる玉藻はまるで超能力の天才、神童を見るような顔をしてるが、俺のカンじゃ――アリアは天才とかそういう

のじゃないね。単に直感で勝利への道筋が見える、ギネス級の勝負強さを持った女なんだよ。

「障壁？　緋緋神がキンジと戦ってる時に見えてた、濃い緋色の壁みたいなものかしら？　でもそれ、キンジが近づいてきたら……薄い緋色のがもう1枚出てきて、2重になったわ。それで相殺されて、消えたの」

「……恋と戦の超伝導……！」

「ぜ、絶対零抵抗……そ、それこそ最新の心技じゃぞ」

唖然とする白雪と玉藻が、自分たちだけで超能力的なカラクリに納得してるようだったので――説明させたところ

緋緋神の心の中で、恋と戦の相反する感情がごっちゃになって昂ぶる……理子語で言うところのツンデレという状態が起きた時、そこに共感できる者は抵抗なく心に入り込めるのだという。ちょうどまるで、臨界温度で電気抵抗がゼロになる超伝導のように。

……と、物理学に喩えて解説されても……

物理の成績がアレな俺には、結局さっぱり仕組みが分からなかった。

どうせシロウトなんだし、もう今後そっち系の話は聞くのやめようかな。白雪に丸投げしちゃうとかどうだろう。

昔この玉藻も言ってたもんな、星伽と遠山は役割分担しろって。

で、その玉藻だが……

生まれつき悪い目つきの俺がさらに目つきを悪くして睨みを利かせてるのとは関係なく、もうアリアを殺害したりはしなさそうだった。最初は全く想定してなかった形でアリアの緋緋神化問題が解決した事に驚いていたが、その危険性が除去された事を確認・理解するスピードは速く――アリアに近づいて「真に誠に、緋緋神を乗っ取っておる。いやこれは面妖な……」などと自分こそ面妖なくせにマジマジ見たかと思うと、鼻でフンフン匂いをかいだりしてた。ニオイで何か分かるのか。

「あっ……キンちゃん。電波、電波が来てる……1本……」

「ん、んん？」

白雪系の女の子が『デンパ来てる』とか言うのにはそこはかとなく恐怖感が伴うので、少し身構えちゃいつつ向き

直ると――手にエアリーホワイトの携帯を持ってる。なんだ、携帯のことか。
見れば実際、光る画面の中ではアンテナマークが1本立っている。
粉雪は神奈備を圏外だと言っていたが、落盤で天井が抜けたみたいになって電波が入るようになったらしい。
もう今や、ここは立入禁止とか言ってられない状況なので――
俺はここに救助を呼ぶよう指示し、白雪も素直にそうした。
で、白雪は妹たちに事のあらましをうまく話し、星伽の連絡を受けた弘前消防署の分署からはレスキュー隊が呼ばれる事になった。要救助者、つまり俺たちのいる場所を教えるために玉藻が岩の隙間から出ていき……
緋緋色金の下は改めて、アリア・白雪・俺の3人だけになる。
「レスキュー隊の到着まで3時間かかるって。ごめんね、星伽が山奥で……」
「俺たちが救出されるまでは、何時間かかる事やらだな。まあ寝て待つさ」
と、白雪と俺が語る脇で――
「ふーん」
アリアは手を腰に当て仁王立ちし、ツヤツヤした緋緋色金の底を見上げていた。
「へぇ。あんた、そんな事で悩んでたの」
……なんか、独り言してるんですけど？　アリア。
UFOで出来た天井を見上げながら。
「恥ずかしがることないわ。あんたの気持ちはあたしもよく分かるから」
「何だアリア。誰と喋ってんだ」
「緋緋神よ。この子がなんで荒れてたのか、心を見させてもらってたの」
うわぁ……
発言がもう普通に超能力者さんだよ、アリア。
「えっ？　うん……そうね、じゃあ喋らせてあげる」
と、アリアが上を向いて言うと――

鏡のようにツヤツヤしてる緋緋色金の天井に、女の子みたいなものが結像していき……

スルリ、と、赤い霊体みたいな物が出てきた。

逆さまの水面から浮かび出るような調子で。

「……っ……」

俺と白雪は驚きつつも、並んで赤面してしまう。

というのも、その霊体は裸の――ツインテールを解いてロングヘアになった、アリアの姿をしていたからだ。アメリカで裸体のサラ博上となって出てきた瑠瑠神と同じで。

上下逆の自分がマッパなのを見て、

「～～～～～なんで裸なのよ！」

アリアは薄赤い光の中でもハッキリ分かるぐらい、真ピンク色に赤面した。そして、

「――服着る！　風穴開けるわよ！」

「あ、あたしたちには決まった形が無いんだよっ。だから、その場の人間に攻撃されないような女の形を借りるんだ。いくら好戦的なお前でも、自分を無闇に攻撃しないだろ」

音声で言い訳しつつ、緋緋神……と思われるその霊体は、パッとセーラー服っぽい靄で自らの体を覆った。

「何よ好戦的ってッ。あんたほどじゃないわよこのドベ！」

アリア……神様と呼ばれた宇宙生命体に対してまで、上から目線だなぁ。さすが生粋の貴族様だ。他を見下す事に迷いがないぜ。

ふわり、とスカートを押さえるような仕草を一応しつつ上下を回転させたアリア緋緋神は……アリアの隣で、ふてくされるようにあぐらをかいた。空中で。

「じゃあ緋緋神、あんたの本心をここの2人に教えちゃってもいいかしら？」

「ダメって言っても言うんだろ」

「聞かせれば、情状酌量してもらえるかもしれないわよ？」

「……」

アリアと緋緋神がそんな話をして、俺と白雪が「？」という顔をしていると……

「この子、ママに会いたいんだって。でも会えないから拗ねてたのよ」

そんな話をアリアが俺たちにバラし、緋緋神は恥ずかしそうにソッポを向く。

（……ママ？）

瑠瑠神とか璃璃神を姉妹としていたから、緋緋神に母がいても驚くには値しないが――

それに会いたい、とは？

「緋緋色金に乗り移って、記憶を見させてもらったんだけどね。大昔、隕石っぽく宇宙を渡ってた緋緋・瑠瑠・璃璃の三姉妹は……地球の近くを通った時に、引力に捕まって墜落しちゃったの。これは海の果てで船と船が偶然ぶつかるような、極めて低い確率で起きた交通事故みたいな出来事だったらしいわ。タイミングは違っていたけど、三姉妹は並んで飛んでたから、順繰りに落っこちた」

アリアが語る、緋緋色金の記憶は……

地球側の星伽から観測された『緋緋色金は天から墜落してきた』という伝承に合致している。

「――あたしたちはお前たち地球人の分類でいう、自由浮遊惑星だ。他の天体に重力的に束縛されないで銀河を直接公転する、ちっちゃくても地球より高等な星なんだぞ」

星に高等も下等も無いと思うが、とりあえず緋緋神はエラソウに胸を張ってる。

「そういうもんだから、あたしたちにはお前たち人間のようにちょこまか動く習性はない。自分の最近傍の空間を曲げながら恒星が放つプラズマを受けて、帆船みたいに動くのさ。だから宇宙空間でしか動けないし、動くといってもゆるやかに方向転換するぐらいだ」

そんな、いかにも宇宙から来た感バリバリな事を言う緋緋色金は――

確かにその形状はＵＦＯっぽくとも、地球上で自律的に飛行したりはしなかったよな。

動く動かないで言えば、動かない。俺たちから見れば、石と同じだ。

「この星の引力は大きい。磁場があるせいで恒星のプラズマもほとんど届かない。それで、あたしたちは宇宙に還れなくなった。ここで生きるしかなくなったんだ」

今は屋根のようになっている自身の向こうにある、空――その先の宇宙を見上げるような緋緋神の目つきは、悲しげだ。今アリアが言っていた、その先にいる母の事を想っているのかもしれないな。

緋緋神に対して、今アリアがどことなく同情的な口ぶりなのは……

アリアの母も無実の罪で投獄され、会えない状況が続いているからなのだろう。

「宇宙には、その……母ちゃんがいるのか。お前の」

アリアの顔で悲しそうにされると、俺もつい緋緋神に同情的になってしまい……身の上話を聞くモードになってしまう。

「いる」

「何色なんだよ」

「金色だ」

「じゃあ金色金だな」

なんかド素人の俺のせいで話がズレてきたような気もするが、緋緋神は応じてきて、

「ママは地球の衛星軌道に自分の粒子を周回させて、墜ちたあたしたちをずっと見守ってくれてる。ママは凄いんだぞ。小質量でも大出力。優しいから、人類にも割と力を貸してやってるんだぞ。古墳とかピラミッド形の受信器を作った人間には、力を与えて――ほら、お前の義理の姉貴のパトラも力をもらってたろ。あれは、あたしのママの力だ」

話がズレたところで、色金と遠山家の意外な関係も発覚した。

そういや『パトラは星から力を得る』とか、ヒルダがスカイツリーで言ってたな。あれは、そういう事だったのか。

だが、その辺は正直どうでもいいとして――

母親の自慢を嬉々としてする緋緋神の笑顔は、その造形の元となったアリアと同様……少々マザコン気味というか、ママが大好きらしい。

地球の衛星軌道に自分の粒子、つまりたぶん体の一部を周回させてまで娘たちを見守る金色金にもまた、子を想う親の気持ちがあるんだろう。

それが、地球の重力によって断たれちまってるってワケか。

俺はさっき犯罪心理学的に、緋緋神が刺激を求め、恋と戦を振りまこうとした動機――何らかの欲求不満を突き止めようとしたが、それはある種のホームシックだったわけだ。地球に引き寄せられ、母のいる宇宙に還れなくなった悲しみ。壮大だな。

そして、それはどうしようもない事だろう。コイツは、俺たち地球人が空想するようなＵＦＯみたいに自由自在には飛べないんだから。

そう。色金たちは二度と、地球を離れられないのだ。

それで、どうせ還れないならと……

緋緋色金は地球で楽しく過ごそうと考え、妹の璃璃色金・瑠瑠色金はそれが地球の環境破壊になるので制止しようとした。それが色金姉妹の骨肉の争いにも繋がったって事だ。

と、俺がこの悲劇的かつＳＦ的な状況を頭の中でまとめていると……

「緋緋神、あんた――物事をすぐ諦めるわね」

欧米人のよくやる『やれやれ』のポーズをしたアリアが、アリア緋緋神に溜息してる。

「？」

俺と白雪と緋緋神がアリアの方を見ると、アリアは緋緋神の方をしっかり見据えて、

「なんとかしてあげるわよ、緋緋色金。あんた宇宙に帰りたいんでしょ？　ていうかね、宇宙に限りがあるのと同じで、命には限りがあるわ。ヒマ潰しも悪くはないけど、本当にやりたい事をやらなきゃダメよ」

ちゃんと話してあげてる。

敬うでもなく、蔑むでもなく。いち地球人と、いち宇宙人として。

「星もいつか死ぬんでしょ？　本当にやりたい事をやって生きないと、カンオケに入る時後悔するわよ。ママに会いたいならヒマ潰しなんてしてないで、会いなさい」

「簡単に言うけどなアリア。あたしは宇宙どころか、1㎜も飛べないんだ。だから、もう二度とママには会えないんだ。ムリなんだ。不可能なんだ……」

「だそうだけど、どう思う？　不可能を可能にする男さん？」

緋緋神と話していたアリアが、腕組みして俺に振ってきたので――

「『ムリ』とか言うと風穴開けられるから、言わんようにしとけ。あと『疲れた』と『面倒くさい』だったかな」

と、緋緋神に忠告しておいた。だが、

「……しかしなぁ、俺にもちょっと難易度高いと思うぞ？　これを宇宙に返すとか」

コツンと天井を手の甲で叩きつつ、眉を寄せてアリアにそう言う。

「キンジあんた、看板に偽りアリね。今日からあたしが不可能を可能にする女を名乗ろうかしら？」

イタズラっぽい含み笑いをしながら、アリアはパールピンクの携帯を取り出してる。

何だ、この流れ。

イヤな予感がするな。

という俺の心配に拍車を掛ける感じで、アリアは白雪に妙な事を聞いた。

「白雪。あんたたちの一族は、この巨大な緋緋色金のお世話をしてきたのよね？」

「う、うん」

「あのね、今からあたしも世話焼くわ。根源的には同じ事してるんだから、ジャマしちゃダメよ」

「？」

続けてアリアは、くるり。

ピンクのツインテールを波打たせて振り返り、緋緋神にも妙な事を聞く。

「さて緋緋神、質問よ。ちょっとこれはあんたの心を読んでもイマイチ分からなかった事なんだけど――あんたの能

力を、あたしはどんな遠くからでも使えるの？」
「その胸の緋弾が、お前から外れさえしなけりゃな。もうお前はそいつで、あたしの心に自分の心を接続できてる。色金は、にして全、全にして一。その接続は次次元で行われているから、三次元的な距離の遠さは、切関係ない」
「ＯＫ。じゃあ交渉しましょ。武偵は何でも屋。犯罪者を強襲・逮捕するだけが仕事じゃないわ。たまにはこうやって、別の仕事の営業もするのよ」
「？」
「あたしはあんたの悲願を叶える。宇宙に返してあげるわ」
割と交渉には強いアリアが、緋緋神を飲むような感じでそう切り出す。
「えっ」
「おいッ」
「ええっ？」
緋緋神、俺、白雪が揃って驚く中――
アリアは有無を言わさず、話を進めていく。
「その代わり、報酬を要求するわ。それは、あたしを曾お爺さまが下さった名前の通り、本物の――『緋弾のアリア』にすること」
――緋弾のアリア。
それはシャーロック・ホームズがイ・ウーでアリアに継がせた、栄誉ある名。
その名の意味するところは、緋緋色金の力を使いこなす超能力者。
今まで概念上のものでしかなかった、現代の超能力者を超えた――
――超々能力者だ。
「つまり、生、無制限に、あんたの力をあたしに使わせなさい。法結びはこのままキープ。心結びはあたしから話しかけた時だけ開通すること。あんたが使った超々能力の使い方も、ちょっとずつでいいから教えなさい。今のところ、あたしにも確実に使い方が分かるのはレーザーぐらいだわ」

お、おいよせやめろ。
ていうかアリア、も、もう分かるんかいアレの出し方が。
アリアは――
どうやるのか知らんがこのＵＦＯを宇宙にブン投げて返し、その報酬として緋緋色金の力を全て自分の意志で使えるようになるつもりなのだ。
「アリア……」
その時、少し警告するような声を発した白雪に、
「何？　止めるつもり？」
アリアが、生来のロイヤルブルーと緋色の混ざった――その赤紫色の瞳で、流し目する。
「ううん。本当にそれができるのなら、願ってもない話だよ。緋緋神を半永久的に鎮める、誰も思いつかなかった方法。でも、その……その話には多分、私が……」
白雪は続きを言いづらそうにしてるので、内容の読めた俺が代弁してやることにする。
「自制が必要になるぞ、アリア。疑うワケじゃないが、お前が何らかの理由で暴走した時、誰かが止めなきゃならない。監査役、セーフティーネットが要る。それは、白雪。お前がやれ。あるんだろ、殻金とか、色金殺女とか、緋袚舞とか。無きゃ無いで、開発しろ」
俺がそう言うと、白雪はコクリとうなずき……
アリアも別段、異存は無いようだった。
よしッ。これでとりあえず、俺とのケンカでアリアからレーザーが出てくるのは防げる流れだぞ。今まで通り銃とかだけだ。それもそもそもどうかって話だが。
「いいわ。よっぽどじゃないと力を借りるつもりもないから。あんたらもそこまで疑ってないと思うけど、あたしもケンカとか面白半分で目からレーザーなんか出したりしないわ。みんなに怖がられるでしょ」
さてはアリア……面白半分でパンチングマシーンで普通に１００kgとか出してみんなに怖がられてるって事、気づいてないねキミ？

あとは、緋緋神がどう出るかだが――

「……もうあたしは乗っ取られてるからな。心を人質に取られちゃ手も足も出ないのは、今までさんざんあたしが人類にやってきた事だから……よく分かってるのさ。分かった。その話、受けるぜ。２０００年待った宇宙へ還れるチャンスを、逃がしたくはないしな」

――決まった、な。

しかし、さすがはアリアだ。芸風が首尾一貫してるぜ。

武力、経済力、政治力、あれもこれもほんっと強引に力尽くで進める。

最後は超能力――これも力で、神を味方に付けちまったか。やれやれだよ。

「じゃ、契約成立ね。緋緋神、あんた握手ってできる？」

「やろうと思えばできる」

「やろうと思いなさい。するわよ」

と、いかにも地球人＆宇宙人な会話をしたアリア＆緋緋神はちっこい手と、靄のようなちっこい手で、固い握手を交わした。

へぇーできるんだ……

と、ただ目を丸くして見ることしかできないその和解の光景に、

「……これにて一件落着、だな」

最近言えるチャンスを逃す事が多かったそのセリフを、俺が呟く。

白雪もまた、まだ夢でも見てるような顔でその歴史的な握手を見ている。

アリアは――

「まだよキンジ。武偵憲章８条。任務は、その裏の裏まで完遂すべし。契約に基づいて、緋緋色金を宇宙に返さなきゃ。パートナーのあんたにも、手伝ってもらうからね」

と、俺に赤紫色のツリ目を向けてきた。

まあ、手伝わされるとは思ってましたけど。
「どうやるんだよ」
「簡単なことよ」
と、アリアはさっきからチラつかせてた携帯を開いた。
そして――
今までで一番の、大スケール・アクションをブチ上げたのだ。
「ＮＡＳＡに連絡するわ。行くわよ、宇宙」

2弾　STS-132-1/2（アトランティス）

女子小学生に化けた玉藻の誘導で、レスキュー隊は翌朝ようやく俺たちの所に辿り着き――病院が遠いので、とりあえず俺は星伽神社で応急手当をする事になった。

で……白雪、風雪、粉雪、華雪たちによる手厚い看護を受けて安心し、ヒス後の睡魔に負けて熟睡してしまったのが運の尽き。

「ほら行くわよキンジ！　はい起きる！　んもう、じゃあ寝たまま運ぶわ。白雪、足の方持って」

というアリアの声は聞こえちゃいたが、俺はイ・ウーからこっちヒステリアモードを連チャンで発動させてたワケで――緋緋神問題が一件落着した安心感もあり、大脳新皮質が今までの疲労をまとめて回復させようとしたらしい。ウトウト薄目を開けられる状態までは起きれたんだが、それ以上は頭がどうにも覚醒しなかった。

アリアに引きずられつつ、なんとなく見えたのは……神奈備を掘っていたらしい陸自や民間の重機。星伽神社の広い駐車場に着陸していた、在日米軍（USFJ）の紋章が入った22。それに乗せられて、垂直離陸してからその兵員室（キャビン）のディスプレイで見た、下方カメラ映像――白雪たち大勢の星伽巫女らが総出で見守る中、スクラップ車なんかを持ち上げるのに使われる電磁石ワイヤークレーンで……

このオスプレイ（V―）の機外搭載フックに吊り下げられた、

そして、その緋緋色金と融け合うような色の空……

（……夕陽……）

ってことは、俺、20時間とか寝ちまってるんだな。それでもまだ眠いや。

何が起きてるのかは、分かるような、分からんような、分からんような。

眠さに耐えきれず再び目を閉じると、

「フロリダまで何時間なんだ？」

ワクワクした感じの、緋緋神の声が聞こえる。それと、
「丸1日ぐらいかしら。途中、英国海軍（ロイヤルネイビー）の空母で給油する時間込みで。でもイヤなのよね。キンジが乗る飛行機って毎回落ちるから」
同乗するアリアがそうボヤいて俺を小突くので、
「あっハイ……」
と、寝ぼけながらムニャムニャ応（こた）える俺。
うん、よし。こいつは夢ってことで。アリアが米軍や英海軍をアゴで使って緋緋色金をどこぞへ運んでいくだなんて、ありえんからな。
夢の中でってのも妙な話だが、一度寝といこう。そして目が覚めたら、夢オチっていう超おもしろ展開が待ってるのさ。
（そう、これは悪い夢なんだよ……）
それにしちゃ、可変回転翼（テイルトローター）の音がリアルだけどさ。

はい、もちろん夢じゃありませんでしたとさ。クソったれ。
アラスカ沖を航行中だった英国海軍空母アーク・ロイヤル（H.M.S.）にオスプレイが着陸（ちゃくりく）すると、自分だけファー付きのコートを着たアリアが「トイレと食事を済ませときなさい。給油が済み次第、また飛ぶわよ」と、寒さに震える俺（おれ）に命じて外へ出ていった。フワフワ浮かぶ緋緋神（ヒヒガミ）を連れて。
回転翼が吹き下ろす気流に前髪を暴れさせつつ、グレーの空と海に囲（かこ）まれた甲板に俺も降り立つと……
通常は対潜哨戒（シーキング）ヘリなんかを離着陸させる飛行甲板にV―22（オスプレイ）が赤いＵＦＯを降ろしたとあって、航空隊や艦橋（かんきょう）の乗員たちは口々に「おお神様（Oh my Gosh）」と目を白黒させてた。
騒ぎはさておき実際腹ペコだった俺は「あのうスミマセン……」的に艦橋へお邪魔して、人の好（よ）さそうな黒人の乗員さんに事情を説明し、残り物のサンドイッチとティーパックの紅茶を廊下でごちそうになった。後で聞いた話だが、アリアは上官専用食堂に招待（しょうたい）されてローストビーフとか山盛りのフレンチフライを食ってたんだそうだ。妬（ねた）む

よ？

とまあ、パーキングエリア感覚で空母を使うアリアさんだが……

これは英国王子ハワードあたりのコネを使ってんだろうな。しかしこのＵＦＯ輸送には米軍も絡んでる。その辺どうやって動かしたんだろう。

……知りたくもあり、知りたくもなしだ。

それからオスプレイは半日かけて北米を北東から南西へと渡っていき、今度はクソ暑いフロリダ州の大西洋岸――ケネディ宇宙センター上空で、ようやくヘリコプター・モードに遷移した。

（……『世界・ふしぎ発見！』で見たなぁ、ここ……）

ほぼ立方体をした、冗談みたいに巨大な宇宙航空機組立施設の正面へ……オスプレイは緋緋色金をソフトに降ろしていく。

だんだんこれから何が行われるのか読めてきた俺が、苦虫を千匹ぐらい噛み潰した顔をしていると――

「はいニッキー。アンタの設定よ」

と、ちょっと楽しそうなアリアにＡ４の紙資料を渡された。

「誰だよニッキーって……」

「あんたの事よ。あたしはジェシカ。ＮＡＳＡには『こういう時』用の、架空の科学者の名簿があるの」

偽名って事かい。ていうか急に英語で喋り始めたぞアリア。

しかし、なんで偽名が必要なのか？

いや、なんとなく読めてきちまったけどさ。

イヤな話はギリギリまで聞きたくない質なので、俺は口をへの字にし片眉を上げ、ただアリアを無言で見るにとどめ……

ジェシカことアリアは、そんな俺の仕草にツリ目を細めて「ふふっ」と笑うのだった。

録音しておきたくなっちまうような、可愛いアニメ声で。

アメリカ合衆国フロリダ州ブレバード郡、ケネディ宇宙センター。

それは武偵高の在る港区の約28倍もの広さを誇る、アメリカ航空宇宙局――ＮＡＳＡの総合基地だ。

宇宙センターという未来的な名称の割に、敷地はそのほとんどが湿地帯の自然保護区。沼にはアリゲーターが何千匹も生息し、アメリカの国鳥・ハクトウワシが飛び交い、海辺なのでイルカやマナティなんかもいたりする。

隣接するケープ・カナベラル空軍基地のヘリポートに着陸したオスプレイから、機外に降り立つと……緯度的には九州よりずっと南なので夕方でも日差しが強く、蒸し暑い。

そこでは俺たちを軍用車が出迎えてくれて、その1輌から、

「つたく……何やってんだよ兄貴？」

なぜ居るのかは分からんがどこに居ても納得できちまう俺の弟、ジーサードが出迎えてくれた。ゾロゾロと自由なファッションの部下どもと、あとマッシュと、相変わらず白いスクール水着っぽいバトルスーツを着てて目の毒な少女型ロボット・ＬＯＯも出てくる。

ギンギラのスーツを着た我が弟の第一声は『何やってんだよ』との事だったので、

「それは俺にも分からん」

正直なところを、答えておいた。

その直後、武偵高の夏制服を着たかなめが、

「おつにっついっちゃーん！　合理的にハグしてー！」

ホップ、ステップ、ジャンプ！　ばしぃ！

短いプリーツスカートで飛び跳ねるもんだからビビッて硬直した俺に満面の笑顔で抱きつき、ゴロゴロボチャッ！　と、背後にあった沼に2人まとめて転がり落ち、そこにいたアリゲーター一家がバーッと四方八方に走り出てきたもんで、俺たち&ジーサード一味は四方八方に逃げることになったりするのであった。

要するに、今回の俺とアリアのミッションは――
日本から運んできた緋緋色金の原石を、ここから宇宙へ打ち上げることだ。
宇宙――正確には高度およそ５６０kmの、衛星軌道まで。
緋緋色金によれば、そこには色金姉妹の母・金色金の粒子が漂っているのだそうだ。
また、宇宙空間であれば色金は恒星風を捕らえ、緩やかながら自分の意志で移動できる。つまり、時間さえ掛ければ地球の重力圏を離脱して宇宙の彼方へ飛び去る事も可能なのだ。実際そうするかどうかは、母と再会してから考えるとの事だったが。
「これで長年のミステリーがあれこれ一気に解けたワケだが、話を聞くに……緋緋色金が宇宙人だろうが金属人だろうが、確かに人道的見地から元いた所に返してやるべきだなァ。ある種、難民みたいなもんだからよォ。力を貸すぜ」
ディクシー・クロスローズ――宇宙飛行士たちが行きつけにしているというファミレスみたいなシーフード・レストランで……
俺とアリアから一通りの話を聞いたジーサードは、バリボリと殻ごとロブスターを食べながらそう言ってくれる。
アリアの隣に半ば座り半ば浮いてる緋緋神――を宇宙に返すのがもったいないと思っているのか、その能力をアリアに独占されたのが悔しいのか、ちょっとふてくされてるけどな。
「あんたならそう言ってくれると思ったわ。正義のヒーローさん」
「あの美しい原石を失うのは、人類にとって美学的な損失だけどな」
ガブッと持ち込みのトマトを噛ってるジーサードには、ＮＡＳＡとの強固なコネがある。先端科学兵装のパーツ関係で長年出入りしていたからだ。
で、前に戦った時その辺を調査してたアリアが、かなめに連絡し……
ニューヨークから今回、ジーサード一味を呼び出したんだそうだ。
特段アリアとは友好的でもないジーサードだが、『キンジが行く』と聞いたらすぐ来たらしい。こいつがかなめ同様お兄ちゃん子だと知っているアリアが……どうりで、俺を強制的にアメリカまで連れてきたワケだよ。

在日米軍に訓練を装ってオスプレイを飛ばさせるムリを強いたのも、ジーサード関係のお偉方かな。絡みたくないから俺は聞かないけどね、その辺。

「だけどよォ、こんな莫大なコストを掛けたりしねェで――例えば小さなカケラを宇宙に送るんじゃダメなのか？　色金は、にして全、全にして一なんだろ？　一部送れば、全部送った事になったりしねェのかよ」

バドワイザーを呷るジーサードが尋ねると、

「確かに色金は幾つに割れようと、自分同士の精神感応みたいな力で心が接続されてるわ。でも、その存在は質量が大きいほど確かなものになるんだって。だから欠片じゃなくて、緋緋色金にとっての感覚的な『本体』を打ち上げないと――宇宙に還れた事にはならないみたいなのよね」

オランダでリサも食べてた穴無しドーナッツの小型版をつまみながら、アリアが答える。

ジーサードは自前の金融資金で、つまり端的に言えば趣味として無償のヒーロー活動をやっている奇特な男だ。

だがアリアは手伝わせるからには報酬を払わないと気分が悪いらしく、今までとはケタ違いな今回の経費も、ここの食事代も、みーんなアリア持ちとの事だった。

なもんで、豪快なアトラス、オカマのコリンズ、アンガス爺さん、エスパー少女のロカ、玉藻系女子のツクモ、かなめ、人工天才のマッシュ、あと頬に弾痕のある銀髪のマッチョ――元ＫＧＢのキースは、みんなして飲めや歌えの大騒ぎだ。静かなのは、何も食わずにちょこーんと座ってるＬＯＯだけだよ。アメリカ人には遠慮って概念が無いらしい。

俺、アリア、ジーサードは部下たちとは別のボックス席にいるんだが、

「あァうるせェ！　おめェら、静かに食え！」

ジーサードが床を蹴って怒鳴ると、とりあえず3分ぐらいは静粛にしてくれるんで――

その間に、俺は俺で気になっていた事を尋ねることにした。勇気を振り絞って。

「あー……アリア。その、宇宙に緋緋色金の原石を返す件なんだが。俺も連れてこられたって事は……」

「あんたも行くのよ。最初から言ってるじゃない」

「行くってのは、その……宇宙……」
「そ・う・よ！　う・ちゅ・う！　往生際が悪いわねバカキンジ！」
なんか急に不機嫌になったアリアが俺の耳元で怒鳴るので、鼓膜がキーンとなった。
「――ていうか、緋緋神がね。『キンジも見送りに来てくれなきゃヤダ』って言うからっ。あんた、あの子に好かれてるわよ？　ったく。キンジの女癖の悪さも、人間とか妖怪とかだけじゃなくて宇宙人にまで及んでるとなると……呆れるのを通り越して、ちょっと尊敬しちゃいそうになるわ」
「いやそれは俺の女癖とかじゃなくて、緋緋神が勝手に言って痛てててて！　ケツをつねるな！　肉がちぎれる！」
リンゴをジュースに変え、ビリヤードの球を握り割る握力を持つアリアのペンチじみたつねり攻撃から逃れて、俺は――どさっ。
イスから木の床に倒れ、カサカサと後ずさる。
そして涙目で……やぶれかぶれになって、
「じゃあ……宇宙に行くとしてだ。どうやって行くってんだよ！」
もう1つ気になってた、最大の疑問をぶつけた。
するとアリアとジーサードが、ケロッとした顔をこっちに向け――
「スペースシャトルよ」
「STS―132―1／2、アトランティスだ」
――ああもう……
あーハイハイ！　行きますよ行きますよ！　行きゃいいんだろ！
ジーサード曰く、明後日打ち上げのスペースシャトル・アトランティス号のミッションは――人工衛星の放出と、国際宇宙ステーションへのモジュール配達だった。
ところがそのモジュールに不具合があって、搭載が見送られ……シャトルの貨物重量に空きが生じてしまった。人

工衛星の打ち上げは契約上延期できなかったので、ＮＡＳＡはその空きスペースへの積載権を条件競売に掛けたんだそうだ。

で、それをアリア→かなめ→ジーサード経由で依頼を受けた名バイヤーのロカちゃんが競り落とした。元々モジュール関係で乗るはずだったミッション・スペシャリスト2名の空席への搭乗権もセットで。

――今や、宇宙旅行も金で買える時代か。

さすが資本主義国家の筆頭・アメリカらしいエピソードだぜ。

「宇宙開発って、もっと研究目的っぽいもんだってイメージしてたけどな」

「日本じゃどうか知らないけど。アメリカじゃ元々が軍事目的で、今ではビジネス目的の国家事業なのよ。でも、建前は確かに科学振興の方が聞こえがいいわ。だからあたし達も科学者って事になってるのよ」

工場の中身が剥き出しになったような巨大建造物、複雑に組み上げられた発射台――

そこから片持ちの搭乗員乗り込み橋を渡りつつ、前半分が金魚鉢みたいなヘルメットをかぶった俺とアリアがインカム越しに本音トークをする。今は送話チャネルを相互にしか開いていないので、他のクルーに話を聞かれる懸念もないんだが……一応、日本語で。

周囲は見渡す限り、無人の湿地帯。打ち上げの際、半径5㎞以内にいると轟音で内臓に致命傷を負ってしまうため、人の立ち入りが禁止されているからだ。動物たちもいつしかシャトルを見ると逃げるようになっており、獣の気配すらない。

「しかし、ラッキーだったな。たまたま打ち上げが近くて」

「そこまでたまたまでもないわよ？　シャトルって、しょっちゅう――もう１３０回以上、地球と宇宙を往復してるんだし。最近じゃ月イチぐらいで飛んでるから」

ミッション番号を示すワッペンや私物を入れるポケット、それとパラシュートも付いた与圧服を最終チェックしてもらい、俺とアリアはシャトルの周回宇宙船へとサイドハッチから乗り込んでいく。

横倒しの座席に背を下にして着き、両肩と腰を固定するシートベルトをガッチリ固めて……コマンダーやパイロットといった他の搭乗員たちが管制本部と交信するのを横目に、後は打ち上げを待つばかりだ。俺とアリアはスペース

シャトル・システムの運用に関わる訓練を受けていない、ペイロード・スペシャリスト――『お客さん』なんでね。

（それにしても……）

俺の隣に並んで搭乗してる、アリアさん。

ケネディ宇宙センターでのコイツの、偉そうだったこと偉そうだったこと。

この俺とのマンツーマン通話回線を許可させたり、宇宙飛行士宿泊施設でのディナーにオーランドの中華料理店からもちもまんを取り寄せさせたり、固いベッドを替えさせたり、ワガママ放題だったよ。ＮＡＳＡもアリアをＶＩＰ扱いで叱らんから、俺が「ちょっとは自重しろよ」と注意したら「あたしの私費で打ち上げるんだからいいでしょ」と言いきた。

聞けば、アリアはシャトルへの積載・搭乗を懸けたオークションで――かつて拿捕したイ・ウーを日本政府に寄託……要は売っぱらった金を丸々この打ち上げに支払った、一大スポンサーなのだった。金額は聞くと心臓に悪そうだから聞かなかったが。

「はーい。そろそろ打ち上げ準備完了ですよー」

船長のモンローさん……ブロンド髪の女性宇宙飛行士が、おっとりした英語で皆に通信してきた。せっせと液晶パネルのプライマリ・ディスプレイをチェックしながら。

「ジェシカさんとニッキーさんも、お気分が優れなかったりしませんかー？　背中を下にしての座り姿勢だから、頭に血が上っちゃったりしてませんかー？」

「あたしはＯＫよ、モンロー」

「あっ、ええ……俺もです」

ふわふわした喋り方も含めて女優のマリリン・モンローにチョイ似の船長は、実際あのマリリンと遠戚なんだそうだ。俺から見ると色っぽくて悩ましい上、アリアが我が物顔でする命令をハイハイ聞く困ったお姉さんだ。

『あたしも大丈夫だぜ』

という声が頭の中に響いたが、これは――緋緋色金のテレパシーだ。俺とアリアにしか聞こえてない。

宇宙航空機組立施設（ヴィーフイクル・アセンブリー・ビル）で入念な滅菌処理（めっきんしょり）を受けた緋緋色金は、これで宇宙に返すわけだが……）

（とりあえず緋緋色金は、シャトルの貨物搭載室（ペイロードベイ）に収（おさ）められている。

瑠瑠色金（ルルイロカネ）、璃璃色金（リリイロカネ）も後から打ち上げる事になるんだろうな。

それがいつなのか、幾らかかるのか、誰が払って誰が見送るのかは知らんけど。

『――打ち上げ（T minus）1分前（60）』

宇宙センター管制本部からの通信が入る。

いよいよだな。チクショー。

ちなみに誰も何も言わなかったが、携帯でグッたところによるとスペースシャトルは今まで5機中2機空中爆発してる。この与圧（よあつ）服がオレンジ色をしてるのも、飛散した時に遺体を見つけやすくするためだ。

俺（おれ）が念仏でも唱（とな）えようかなと思っていると、急に、アリアが専用回線で――

「キンジ」

「何だよ」

「ありがとね」

「何を今さら」

「感謝してるわ。心から。ありがとう」

――かしこまった声、日本語で、お礼を言ってきた。

「なっ、何だよお前。こんな時にそんな事……」

しかも、またそんな可愛（かわい）い声で。

何かあった時に備えて、って事なんだろうか。縁起でもねえなオイ。

だが実のところ、アリアが心の中では俺に感謝してくれていた事をきちんと伝えてくれて……俺は俺で、ドギマギしてしまう。それで、

「ほんと、アリアは独唱曲（アリア）だな。何でも独りで決めて、どんどん事を進めちまうんだからよ」

そんな、ツンケンした言葉を返してしまった。

するとアリアは、
「あんたと一緒でしょ。だから二重唱（デュエット）よ」
赤紫色の瞳（ひとみ）をニッコリ細めて、アクリルガラスのヘルメット越しに微笑（ほほえ）んできた。
そして、モコモコの白いグローブをした手を……俺の手と、繋（つな）いできた。
懐かしいな、それ。
『――打ち上げ（T minus）15秒前（15）』
俺とお前が出会ったころ。
初めて一緒にゲーセンへ行った、その前に俺が言ったジョークだ。
デュエット。
それはアリアが俺に、初めて――
――笑顔を見せてくれた、あの時の言葉。
『……10（Ten）、9（Nine）、8（Eight）、7（Seven）……』
カウントダウンが続く。ヘルメットの中に、古いラジオのように。
俺と、アリアは。
あのゲーセンに始まり、台場、秋葉原、横浜、香港（ホンコン）、ロンドン、あちこち行ったが――
とうとう、宇宙だよ。
『……6（Six）、5（Five）、4（Four）……』
ふと思うんだが。
じゃあ、このあと。
これから俺（おれ）はアリアと、どこへ行くんだろうな？
『……3（Three）、2（Two）、1（One）……』
まあ、どこでもいいか。

『……0（Zero）――離床（Lift off）――！』

アリアと一緒なら！

――『スペースシャトル』と言われると一般には白黒モノトーンの航空機のような形の部分だけがイメージされるものだが、それは地球の周りをグルグル回る宇宙船（オービター）だ。それに外部燃料タンク・固体燃料補助ロケットを加えたセットをスペースシャトルという。

まず打ち上げには2本の固体燃料ロケットが使われるのだが、こいつは一度点火（てんか）したら消せない超巨大花火みたいなシロモノ。上昇中、俺たちに出来る事は何もないので、運を天に任せてコマンダー・パイロットと管制本部の交信を聞いてるしかない。しかし……

「ゆッ、揺れるもんだなこれッ」

「そそそうねッ！　うーっ！」

かなりの振動に、俺とアリアは大声で通信する。

マッサージ椅子（いす）に座ったまま、ジェットコースターに乗ってるみたいだよ。シャトルがブッ壊れるんじゃないか、積んだ緋緋色金（ヒヒイロカネ）を落っことすんじゃないかと気が気じゃないぜ。

「ジェシカさん、ニッキーさーん。初心者さんが喋（しゃべ）ってると、舌を噛（か）んじゃいますよ～？　ウフフッ。はーい、現在高度およそ43㎞（14万フィート）。間もなくSRB切り離しになりまーす」

モンローさんはシャトル3回目のベテランなので、揺れる中でも滑舌（かつぜつ）がいい。

時折シャトルは捻（ねじ）れるように方向を変え、窓から差し込む陽光の角度もキリキリ変わる。

（14万フィートって事は……こないだ富嶽（ふがく）でお邪魔した高さの、5倍とかかッ……！）

発射からまだ2分も経（た）ってないのに、もうそんなに上がったのか。すげえな。

ゴンッ、という一際（ひときわ）大きな揺れがあって――

花びらが散るように、補助ロケットが切り離されていく。

続けて、機外の光景がみるみるうちに朝から夜に戻っていくのに気づかされた。
いや、これは夜になってるんじゃない。宇宙が近づいてるんだ。
補助ロケット（SRB）切り離し時に急ブレーキを掛けたような感覚があったが、シャトルはまたメインエンジン（SSME）で加速に転じる。高高度では地球の丸みに沿うコースを取るため、次第に背面飛行になって――いるらしいんだが、加速Gと振動のせいで上下感覚は既に無い。
「あっ、もうヘルメットのシールド外していいですよー」
「ううっぷ」
「吐くなよアリ……ジェシカ。絶対吐くなよ、絶対だぞ」
モンロー船長に言われて面頬を上に開けたアリアと俺がそんな話をしていると――更に外部燃料タンクも切り離されて――もう、ここはほとんど宇宙だ。
交信を横から聞いた分には、今はもう周回宇宙船（オービター）だけになったシャトルは……地球周回軌道に乗る、最終調整中らしい。
「――機関ン――停止ィ――」
ちょっと大仰なパイロットの声に続いて……すっ……
と、急に。
加速の感覚が抜けて。
体が、ふわっと、すかっとなった。宇宙で最初に感じたのは、今まで締め付けられてた与圧服が全部脱げてハダカになったような不思議な錯覚だ。
これは――無重力になったから、だろう。
重力があれば、服という物は常に自分の肌にペッタリくっついている。
それが着衣泳の時みたいに、体から浮き上がるのだ。宇宙では。
「はぁーい皆さんお疲れ様でしたー。いま秒速7・5kmで低軌道に乗りましたよー。高度、560km（348マイル）になりまーす」
クセなのか保母さんっぽい喋り方のモンローさんが楽しげに外したヘルメット……が、ふわり。

浮いてる。

高度５６０km。ワトソンやヒルダと戦ったスカイツリーの８００倍以上、Ｖ—２や富嶽で飛んだ50倍以上の高さ。問答無用で正真正銘の、宇宙だ。

マネして俺もヘルメットを外し、顔の前に持ってきて手を離すと……

落っこちない。

そこに、留まっている。まるで手品やＣＧ特撮みたいに。

「緋緋色金も無事みたいよ」

脳内で会話したのか、アリアがそう囁いてきて——

ヘルメットを外し、俺にツリ目を微笑ませてきた。

メットから出たピンクのツインテールは、空中で固まって留まっている。キメポーズを立体的に表現した、等身大の彫刻とかフィギュアみたいに。

初めて宇宙に来てテンションが上がった事もあり、それが俺は無性に面白くて——

「アリアお前、髪。超カッチョイイぜ」

シートベルトを外しながら、プークスクス、と笑う。

すると口をへの字にしたアリアはムッとした顔で、ふるりっ。

頭を上手く振って、わさぁぁ。俺の顔面にテールをおっかぶせてくるのだった。

……ってお前これ、ちょっと待ってちょっと待ってジェシカさん。無重力空間で起きたハプニングに見せかけて、念力（ＰＫ）で俺の顔をツインテでグルグル巻きにしてきてませんか？

く、苦しい。苦しいって！　あと、ニオイっ。クチナシみたいな、甘酸っぱい……

やばいってッ。この女子力ありすぎの、いいニオイは！

宇宙では上も下も、右も左も、前も後ろもない。なので……コクピット（フライトデッキ）の下——といっても上とも横とも言いづらいん

だが、とにかく下の階、居住スペースっぽいミドル・デッキで俺たちは初めての宇宙食をいただいた。

真空パックにお湯を注入して調理されるハンバーグを使った、ハンバーガーだ。パンはパンくずが宙を漂って機械に入り事故に繋がるってんで、バンズじゃなくてトルティーヤだったけどね。

「なんか妙に辛いハンバーガーだな……美味いけど」

「宇宙だと無重力で血液の巡り方が変わるから、味覚に影響が出るんだって。なんでかは不明だけど、辛い物が美味しく感じるらしいわよ」

ようやくツインテールを広げないように動くコツを掴んだアリアがそんな事を言うが、なるほど、それでか。味覚と嗅覚は繋がっているから、その……さっきアリアに髪で頭をミイラみたいに巻かれた時、いつもとちょっと違った髪の香りに思えて新鮮だったんだよ。おかげで早くも人類初の宇宙ヒステリアモードを発動させかねない危機に陥ったわけだが。

ちなみに、他の乗務員たちは食事もサッと済ませてもう仕事をしてる。ダラダラ食っているのは、旧式のフライトスーツに着替えた俺とアリアのお客さんペアだけだ。

なお、宇宙空間だと文字通り足が地につかないので、移動は壁を押したり引いたりしてするしかない。

これで体の向きを揃えるのは面倒だったので、俺とアリアは上下逆さまであぐらをかき、頭が上下逆の状態でハンバーガーを食うという世にも奇妙な絵面になってる。

よく見たらハンバーグの袋にはマクドナルドのマークが入っていたので、

「お前と一緒にマックを食うのは、青海の公園以来か？」

「ふふっ。あたしもそれ思い出してたの」

俺とアリアは、そんな雑談をする。

アリアと俺の、ファースト・ミッション……猫探し。その前にも腹ごしらえにマックを食ったんだが、あの時アリアは俺のコーラを間違って呑んだ挙げ句なぜかブン殴ってきた。この口にスプレーするみたいにして飲む宇宙コーラも、取り違えられんよう隠しておこう。

「アリアお前、なんだかんだ言って最後は優しかったな」

「何がよ」
「緋緋色金のことだよ。あんだけ迷惑かけられたってのに――宇宙まで運んでやるとかさ。お人好しだぜ」
「かもね」
「同情したんだろ。ママに会いたいって話に」
「かもね」
メイビー・メイビーか。
素直じゃないねえ。
まあ、そのお人好しに付き合ってこんな所まで来てる俺こそが、宇宙一のお人好しなんだろうけどさ。
宇宙から地球を見ると人生観が変わる、などと何かの本で読んだが……
アトランティス号の窓から見た地球は、非日常的に見せられてきた俺も言葉を失ってずっと眺め続けてしまうほど美しかった。
なにせ低軌道だと2時間もかからず地球を回るもんだから、世界が全部見える。
映像で見たのより、実物の地球はずっとカラフルだ。白い雲は多様な形が同時に見えて、台風もその全体が丸く見えたりした。黄緑色のオーロラや金色の雷といった気象現象も、あちこちに見て取れた。その下、地球の表面には紺碧の海、黄土色の砂漠、深緑の大地があって……そして、当たり前の事なんだが……苦笑いしてしまう事に、世界地図には必ず引かれていた『国境線』なんてものは一本も見えないのだった。
「ニッキー」
「うおっ。何だよアリ……ジェシカ。上から出てくんじゃねーよ」
「あたしから見ればあんたが上なの。ほら。そろそろ人工衛星の放出よ」
窓と顔の間に上下逆さまで割り込んできたアリアに指されて振り仰ぐと、頭上で斜めに立ったゴツい黒人ミッションスペシャリストのゴンザレスさんが……ジョイスティックみたいなコントローラーを慎重に操作しているところだった。

ディスプレイの中では、真っ暗闇の宇宙に、地球の水平線が弧を描いて浮かんでいる。
その弧を横切るように、ドアを観音開きにした貨物室から伸びるロボットアームが動く。
アームの手にあたる部分には、緋緋色金のフチを電磁力と摩擦力でクリップするように固定する専用のクレーンが接続されてあった。
タラコ唇のゴンザレスさんはコントローラーでアームを動かし、平然と――どう見ても人工衛星ではない緋緋色金を、貨物室から遠隔搬出しにかかっている。
「……あのー、あの人工衛星は見た目はアレですが……特殊な形状記憶合金の……」
無口なゴンザレスさんに、俺が地上で考えてたヘタな作り話をしようとすると――
「皆まで言うな。俺は国防総省のミッションじゃ、もっとヘンな物だって運んでる」
ハリウッド訛りの俺がけっこう共感できる、南部訛りの低い声が返ってきた。
その辺の融通が利くのはありがたい事だったが、緋緋色金を周回宇宙船から十分離した位置までアームで運んだゴンザレスさんは……
アメリカ人特有のサービス精神で、さらに融通の利くことを言ってきた。
「ジェシカ、ニッキー。やってみるか？　この人工衛星の放出を」
コントローラーから手を離して、俺たちにそんな提案をしてくれたのだ。
「えっ。あたしたちが？」
「いいんですか」
「ヒューストンの許可は貰ってる。なに、もうこの後は難しいことは何もない。アームの磁力を切り、クレーンのクリップを開くだけ。ＬＨＣのスイッチを２つ、順に押すだけだ。きっといい思い出になるだろう。スポンサーのお二人にはＮＡＳＡを末永くよろしく頼むよ」
予算不足に苦しみ、このシャトル計画も見直しを迫られているＮＡＳＡの皆さんは……
打ち上げにポンと莫大な資金を出したアリアに、いいイメージを持ち続けてもらいたいって事か。こういう、粋な

計らいで。
ゴンザレスさんが示してくれた2つのトグル・スイッチに、それぞれ俺とアリアが指をそえる。狭いデッキの中で、肩を、頭を寄せ合うようにして。
その距離感に、ゴンザレスさんは空気を読んだか……ちょっと、離れてくれた。
数値やグリッドが表示されている画面内では、太陽光に照らされて輝く緋色の円盤……緋緋色金が、既にシャトルから機外へアームで出されている。あとは、アームの手を放すだけだ。
「……ねえキンジ」
アリアが、囁いてくる。日本語で。
「何だよ、アリア」
日本語で囁き合うぐらいなら、本名でも大丈夫そうだ。
「覚えてる？　ＵＦＯキャッチ」
「ああ、ＵＦＯキャッチャーな。お前と出会って、追いかけ回されてた頃……ゲーセンでやった」
「そう。あんたがレオポンを取ってくれたＵＦＯキャッチ」
アリアはゲーム名を間違えて覚えてしまってるようだが、それはそこを訂正する代わりに、
「これはＵＦＯリリースだな」
そんな事を言って、パチンッ。
トグルスイッチその1を倒し、アームの先端が緋緋色金を掴む電磁力を切った。
続けて――
「ふふっ、そうね。じゃあ、今、解き放つわ」
パチンッ。
アリアがトグルスイッチその2を倒すと、アームの先端は手を離すように開き……
緋緋色金は、宇宙に解き放たれた。

２０００年ぶりに。

ゴンザレスさんによってアームは折りたたまれ、シャトルは他の衛星を放出するために軌道の高度を下げていく。

その速度は急ではないものの、俺とアリアが窓から肉眼で見た緋緋色金は……相対的に、ちょっとずつ宇宙へ去っていくように見えた。

最初はその笠のような形がハッキリ見えていたが、次第に赤い月ぐらいに見えるようになり、今はもう緋色をした――星のように、小さく輝いて見えている。

『ああ……』

ウットリと溜息をつくような、声。

声が、聞こえてきた。緋緋色金の方から、俺とアリアの頭に直接。

緋緋神の声だ。とても、とても、リラックスしている感じの。

『上から見るのは2度目だけど、地球ってキレイな星だな。あの時どうして墜ちたのか、もうほとんど覚えてないけど……このキレイさに惹かれて、墜ちちゃったのかもな』

地球の美しさに惹かれて、墜ちちゃった――か。

スケールでかいな緋緋神。さすが、神の名を冠するだけあるぜ。

「あんた、やり残したこととかないの？　地球で」

アリアが、遥か向こうに見える緋緋神に語りかけている。

窓の外は真空だ。声なんか伝わるワケないのだが――アリアと緋緋神の間での感応に、距離はもう関係無いらしい。心結びってやつで。

『……妹たちの事、よろしく頼むぜ』

「ま、いずれなんとかするわ」

アリアの隣には俺もいるので、独り言してるような不審な感じもない。

他の乗組員はミドル・デッキで任務や睡眠の時間だしな。

『ありがとう、アリア。あと、キンジ。お前にも礼を言っとくよ。長く生きてきたつもりだけど、お前に抱いた想いが――あたしの初恋だった。そういうのって、フラれてやっと気づくものなんだな』

そんな事を言う緋緋神の声は珍しく切なげで、どこか名残惜しそうで……

『あばよ、あたしの、この星での思い出の人。ずっと、忘れない。だから、お前もあたしを忘れるなよ？』

だから、俺は。

「自分を2度も3度も殺しかけたヤツを忘れるほど、俺はお人好しじゃないぜ」

横からアリアに睨まれるのも構わず、忘れないさ、と答えてやった。

俺っぽい、ひねた表現でだったけど。

『香港の東區走廊でのカーチェイス、楽しかったな』

「楽しくはなかったぞ、俺は」

緋緋神への文句も、これで言い納めか。

だが、

『本当のことを言えよ』

そう促された俺は……

「まあ、ちょっとはな。楽しかったよ」

苦笑いして、そう付け足してやるのだった。

我ながら、女に甘いよなぁ。いつまで経っても、こういうところ。

「キンジ見て、光が……膨らんでく……」

アリアが窓の外、緋緋色金の周囲を指し示して言う。

緋緋色金はそれ自体が発光し、また反射でも輝いていたのだが――その光がいつしか、膨らんでいた。金色の靄みたいな粒子が、緋緋色金の周囲を包むように飛んでいるのだ。

金色の粒子を纏って、渦巻銀河のように見えてきた緋緋色金は……

――キィー……ン――

――キィー……ン――

心地よい、鐘の音を立てた。

歌って……いるのだ。喜びの歌を。感覚的にそれが分かる。

『……おかあさん……！』

緋緋色金の、最後の声。

あの金色の粒子は、緋緋色金が語っていた――母星。母親なのだ。

地球に墜ち、引力に捕らわれ、生き別れになった我が子を……衛星軌道上で２０００年待ち続けていたのだ。あの、金色金は。金属で出来たその体の一部を微細な粒子に変え、地球に掛かる極々希薄な輪のようになって。

それっきり――

緋緋色金は、喋らない。

ただ、気持ちいい、いつまでも聞いていたいような鐘の音が続いている。俺とアリアの、頭の中だけに。

そして、その音も――おそらくアリアが意図的に、聞こえる音量を絞っていく。

「迷惑なヤツだったけど、いなくなると思うと……ちょっと淋しいかもな。だがこれで、とうとうお別れだ」

俺が、緋緋色金についてそうまとめる。

だがアリアはフルフルと首を横に振って、俺を見つめてきた。

「緋緋色金は一にして全、全にして一。その一つは、ここにもあるわ。だからお別れじゃないの。緋弾は――これからあたしとあんたと一緒に戦う、大きな力よ」

――緋弾――

緋緋色金の弾丸が埋まった、胸に……アリアは、俺の手を抱き寄せる。

そして、自ら名乗るのだった。

「あたしは――『緋弾のアリア』――」

こうして、アリアは――
緋弾のアリアとなった。
緋色（ひいろ）の星を司（つかさど）り、碧（あお）い星の上で、天使のように浮かびながら。俺の、隣で。

NASA

3弾　やる気学

緋弾のアリア様は、イギリス空軍の艦載ジェット機をチャーターして帰国の途についた。
ハワイ経由で日本までたった6時間との事だったんだが、そのジェット機は2人乗り。
女性パイロットとアリアでタンデムするから、キンジは搭乗NGときた。なんだよそのスネ夫のイトコの車みたいなシステム。恨みますよ？
フロリダに放置されたのび太は、オーランドから自腹で格安航空（LCC）を乗り継ぎ、18時間もかけて帰国する憂き目に遭った。乗り継ぎで降りたボストン空港で数時間だけ休憩できたとはいえ、ターミナルのベンチで疲れなんか取れるワケもない。
結局全身バキバキで成田に着いたんだが、英国貴族院の某議員サマの御威光によってか入国審査はスルッと通れたよ。この疲労困憊状態でクロメーテル入国なんかやった日には、心身共に限界を迎えてブッ倒れかねなかったからな。女装姿で。ここは素直に、ホームズ家に感謝だ。さっきの恨みと差し引きゼロって事にしといてやる。
そうして、帰国した俺は——
成田から武偵高の、寮ではなくて一般教科棟に直行した。寮方面には動物的直感で何かイヤな予感を感じたのと、今までごまかしてはきたが出席日数がギリギリだったからだ。あと1日、いや1時間でも欠課したら成績がどうあれ俺は留年。4月からは風魔や間宮と同級生というゴッツい事になるからな。
なので——疲れ切った体でスライド扉を開け、朝の2—Aの教室に入る。
「……おはよう」
何人かクラスメートがいたので軽く挨拶しておくが、時間が早い事もあり人数は少ない。
カーセンサーを読んでいた武藤が「おう、久しぶり」とデカい手を上げて挨拶してきたぐらいで、存在感の薄い俺は普段通り居ても居なくても大差無い『なんかいるアイツ』としてクラスにスルーしてもらえた。
あと、人けが少ないのは……3学期の後半は『欠席消化』といって、出席日数が進級に足りている生徒はそもそも

出席してこないからだ。今のシーズンは、仕事で授業に出られないことの多い武偵高生徒に与えられた、補習期間みたいな時期なのだ。

なので、アリアは元より、リサ、ワトソン、不知火もいない。いるかなと思った理子もいないな。こりゃ気楽だ。

こんな事もあろうかと、部の教科書はロッカーに置きっぱなしにしていたので、今日はこのまま授業が受けられる。ノートはどの教科にも使えるルーズリーフのものがあるので、それを使おう。

いやー嬉しいぜ。レベルが低いとはいえ、普通の教育を受けさせてもらえるってのは。

期末試験も近いし、3学期ほとんど授業を受けてこなかった俺的にはマジでありがたい一時だよ。

というわけで俺は、久しぶりに高天原先生のＬＨＲ、教室を移って我那覇先生の化学、また2—Aに戻って南郷先生の英語、当たり前のように喫煙しながら授業をする綴先生の公民……を、受けてる途中で……うつら、うつら……

眠くなってきた。

（……き、来たッ、時差ボケだ……っ……！）

オーランドと東京の時差は、マイナス14時間。

今がＪＳＴ（日本標準時）の午前11時だから、俺の体内時計では……えーっと、何時になるかは計算が難しくて分からんが、要はほぼ昼夜逆転してる状態なんだ。

つまり俺にとって、真っ昼間は真夜中って事。

「……っ……っ……」

まぶたを指で押さえて開けたりシャーペンで太ももを甘刺ししたりして抵抗したものの、俺は……俺は……ＺＺＺ……

「――くオらァ遠山アアアッ！」

――どがすっ！

黒板用の巨大定規が風車手裏剣みたいに飛来して、突っ伏してしまっていた俺の脳天に激突してきたッ――痛ってええ！

飛び起きると、

「アタシの授業で居眠りたァいい度胸だなぁ、ええオイ？」
英和辞書を破いて巻紙にしたタバコ（？）を咥えたまま、冷酷な怒りの表情を浮かべた綴が教壇から下りてくるところだった。
これがコワイ。超コワイ。
綴は素粒子レベルまで崩壊してる人格はともかく、顔はシャープな美人。
そういう美人のお姉さんが怒ると、その顔はキレッキレに鋭くなるのだ。
「あのッ、いいえ。今のは居眠りではなく、長めのマバタキでして……！」
「イビキかいてたろブタみてェに！」
ぐいいいっ！　綴は俺の髪を掴んで強制的に立たせる。これがフシギな掴み方で、頭を向けると痛い方向と気持ちいい方向がある。自然、痛くない方へ頭を向けていくと……
俺は綴に髪を掴まれたまま自分で歩き、教室から出ていく形になる。
「廊下に立ってろ！　両手に水満タンのバケツ持てッ！」
「あっつ！　痛てッ！」
ジュッ！　と後頭部に火の付いたサムシングを押しつけられ、後ろからミドルヒールの編み上げショートブーツで股間を蹴り上げられ――
上も下も痛むと人間は背と膝を曲げて縮こまってしまうもので、その俺の肩を、ぐい！　綴がブーツで踏みつぶせば、べちゃ。
俺は綴の足下に仰向けに倒れ、腕組みして睨み下ろしてくる綴に――げすっ。片足で、腹を改めて踏まれちゃうのであった。

クソッ、綴め。投げるならチョークとかだろ。百歩譲って黒板消しまでだ。あの巨大な二等辺三角形は当たり所が悪けりゃ命に関わる。しかも立ってろって命じて踏み潰すとか、矛盾してるしよ。
あと、これ。水を満たしたバケツを両手に持たせて廊下に立たせるとかって。昭和でも後期には見られなかった体

罰だぞ。

だが、今日日珍しい体罰というものが、この暴力学校ではまかり通るのだ。

（今は手も足も出んが……いつか、匿名で都教委にチクってやるからな……！）

などと脳内でボヤく俺、なのだが……

廊下に1人っきりでいるのは、ぶっちゃけ、個人的に気分のいい時間とも言える。

俺は本来、1人でいるのが別にキライじゃない人間だからだ。

「……」

何も考えず、ただボケーっと立っていると――

頭が空っぽになっていって、何もかもから……

主に去年の4月以降アリア関連で経験してきた恐怖体験など、あらゆる負の感情からも一時的に心が解き放たれる。

まるで、目を開けたまま瞑想してるみたいだ。スピリチュアルだね。

サッシ窓の外では、授業が早く終わったのかC組の連中が歩いてる。

冷水機の隣の花壇に、通信科の中空知がしゃがんで水をやってるのも見える。

防弾窓ごしなので、音は聞こえない。

（……）

静かだ。

この静寂、プライスレスだな。

綴に教室から蹴り出されたのは、逆に良かったのかも。綴先生、ありがとうございます。

だが、このお礼は口に出して言えない。というのも、俺には全くもってビタ一文理解のできない事なのだが――綴や蘭豹といった美人女教師をわざと怒らせて体罰を受けたがる、フシギとしか言いようのない男子もうちには少数いるからだ。そういう男子はビンタされたり蹴り転がされたりした際についポロッと「ありがとうございます」とか言っちゃって気味悪がられ、余計ハードな暴力にさらされたりしてる。ほんと何なんだろうねこの学校。

立ったまま、目を開けたままではあったものの――
何も考えずに放心していたら、脳は休まったらしい。ほとんど受けられなかった公民の授業の後、眠気は和らいでいた。
放課後、俺は食品購買部へ行き、ワゴンで埃をかぶってた賞味期限の際どい眠眠打破とレッドブルをカクテルして一気飲み。時差ボケにトドメを刺しておいた。
さて、このドーピングは何のためか？
それはもちろん勉強のためである。この学校にいると忘れそうになるが、そもそも学校とは学ぶために来る場所なのだ。
ろくすっぽ勉強もせずイ・ウーだの眷属だの緋緋神だのとアンダーグラウンドな戦いを繰り広げていた俺の学業成績は今、アリアによる家庭教師ゴッコぐらいじゃ追っつかないほど悪くなっている。2学期末には一般高への留学により、時的に成績がアップしたが、3学期はほとんど登校できてないので学業に大幅な遅れが生じているのだ。
さっきだって、受けようと思った授業すら受けられなかったしな。廊下に立たされてて。
（出席日数が足りてようと、このままじゃ、般学科の試験でダブりかねないからな）
創立以来学業の偏差値が底辺まっしぐらの武偵高で留年なんかしてたら、将来に亘ってバカのトップエリートのレッテルを貼られるぞ。武偵高は学歴フィルターの1枚目で漉し取られちゃうどころか、むしろ中退して学歴を中卒に留めておいた方が就職に有利とさえ言われている高校なんだから。
なんにせよ――期末試験も近いワケだし、今は泥縄式でも勉強しとかないと。
と、焦りに焦る俺は、一般科目棟の渡り廊下の先――
入学してから2年間いっぺんも入った事の無かった、自習室なるルームにお邪魔した。
ここは純然たるお勉強部屋という事だったので、
「……お邪魔しまーす……」
入室時に何と言えばいいのかの空気も読めず、小声でそう言いつつ入ると……

「……！」
「……！」
2人しか人のいなかった室内にいた、その女子2人が。
目をまん丸にして、こっちを見てきた。
目をまん丸にしたのは、俺もだ。
「……萌っ、菊代っ……！」
望月萌と、鏡高菊代だったからだ。そこでお勉強していたのが。
こいつは意外だったな。
2人は俺が武偵高を退学して一般高に通ってた頃に世話になった、元々は学園島の外の一般人。だが、今は武偵高の臙脂色セーラー服を着て並んで座っている——萌と菊代は、
「遠山君！」
「遠山っ」
ガタガタッ、と、なんでか競うようにして席を立つ。
そして小走りにやってきて、俺の左右の腕をそれぞれ掴み、
「嬉しい！　私のこと、まだ覚えててくれたんだねっ」
「つたく。ずっと登校してこなかったから心配したよ」
と、それぞれ言ってくる。生まれつきちょっと茶色がかったサラサラのボブカット頭と、花飾りで結い上げたほぼ金髪の頭を寄せてきながら。萌は純粋そのものといったカンジの笑顔で、菊代は本音を奥に秘めたカンジのツンツン顔で。
「私も遠山君との事、ぜんぶぜんぶ覚えてたよ。毎日思い出してたよ。ほんとだよ」
望月萌——は、平凡な一般家庭に生まれた、一般人女子。かつて通っていた東池袋高校というありふれた高校ではクラス委員も務めてた、元・よい子ちゃんだ。それが某・悪い男のせいで人生のボタンを掛け違え、武偵高に転校してきてしまった。

萌は、まだ鍛えた感の無い、少しぽっちゃりした柔らかそうな体質をキープしている。以前は触れたことも無かったであろう、拳銃――黒いブローニング・ハイパワーを収めた真新しいガンベルト（まだスカート内に隠すのに抵抗があるらしい）の下、セーラー服の防弾スカートからはムッチリ生っちろい太ももが見えている。白雪・リサ・中空知系統の、目の毒科・グラマー属女子だ。

「……どこ行ってたの、とかは……詮索しない事にしとくよ。おかえり」

近寄ってきたくせに俺から目を逸らし前髪を整えるような仕草をしてる、鏡高菊代――は、鏡高組という元・指定暴力団、つまりおヤクザさまのお家柄。組自体は解散したが、その最後の組長も務めたトンデモナイ女子高生である。

その生育環境とかのせいもあって、大人びた感じの子だ。今も顔を逸らしてるせいで、むしろ見せつけてきてるような――うなじの産毛に、妙な色っぽさがある。

しかも菊代は学校ではヒールを履かないらしく、ちょっと背が縮んだ感がある。元々の印象からすると、かわいくなった。色っぽくてお姉さんっぽいくせに同級生で、その上、可愛い一面も見せてくるとかって。いかんでしょこれは。

しかも菊代からは、ヒプノティック・プワゾンの溶けそうなほどイイ香りが仄かにする。クラスメートだった神奈川武偵高付属中の頃、それが菊代がつけてきた香水と知らないで「なんかイイ匂いするな」と俺が言ったら、なぜか菊代はそれから今に至るまで毎日これを使うようになっているのだ。

だが、俺も世界を巡ってかなり鍛えられたつもりだ。２人と再会したぐらいでヒス化に怯えて逃げ出したりはしないさ。思いっきり後ずさりはしちゃったが。

そう。そこまでは、まだ大丈夫だったのだが……

（……ッ……！）

ぷよんっ。まだ武偵としての鍛え方が全く足りない、胸筋を感じさせない――水っぽい、脂肪のカタマリ的な、ミルク肉――つまり健康的にグラマラスな萌の左右のお胸が、俺の左腕を挟み込んできてます……きてますよ！

「――おいッ……！　う、腕ッ、放せよっ……！」

これは――

かなめやリサなども使ってくる、女子にしかできない男子拘束法。名付けて胸万力。

拘束に用いられる部位が部位なだけに、乱暴に腕を抜こうとするとむしろ自滅を招く、ヒス的には『この形にされた時点で負け』な体勢である。

この胸万力、やる方は無意識にそうなってしまった的な顔をするのだが、俺がかなめにやられてるのを目撃したアリアに27発撃たれながら説教されたところによると、意図せずできる事ではないらしい。実際、萌は密着してるというのに、

「また会えて、嬉しい……！」

放せという俺の命令が聞こえてないかのように、目に嬉し涙をためてそんな事を言っている。

「……っ……！」

放してもらえない俺は、テンパって――見なきゃいいってのになぜか、かなりの体積を持つ萌のそこをつい見下ろしてしまう。と、とんでもねえ。俺の腕が埋もれて包まれて、あったかくて、やわらかくてっ……！

「……何さっ」

――ぷよょっ。

うおっ！

油断してたら、今度は右舷に魚雷が命中した！

右腕に、サイズがそれほどないので挟まれはしないものの――押しつけられてるぞッ。菊代の胸が。しかも腕を抱き寄せるようにして、逃げも隠れもせず密着させてる。

菊代胸は菊代胸で、偽装アリア胸より一回り大きい程度だからって油断してた。ある。あるんですよみずみずしい弾力が。女子の胸ってやつは、カップが小さかろうと。

こいつは――万力のように挟むのではなく、もっとシンプルに押しつけてきちゃう技。胸プレスだ。ここは何の工場なのさ。

「お、おい菊代ッ！　お前まで何で――とにかく放せ、放せってっ」

「……」

ぷくぅとほっぺを膨らませて、美形なのに俺なみに悪い目つきをした菊代は……黙って、俺を睨み上げてる。放してくれないよこっちも。

というか、菊代は俺のヒステリアモードの事を知っているハズだ。それでこの胸工場を稼働させてくるとは、正気か？

（バケツ持たされたり、胸工場に入れられたり、今日は腕受難の日だぜッ……！）

こ、こんな人けのない自習室でヒスってみろ。一大事だぞ。進級のため勉強するつもりが、男として別の進級を唐突に果たしてしまいかねん。

――耐えろ。耐えるんだキンジ。今までは素数を列挙して耐えていたが、最近は脳内に数学の教科書を想起する事により、より高度な現実逃避を――

（……そうだ！）

そこで甘ヒス俺は奇跡のヒラメキ。

かつて東海道新幹線の上でアリアとレキに使った、女子2人の間でネジのようにターンする『火と風の円舞』を半年ぶりに放ち、その場に屈んでスライディング。潜林の要領で抜け出した。

そしてアクション映画みたいな動作でゴロッと回転受け身を取り、少し離れた所で片膝立ちになる。

いつの間にかお互いの手をお互いの胸で挟む形になった萌&菊代が「？」「？」と赤面しつつ離れる中、

「――お前らに頼みがある！　期末試験の勉強を手伝ってくれ！」

俺は持参したルーズリーフを掲げて、片膝をついたまま頭を下げた。

誤答すると首を絞めてくるアリア式だと命にかかわるし、ワトソンは勉強の途中で妙なリハビリを求めてくるのが常だし、証拠は無いんだが白雪は俺に勉強を教えながらどうも俺を盗撮してる疑いがある。レキは人に教える素質が無いし、ジャンヌは天然で会話から難儀する。理子は論外。不知火と2人で仲良く勉強してると通信科のアホ女子どもに妙なウワサを立てられるし、教科にもよるが俺より成績が悪い武藤に教わるのはナンセンス。

つまり俺の周辺には、勉強を教わるのに適切な人物がなかなかいなかったのだ。今までは。

しかし、望月萌――

聞けば研進ゼミの全国模試でこの冬71位という好成績を収め、武偵高から初の東大生が出るんじゃないかと教務科に期待されてる彼女は……神仏（緋緋神と闘戦勝 仏を除く）に匹敵する慈愛を以て、俺に勉強を教えてくれることを即諾してくれたのだ。

「前にうちに勉強しに来てくれた時は、ジャマばっかりしちゃってごめんね。あの時は私、矢田さんのことで焦ってやってて……でも、武偵高に入って思い知ったよ。矢田さんだけじゃなかった。救護科のリサさんとか、同じクラスにも星伽さんとかジャンヌさんとか、それぞれオンリーワンって感じのライバルがいっぱいいたの」

てへぺろしつつ、後半全く意味の分からないツカミのセリフから入ってきた萌だが……

「だから今は――私は私なりの形で、遠山君にとってオンリーワンを目指す事にしたの。きっと、ナンバーワンにも……遠山君にとって一番、役に立つ女の子にもなれると思う。そうじゃないと、他の子たちにかなわないから」

「は、はあ……」

俺がいない間になんで萌が矢田とかリサとかと競い合う事になってるのか、そこは皆目分からんのだが……

「だから、私が遠山君の成績を上げてみせるよ。武偵大、うーうん、東大だって夢じゃないぐらいに！　初めは、期末試験からお手伝いするね。試験までの残り時間が少なくても、計画性をもって学習すれば――成績は上がりこそすれ、下がる事は絶対ないんだから」

ともかくこの第一声の、頼もしさ！

教務科の『根性で覚えてこい！　出来んヤツは鉄拳制裁だッ！』とかいう旧日本軍的な精神論とは全く違うポジテ

イブさがあるぞ。

ちょこーんとメープル木目の長机についた萌が、笑顔で隣のパイプ椅子をポンと叩いて示すので、

「……助かるよ。俺はこういう因数分解とかの将来何の役にも立たない事は、どうもやる気が起きなくて……」

今まで勉強してこなかった言い訳をしつつ、俺が着席する。すると萌は、

「将来すぐ役に立つよ！　来週のテストと、あと大学受験でもね」

キラキラした目で、そんな事を言ってくる。

割り切ってるなぁ。大人だ。

さらに萌先生は、

「それと、やる気っていうものは勉強に取りかかる前にスタンにしておくものじゃないんだよ。出してから勉強するものじゃなくて、勉強しながら出すものなの」

やる気が出るのを待ってダラダラする癖のある俺に、そんな革命的理論を告げてくる。

「そ、そうなのか？」

「いわゆる『やる気』は――作業をする快感。それは作業をする事で脳の側坐核っていう部分が刺激されて出るの。そのやる気で作業をするうちに、またやる気が出るの。逆に、それ以外の方法では出ないんだよ、やる気って」

萌先生は――拳銃で脅して勉強を強いるアリア先生とは全く異なるタイプの家庭教師のお姉さんらしい。旧世代の根性論も出てこない。現代的だ。

（確かに、言われてみると……）

イヤな勉強とか作業も、始めてから少し経ってノッてる時は……もう『やる気待ち』は不要だったよな。だってもうやってるんだし。

だが、しかし――

「でも最初、作業に取りかかるには……やっぱり、やる気が要るだろ？」

「うん。必要だよ」

「それが出ないから、いつもすぐには取りかかれないんだ。恥ずかしながら、取りかかる前にネットをダラダラ見ち

まったり、寝ちまう。その、俺は、心が弱いっつうか……」
俺が後ろ頭を掻きながら、自分のダメ人間っぷりを赤くなって自白すると……
「恥ずかしくなんかないよっ。それは当たり前のことだよ」
萌はボブカットの頭をフルフルして、強くそれを否定してきた。
当たり前の……事？
この勉強をイヤがってやりたがらない、心の弱さが……？
「勉強するのをイヤがってるのは、遠山君の『心』じゃなくて『脳』だから」
「……脳？」
「うん。脳は心じゃなくて、生存のために働く肉体の一器官なの。人間が生物個体として生き延びる事以外には、本来無頓着な器官なんだよ。だから『その場の安全・危険』とか『その動作の快・不快』には敏感に反応するけど、『将来のためにコツコツ頑張る』とか、そういうすぐには報酬がもらえない行為は本能的にイヤがるの」
――武偵高では救護科に入ったという萌の話は、脳生化学的だ。
学者の説の受け売り感というか……ＮＨＫスペシャル感、ためしてガッテン感はあるが、教務科の根性論よりは断然マシだ。聞いてみて損は無いかもしれない。
と、萌の話を聞いている俺に、
「なんか面白いこと言うでしょ、この子。アタシも付き合ってみて初めて知ったの」
菊代が苦笑いして、コーヒーの紙コップ自販機へ向かう。
「……」
その後ろ姿、セーラー服が似合わないほど艶っぽい襟首の後れ毛に俺が少し見とれてしまうと――
「だから、脳がイヤがる事を……簡単に言うと、イヤな事をどうスムーズに始められるか。ここさえ掴めば、遠山君も勉強できるようになるよ」
ぐい、と、萌は俺に身を寄せて注意を自分に向けさせようとしてくる。
近くから俺を見上げるその動きで、プリンみたいな弾力をした萌の両胸が――セーラーブラウスを破裂させんばか

りにむんにゅり形を変えてる。か、かなりの体積があるぞ。
さっきまでその柔肉（やわにく）に自分の腕が挟まれていた光景を思い出した俺は……萌の胸を意識しているのを悟られぬよう、
「い、イヤな事をスムーズに始める……って、どうすればいいんだ？」
マジメな素振りで、萌先生の『やる気学』の話題に戻る。
「目標を作ればいいんだよ」
「……それだけか？」
「うん。まずはそれだけ。遠山君の、今の勉強の目標は？」
「期末で赤点を回避したい」
「……この学校で赤点って、遠山君……あ、うん。分かったよ。期間は期末まで。目標は赤点回避。だったら、たとえば化学はこの辺だけやれば……」
と、萌は買うだけ買って真っさらだった俺の参考書を開き、赤鉛筆でチェックを入れる。
どうやら、チェックを入れた部分だけキッチリ学習すれば、とりあえず赤点にならないという意味らしい。
同様に、他の教科も赤点にならないラインを引く。
そうするとまず、『赤点を回避する』ために俺がやらなければならない課題がどの程度あるのか――その総量が把握できた。
とはいえ、やはり全教科ではそれなりに作業量がある。
これを一気に片付けよう、と思うとやる気が出なかったのだが――
「この分量なら、試験シーズンまでに割り振って……1日3時間ぐらい頑張れば、全教科なんとかなるよ」
1日3時間。それなら、なんとかなりそうだぞ。
ちょっとやる気が出てきた。
「遠山（とおやま）君、顔が明るくなってきた」
にこっ。

萌が、この作戦の前途を照らすような良い子ちゃんスマイルで俺を見てくる。
本当に救いの女神に見えてきた萌を、拝むような気持ちで俺が見つめていると……
「計画はマクロからミクロへ、だっけ？」
……ブラックコーヒーを手に、菊代が話に割り込んでくる。
どうも、菊代も萌先生の薫陶を受けた門下生みたいだな。
人間やめ人間ランカーの俺にも、元ヤクザの女の子にも勉強法を教えてくれちゃうとか、萌先生はまさに観音菩薩さまだよ。
（1日3時間でいいなら……とりあえず今日は寮に戻ってゴロゴロして、寝る前に3時間勉強しよう）
そう俺が企んでいると、
「安心しちゃいけないよ遠山。今アンタ――じゃあ今からゴロゴロして、寝る前に3時間勉強しようって思ったでしょ」
ぎく。
菊代め。さすが元アウトローだぜ。人の良からぬ企みを見抜くのには長けてるな、あと何で俺の真っ隣に座ってくるんだよお前も。
逃亡計画がバレた俺は、菊代と目つきが悪い同士『うっせえ』『やっぱね』的な視線を交わす。隣に座られてしまったので、かなりの至近距離で。
「うんうん。『3時間』って、まだハードル高いよね」
反対側の隣からは、萌先生がノートを俺に寄せて日程表や時間割を書いてくれる。
自然と再び萌先生のお身体も俺にピッタリくっつくので、ブラウスの胸元がどうしても視界内に飛び込んできてしまう。
「あ、ああ……デカい、じゃない、高いな。ハードル」
しつこいようだが、既製サイズのセーラー服で押しつけられておもちみたいに変形させられてる萌の巨乳は――年上の世代の女性と比べても偏差値67は優にあるだろう。そして大きいだけじゃなく、さっきの胸万力によって筋肉

量の少なさが立証された、武偵女子的には貴重なバストだ。
女子の胸は大きさだけではなく、柔らかさでも分類ができるもので――萌のこれは単に張りのある胸というだけでなく、母性を感じさせる水っぽさ・脂肪感・ミルク感がある。白雪・リサ系だが、分類学上は中空知のだらしない胸にもやや近い。
これ系の女子は、ヒス的には非常に危険な存在である。ヒステリアモードとはそもそも子孫繁栄のための能力なので、胸がある、つまり赤ちゃんを育てやすい女子には積極的に発動しようとするのだ。
などと考えてたら、過去の胸系女子どもの胸の感触をあれこれ思い出してしまいそうになり……
（い……いかんッ……！）
ちょっと頭を左右に振って、俺は追憶の肌色果樹園を脳内から振り払う。
さらに今そこにあるたわわな果実に意識を向けないため、目を閉じてしまいたいのだが――萌先生はノートに俺の学習スケジュール表を書いて下さっている。
そこで黙祷してるのもおかしいので、俺はノートだけを見ようと意識的な視野の狭窄に努める。
「計画はマクロからミクロへ。まず全体の目標を決めてから、細かい目標に割っていくの。1週間分の勉強量を割って、1日分の勉強量を決める。1日分の勉強量を割って、1時間分の勉強量を決める。30分、15分……どんどん細かく割って、最初の5分でここまでやる、っていう目標を決めちゃおう。このぐらいまで細かく割れば、どうかな？　勉強を始めるハードルが低くなった感じがしない？」
萌が赤鉛筆で参考書にマークした、俺が5分で覚えるべき項目の量は……
ごく、僅かだ。
5分どころか、3分ぐらいでいける量に見える。
さすがの俺も、この程度ならやっつけられるだろう。
「……あ、ああ」
「じゃあ、5分。ここだけ覚えようね」
「5分でいいのか？　今日は本来、3時間って……」

俺がそこを気にすると、右隣から菊代が――

「最初、そこは考えなくていいんだよ遠山。まずは5分やり遂げることを目標にするの」

携帯を取り出してタイマー機能を起動し、「はい、じゃあ頑張りな」とスタートさせた。

なので、俺は騙されたと思ってまずは5分――

教科書とルーズリーフを行き来して、やってみた。お勉強を。

――ピピッ、と、菊代の携帯からタイマーの終了音が鳴り……

「はい、おわり。お疲れ、遠山」

「……」

菊代に言われて作業を中断し、顔を上げた俺は――

「どう？　湧いた？　やる気……」

脳生化学的な自説が俺にも通用したかどうか、少し心配そうに顔を覗き込んでくる萌に言われるまでもなく……確かに、なんとなく……

このまま、30分ぐらいなら勉強を継続できそうな気分になってる事に気づかされる。

途中で中止するのがもったいないような、そんな気持ちだ。

これが『やる気』というのなら、確かに湧いたぞ。

「ああ……」

「よかった！　他にもコツはいろいろあるけど、今日は『目標を立てて、全体の作業量を把握する事』と『作業スケジュールを細かく割って、取りかかるハードルを下げる事』を覚えてね。じゃあ次はこのまま、ここまで――25分、がんばろう」

そうして俺は萌に誘導されるまま、25分勉強して5分休むというサイクルを何回か経て――最後は1時間以上ブッ続けで、合わせて3時間の勉強をこなすことができた。

……効くぞ。この、萌の『やる気学』は。少なくとも俺には。

「1日3時間って決めたら、調子が良くてもそれ以上は勉強しないでね。自由時間が無くなっちゃうし、貯金が出来

ちゃうと次の日それを使って休みたくなっちゃうから。続きはまた明日、自習室で一緒にやろう」

ちっちゃく力こぶを作る仕草をした萌先生は、ふんわりしたボブカットの髪を揺らして俺にニッコリ微笑(ほほえ)みかけてくれる。

生徒のプライベートな時間や翌日のやる気まで考慮するとか、ほんとに先進的だ。

勉強を『死ぬ気でやってこい！』としか命じないブラック企業的な教務科(マスターズ)の指導法とは隔世の感がある。もう教務科は廃止して、萌が先生やった方がいいんじゃないかな。

萌が自分の勉強用に本棚へ向かうと、それを見送った菊代(きくよ)は……

「はい、お疲れ」

と、またコーヒーを運んできてくれた。そして、

「これからはヤクザも学が無きゃ務まらないからね。遠山(とおやま)、萌に勉強の仕方を教わって、学校ぐらいちゃんと出とくんだよ？　卒業したらアンタを初代総裁にして、、から、家を立ち上げるんだから。凌(しの)ぎはアタシが切り盛りするからさ」

今は萌(カタギ)に預けるけど将来的には極道(こっち)に就け、的な事を言ってくる。

ていうか菊代、お前そんな理由で俺の勉強に協力的だったんかい。

「前も断ったが改めて断る。俺個人はともかく、遠山家(うち)は正義を愛するアレな、家なんだ。暴力団なんかに就職した日には、兄というか姉というかに射殺――」

――つっ、と、唐突(とうとつ)に――

語る俺を見る菊代が、眉(まゆ)を寄せた。

何かに突然、気づいたかのように。

「何だよ。俺はヤクザにはならないって、前も言っただろ」

「……まァ、それはまた話すよ」

セーラー服を着た姿がまだ新鮮に見える菊代は、口をとんがらせて、机に目を落としてから……

チラッ、と俺に流し目してきた。

そして、
「気をつけな」
と、小声のハスキーボイスで言ってくる。
「何にだよ」
「何にでもだよ。これはアタシの勘なんだけど。アンタ今背中が煤けてる感じがした」
「……何だそれ。どんな感じだよ」
俺が分からないという顔をしていると、菊代は――
斜めに視線を逸らしつつ、言うか言うまいか迷ってからボソッと、こう告げてくるのだった。
「――同じ感じなんだよ。パパが殺られた時と」
……

4弾　いま万感の想いを込めて

武偵高の終業式・卒業式は、通常の高等学校・職業専門学校より遅い3月28日にある。

とはいえ例の欠席消化が実質的には春休みになっているので、生徒にとっては休み中に式があるという感覚だ。その後、在校生にはランクの昇降や進級の可否が通達される。

泥縄式の付け焼き刃とはいえ、萌&菊代と勉強をした上で一般教科の期末試験を受けた俺は……翌日の終業式に備えて……

試験疲れで、泥のように眠った。

泥のように眠ることに、成功した。

成功した、というのは――今の俺の生活に於いては、ただ眠い時に寮の自室で寝れるかどうかというだけでも成否が問われるからだ。

現在、俺の部屋の玄関扉には合鍵が作られまくり、アリア、白雪、理子、レキ、かなめ、リサがフリーパス状態で出入り可能。去年いっぺん合鍵の出所にクレームしてこれ以上の被害を防ごうと思ったんだが、カードキーのコピーを500円でホイホイ作っていたのは装備科1年の真弓真由美というダジャレみたいな名前の女子だった。こいつがキャスター付き点滴スタンドを自ら引きずって歩いてるような病弱系女子で、それをボコるわけにもいかず問題を放置したまま今に至る。

そのせいもあり俺の部屋には先に列挙した一連のヤバい女子どもが常時ウロチョロしており、玄関からベッドまで歩く間でレキ以外のどれかに捕まると、仕事を手伝わされたり、ゲームに付き合わされたり、不必要な世話を焼かれたりで、寝る事すらままならなくなるのだ。俺がベッドを目指して歩くパックマンだとすると、一本道に色とりどりのオバケが待ち構えている状態。そんなんムリゲーですやんね？

不死身の『詰』様もずっと寝なきゃ（多分）死んじまうので、そこは『いないよりは、いた方が便利』程度の性能でおなじみの俺の戦妹、諜報科1年・風魔陽菜に修行と偽って部屋の監視を依頼してある。これにより俺の携帯には寮の自室から誰もいなくなった時に『今無人也』とメールが来るので、そこでコッソリ帰れば寝れるのだ。

そうやって昨日の夜、俺は誰もいない自室に無事生還。嬉しさでつい涙ぐんじゃったね。

俺の見立てでは昨夜から今朝にかけて出現可能性が高そうだったのはリサと白雪だったが、2人とも俺が寝てるのをわざわざ起こしてくるような事はあまりしない。ので、俺はベッドサイドテーブルにベレッタと9㎜弾、武偵手帳、目覚まし代わりの携帯を放り――二段ベッドの下段にブッ倒れ……眠ったのだ。これぞ我が世の春。半日だけの春休みだ、と……

……ピン、ポーン……

慎ましいドアチャイムの音で、目が覚める。

枕元の携帯を見ると――時刻は、朝の7時。

（こんな朝っぱらから、誰だよ……）

眉を寄せて起きながら、あのチャイムの慎ましさで分かった。白雪だ。アイツは合鍵を持ってるくせに、なんで分かるのか怖いものの俺が在室の時は一応ドアチャイムを鳴らすからな。ノックするような感じで。

（なんだか、始業式の日に戻ったみたいだな……）

いや、違う。

朝イチから現れて家事をする系の女子が、東洋・西洋の2人に増えてる……

「キンちゃん、おはよう。リサちゃんもおはよう」

「ご主人様、奥様、おはようございます」

のたくたとリビングに出たパジャマ姿の俺に、白雪とリサが並んで笑顔を向けてくる。

武偵高の標準セーラー服と、改造セーラーメイド服で。

「2人とも、いいかげんその呼び方やめてくれよ……」

アクビを放ちつつ顔を洗いに行く俺だが、未だにこの2人が仲よくしてるのは奇跡だと思う。

天井裏に潜ませていた風魔の話によると――俺が帰国したあの朝、この部屋で俺を待つリサと星伽から帰ってきた

白雪がハチ遭わせした。そこを回避できた俺の危機察知能力も自分で自分を誉めてあげたかったが、もっと賞賛に値するのはリサの対応力。

覗き見していただけの風魔にすら心的外傷後ストレス障害が残るレベルの殺気を放った白雪を、リサはいきなり笑顔で『奥様』と呼んで人妻扱い。それの何が嬉しかったのか、白雪は瞬時に鎮まったんだそうだ。

それからはリサに『奥様、奥様』とチヤホヤされて、今も気分良くしてる。

「キンちゃん、これ……ほつれてたから、直してきたよ」

と、白雪は俺の防弾制服やホルスターを修繕したものを風呂敷に包んで渡してきた。

今まで散々乱雑に扱ってたから、あちこちボロくなってたんだ。

「ああ、ありがとう。さっそく着させてもらうよ」

と、受け取るが……風呂敷に染め抜かれてる星伽家の家紋――星に笠。緋緋神の事件を否が応でも思い出させられて、心臓に悪いね。

（あいつ、宇宙で元気にしてんのかな）

窓の外に広がる青空を眺めてそんな事を思いつつ、ベッドルームに改めて引っ込み……

――

寝起きなので、ズボンをはく際によろめいたりしていると――

背後に、視線を感じた。白雪だな。

「おい、男の着替えなんか覗くなよ。いや、お前が女の着替えを覗いてたらそれはそれでアレだが……」

ネクタイをしめながらお小言しつつ、振り向くと……確かに白雪は、そこにいたんだが……ぽろっ、ぽろろっ、と……

まあるい涙を、その黒目がちなタレ目からこぼしていた。俺を、見て。

「えっ、なんで。どうして泣くんだよ」

「あっ、ごめんねキンちゃん」

白雪は、あはあは、と少し焦りつつ白い指で涙を小さく拭う。そして、

「ごめんね。いつものキンちゃんだって思ったら、私、なんだか急に安心しちゃって……嬉しくて、涙が……」

と、あれだけの大事件の後とあって、少し情緒不安定な感じだ。
強襲科で習ったが、ハードな事件は人の心を蝕むことがある。その現場から日常生活にいきなり戻ってくると、混乱したりメンタルに来ることもあるんだとか。
アリアはタフだから全く大丈夫そうだが、白雪はどうかな。
「いつもの俺って。俺はいつも、いつもの俺だよ」
ちょっと心配した俺は、少し優しく言ってやり頭をポンポンと撫でてやる。
すると白雪はこくこくと頷き、ほっぺたを赤くして……
甘えるような上目遣いで、俺を見てくる。
なんというか……
大丈夫そうでは、あるな。
（白雪こそ、小さな頃から変わらないよな。こういう、いい意味でおとなしい性格……）
でもまあ、しばらくは優しくしてやるか。要経過観察ってことで。
幸せそうに風呂敷を畳む白雪も、自分の家紋から事件の事を思い出したようで――
「キンちゃん。あの……緋緋色金の件、ごめんね。わざわざ宇宙まで……」
もう何度目か分からん謝罪を繰り返そうとしてくる。
「ああ、もう謝るなって。宇宙のことは日常で思い出すと心臓に悪い。おいリサ、救心を持ってきてくれ」
俺的には、一連のバトルより何より……
スペースシャトル。あれが完全にトラウマだね。
打ち上げ時も揺れたが、大気圏再突入時も揺れが酷かったのなんの。周回宇宙船は宇宙から降下してきて、グライダーみたいにケネディ宇宙センターの滑走路へ着陸するんだが――そのための燃料は積んでおらず、翼とボディーによる空気抵抗だけで減速するというムチャな乗り物なのだ。そもそも。
時速2万4千kmで大気圏にダイブし、次第に濃くなっていく空気との摩擦でピンク色の炎に包まれながら……空気

抵抗を受ける距離を伸ばすため、モンローさんの指示で機体は蛇行するように振られた。2度、3度、4度。
機体から上がるガタガタ、ミシミシという異音をBGMに聞かされた……「それじゃ、第1Sターンいきまーす」
「お次は第2Sターン～」「第3S～」「第4～」……モンローさんの甘い声が、恐怖体験の記憶と共に脳裏に甦る。
あれ以降、宇宙って単語を聞くと動悸・息切れがするようになっちまった。
救～心、救心っと。薬は漢方薬に限りますよ。
「モーイ。縫い物も大変お上手です。まさしく、奥様は良妻賢母のタマゴでございますね。ご主人様は世界一の幸せ者でございます」
薬を持ってきたリサが、俺のショルダーホルスターを見ながらそんなおべっかを白雪に使ってるよ。
ていうか何かおかしいだろ、『奥様は良妻賢母のタマゴ』って。言葉として。
「ふふ。リサちゃんは本当にいい子だね。この子ならおメカケさんにしてもいいよ、キンちゃん」
しかし奥様は言葉の違和感なんか完スルーで、俺のメイドをイイ子イイ子。頭を撫でてやってさえいる。
なんなの、その……俺の意思が全く反映されないままに構築されていく、家庭内の女の序列みたいなもの。痛たた。
「おいリサ、太田胃散を持ってきてくれ……」
これも生薬だから、俺に効くんだよな。ありがとう、いいくすりです。
ていうか、魔女連隊のイヴィリタは呪いの男を殺せないって悩んでたけど――殺すにはトラウマを突いて心臓にダメージを与えたり、ストレスで胃にダメージを与えたりして、中から破壊すればいいんじゃないかな。特に胃は女さえ押しつけりゃ基本ストレス感じて胃潰瘍まっしぐらなんだし、楽なもんだろうよ。実際やられても困るけどさ。
魔女連隊で思い出したが、厄水の魔女・カツェ＝グラッセと俺は今――メル友というか、SMSで遣り取りをする仲になっている。
極東戦役ではお互い上にコキ使われてトンデモバトルばかりやらされてきた戦士として共感したというのもあり、

あれとは敵味方だが少しウマが合ってたからな。
俺は元々カツェたちのメイドだったリサが日本でよろしくやってる話をメールしてやり……カツェは通学してるお嬢様学校の様子とかヒス性を孕む写メを送ってきたりするんでイラッと来るが、それは我慢しつつ……俺は元・眷属の傭兵、『妖刀』と『魔剣』の情報を、コツコツ引き出している。
実質的には魔女連隊が1人1億円ぐらいで雇ってたらしいあのペアは……俺を捕まえた後、ドイツで姿を消したらしい。
そこでその契約は満了したって事で、カツェは雇用契約書も写メってくれてる。魔女の契約書だけあって赤インクでサインされている不気味なものだったが、書面の文言よりも重要だったのはその本名の署名。『原田静刃』の漢字が分かった事だ。
かなり珍しい当て字なので特定は容易だろうと、チーム・コンステラシオンのポンコツリーダー・ジャンヌに調査依頼をしたんだが……
「お前は妖刀にこだわりすぎる。今後、警戒すべきは妖刀より魔剣かもしれないぞ」
と、イマイチ非協力的だ。
ちなみにこのジャンヌ、終業式にチーム監査役の俺が遅刻しないよう起こしに来た……という建前で、リサと白雪が作った朝メシのテーブルに制服姿でちゃっかりついている。
こいつはフランス人のくせに、たまにゴハンと味噌汁が無性に恋しくなるんだそうだ。
「なんでだよ」
「確かに原田の戦闘力は並外れている。あれが傭兵でなく正規眷属であれば、極東戦役は逆の結果になっていたかもしれない。だが、これから急成長する可能性が高いのは魔剣・アリスベルの方だ。数年内には――極東地域では、超能力の急騰が起きるかもしれないのだからな」
「……？」
サファイア色の目を閉じて、つつー、と赤味噌のナメコ汁を品よくお召し上がりになる銀氷の魔女さんだが……
「なんだそのインフレとかって」

「緋緋神の一件でようやく分かった魔学的事実も含むから、お前に罪があるとは言わないがな」

なんか、イヤな前フリから入ってきたなジャンヌ。

「――色金とは感情の動きと共に、目には見えない雑多な粒子を広域に放出・拡散させる物質だ。その一部が阻害粒子となって、超能力者の力を断続的に弱めてきた。歴史的に、ユーラシア大陸東部には璃璃粒子が、北米と欧州には瑠瑠粒子が観測されていてな。その璃璃粒子と瑠瑠粒子は差違の検知が難しい、同素体と言えるものなのだ」

……いかん。

勉強したとはいえ、化学の応用みたいな話が出てきたぞ。

璃璃だ瑠瑠だと紛らわしいのに、さらにややこしさをプラスしてくるとか、困りますよジャンヌさん。

「少なくとも私の知る限り、その色金粒子が璃璃粒子なのか瑠瑠粒子なのかは――人々にずっと無視されてきたのだ。阻害粒子としての影響は全く同じだったし、それを検出する意味が無かったからな。2種の色金粒子は、その影響が検知された地域がどこかで区分けされてきたのだ」

「つまりね、『アジアに降るのが璃璃粒子で、ヨーロッパに降るのが瑠瑠粒子』って事にしてたの」

ゴハンのおかわりをよそいながらの白雪が補足してくれたおかげで、やっと分かったぜ。

「そして先日その所在地が明らかになった緋緋色金の原石も、多分、粒子……緋緋粒子を出していたのだ。だがその緋緋粒子は璃璃粒子と見分けが付かず、ずっと璃璃粒子と混同されてきた。玉藻やツクモ……妖獣たちは、緋緋粒子の存在を感覚で認知していたようだがな」

ロシアの東部にあった璃璃色金と、青森にあった緋緋色金は――地球規模で見れば近いところにあったから、粒子の発生源として1つだと思われてたって事か。

「緋緋色金が衛星軌道に移った事で、アジア……特に極東地域の色金粒子は薄まるだろう。つまり超能力者たちにとっては、『晴れの日』が多くなるのだ」

雨のように降ったり止んだりする、色金粒子――

実際それは、お天気のようにコロコロ変わる女たちの感情に呼応して出たり止まったりしてたわけだが、その降雨量が……

滅る、というわけか。

「元から色金粒子が無い地域、たとえば東欧では魔学が発展しやすかった。ルーマニアが歴史的に黒魔術の先進国なのには、そういう事情もあるのだ」

「――つまり今後、日本の超能力者が強くなるかもしれないって事か」

白雪が大盛りによそってきた白飯を食いながら、俺は俺なりにその話をまとめる。

緋緋色金を宇宙に返してやったのは人道上の措置だから、後悔はしてないが……

俺は、かなりデカい墓穴を掘ったのかもな。日本に何人の超能力者がいるのか知らんが、その皆さんが揃って過ごしやすくなるような気候変動を促しちまったってワケか。

だが、超能力そのものに罪は無い。

問題はそれを使う人間がどうあるかって事。悪用するヤツは今まで通りとっちめるし、超能力をいい事に使う超能力者も強くなるんなら、それは歓迎すべき事だろう。

魔剣ことアリスベルが今度どっちに転ぶかは知らんが……

どうあれ、見つけたら妖刀の原田静刃同様モーレツにイジメてやるぜ。武偵は義理堅いんでな。

リサは終業式の前に買い物をするとかで早く出て、ジャンヌも朝メシを食うだけ食って出ていった。

そうして、静かに終業式の集合時間が近づいて――片手で肩にカバンを引っかけた俺と、学校指定の通学カバンを体の前で両手持ちする白雪が、一緒に寮を出る。

天気は快晴。すっかり暖かくなった太陽が、眩しくて気持ちいい。

空き地島の風力発電機は、西北を向いてる。東京湾の湿気や品川の排気ガスが来ない、一番いい風向きだね。

今日はテストも授業も無いし、気分爽快な朝だ。

「タイヤの空気圧良し、ライトの電池良し、サドル下に爆弾無し」

自転車置き場でチャリを大げさにチェックして見せると、

「ふふっ。キンちゃん、おおげさだよ。でも、かっこいい」
口元に立てた手をちょっと当てて、白雪がちゃんとリアクションしてくれる。
こういうとこ、アリアと違って空気が読めるから和むよなぁ。白雪は。ボケ甲斐のある相手というか何というか。
俺が跨がったチャリの後ろに、白雪を横向きで座らせてやり……モジモジしてから腰にそっと抱きついてきたのは、そのままにさせてやる。
「今、星伽は大丈夫なのか？　御神体を失って」
武偵高の私道となってる道路を走りながら、そんな話を後ろの白雪に振ると……
「玉藻様から聞いてるかもしれないけど、まだ星伽神社にも緋緋色金は少し残ってるの。緋緋神は本体が天に還ってて。残った緋緋色金はバレーボールぐらいの大きさだけも、一部分は長く過ごした星伽神社に残りたかったんだってど、きっと世界最大のものだよ」
「ふーん。まあ、そんぐらいのサイズの方が、よくある御神体っぽくて雰囲気あるかもな。あれはそもそも、デカすぎたのさ」
ちなみにあの後、緋緋色金が長年鎮座していた神奈備からは大量のルビーが発見されたってんで大騒ぎだったそうだ。白雪のご先祖様たちが供えたのか、それとも緋緋色金の謎パワーで火山岩の酸化アルミニウムが結晶化したのか知らんが、とにかく俺は惜しい事をしたもんだぜ。カッコつけてアリアと白雪を守ってるヒマがあったら、ズボンのポケットいっぱいに足下の石をパクっときゃ良かった。数打ちゃ当たるで、1粒ぐらいはルビーが入ってたかもしれなかったのによ。
「……」
「……」
白雪は俺と2人っきりになると相変わらずウットリした顔で言葉少なになるのと、俺も女子が面白がる話題なんか全くご提供できないのとで、静かになる。
チャリをこぐ音、時々追い越していく車の音、スズメのチュンチュン鳴く声……
カッコー、カッコー、という、歩行者用信号が鳴らす視覚障害者用の誘導音……

「キンちゃん……自転車の運転、上手だね……」
ウットリと後ろからそんな事を言ってくる、白雪の声。
「こんなもの誰でも乗れるだろ」
「ううん。私は乗れないよ。補助輪があっても転んじゃうの。乗せてくれて、ありがとうございます」
ほんと、そんな運動神経でよく女子バレーボール部の部長が務まるよな。
だが、相変わらず日本美人の白雪に改まってお礼を言われると俺もテンパり、
「あ……いや……お前こそ、いつも家事、ありがとうな。特に部屋を掃除してくれるのは助かるよ」
お礼を言われたので何かお礼を言わなきゃ、と、なぜか思ってしまい……そんな日頃のお礼を改めて言ってる始末。
なんだろうねこのギクシャク感。白雪とはいつもこうだ。
「ううん。最近はリサちゃんも手伝ってくれるから。私、楽しちゃってるかも」
苦笑いする白雪は相変わらずとにかくキレイ好きで、俺と理子の『片付けられない男女ツートップ』が汚す家の中を清潔に保ってくれている。ベランダも風呂場も、ドアノブに女子力の高いドアノブカバーを付けるのは少々アレだがトイレも常に一流ホテルみたいにピカピカにする。本人は楽してるなんて言うが、リサというメイドを使いながらも決して任せっきりにはせず、自分でやるべきことは自分でやっているのは見てれば分かる。
星伽巫女として、武偵高の優等生として――諸々の仕事をこなしながら、家事も完璧にこなす。本当に、日本人女性の鑑みたいなパーフェクト女子だよ。白雪は。
「キンちゃん」
きゅ、と、白雪が俺の腰を抱く腕に少しだけ力を入れ……頭を、俺の背に付けてきた。
「ん？」
俺が振り返ろうとすると、
「……いなくならないでね……」
顔を伏せて、白雪はそう呟いた。

「なんだよそれ。いなくならないさ。もっと、お前の近くにいるようにするよ」
今ちょっと心の中で誉めすぎたが、白雪は何キッカケか知らんが俺の近くにいる女子を日本刀で突然一刀両断にしようとしたりする発作持ち。『わーってなっちゃう子』なのだ。
なのでできるだけ近くにいて、白雪の被害を受ける女子を守ってやらんとね。
だが白雪は心配性で、
「去年の春の占い、キンちゃんは覚えてる？　『キンちゃんはいなくなる』って出たけど……まだ、それが起きてないから。私、それが怖いの。巫女占札って、数年以内のことを占うものだから……まだ、起きる可能性があるから……」
などと、俺にしがみついて離したくないような仕草をする。
「あれはもう起きたんだよ。すぐ帰ってきちゃったからお前は実感無いかもしれないが、俺は去年いっぺん退学してるんだ。あれのことさ」
「ううん。そういう短いのは『いなくなる』って事じゃないから……」
辛気くさいなあ。
面倒くさいなあ。
「大丈夫だって。もう俺は退学になったりしない。期末試験も予習して受けたし、保体も転がしたエンピツが頑張ってくれたハズだ。出席も足りてる。大丈夫、大丈夫」
元気よくそう言ってやってる内に――
まばらに道を歩いていた武偵高の生徒たちが、どんどん増えていく。
終業式・卒業式の会場……講堂が近づいてきたからだ。
となると、人目が気になってくるが――白雪は逆に、俺とチャリに2人乗りしてるのを不特定多数の生徒たちに目撃されたいらしい。実際そうなると、なぜかそれが嬉しいのか、さっきまでの暗いムードから明るい声になってくれた。
「そう……だよね。そうだよねキンちゃん。これから、ずっと、緒にいられるよね。あっ、進級したら同じクラスに

なれるといいね。アリアが違うクラスだといいね」
「お、おう」
そうして、三分咲きの桜のアーチをくぐって――
俺と白雪は、大講堂へと高2最後の登校を果たす。さあ、終業式だ。
弾痕を縫ってごまかした跡のある緞帳を左右に開き、緑松武尊校長が壇上に立っている。
「――武偵の武とは、戈を止めると書きます……」
ていうか、うちの校長ってこんな声の、こんな人だっけ？
何度か会ってはいるんだが、この人だったような、この人じゃなかったような。
さすがは『見える透明人間』と感心させられるやら、ゾッとさせられるやらだよ。
「――皆さんは犯罪の戈を止める武偵として、日本の、そして世界の未来を……」
この式、ゾッとさせられるのは校長の事だけじゃない。
終業式の後には卒業式が続けて行われるので、大講堂の前方に3年が陣取ってるのだ。
3年にもなれば、武偵高生は大抵プロとして仕事を次々こなしている。
なので普段校内にあまりいないし今も半分ぐらいしか集まっていないんだが、ああして並ばれると――ヤバいだろ、あの圧倒的な存在感というか、殺気は。
どいつもこいつも、背後からでさえ正視したくない。ただ者じゃないぞ、全員。離れて座ってるのに、同じ空気に触れてるだけで肌が切れちまいそうな鋭利な雰囲気がある。
しかも皆、その気配を一般人には気づかれないよう――制服の中に、キッチリ隠してる。
ちょっと油断すると1人1人が至って平凡な若者に見えるのが、むしろ怖い。
その雰囲気がまだ感じ取れない1年どもはみんな平気でいるが、むしろそれに気付けてしまう2年の多くは、俺と同様……3年の背を見つつ、額に緊張の汗を浮かべてる。
（イヤだねー……俺たちもああなるのかよ、1年後には……）

なお、恐ろしい事に、あの3年の、部は、般の大学や短大に推薦入学が決まっている。虫でも筆記に合格できると言われる武偵大ならともかく、一流大学を含む私大や国立大になんであんなのが入れるのかというと――最近は大学構内の治安も日に日に悪下しているからなのだ。

大学は不審者がショットガンを無意味に乱射したり、不良学生が安い銃で事件を起こす前に、実銃を水鉄砲ほどにも怖れない学生武偵を番犬代わりに推薦枠で入れておく。学警武偵と呼ばれるその学生は武偵の身分を隠し、平凡な学生のふりで静かに学校に通う。そしてキャンパスに害なす悪を人知れず潰す代わりに、分不相応にもマトモな大学教育を受けさせてもらえるのだ。

推薦でなくても、一般大学に進学する卒業生は少なくない。まぐれで入れた一流大でも、定員割れを起こしているような三流大でも……既にプロとして仕事をしている武偵には、『武偵以外の身分』がある方が便利だったりするからだ。普通の学生のフリをして大学に通いながら、裏で武偵としての仕事を続ける――そういう卒業生たちにとっては、高3の1年間はその練習期間だったとも言える。

他にも……防大や防衛医大というある意味クラスチェンジ的な進路もあるし、進学せず独立の武偵として個人事務所を始める者、武偵企業に就職して月給取りになる者もいれば、進路を学校に秘し、単に消える者もいる。

そうして……

あの研ぎ澄まされたライフル弾みたいな3年たちは、世に解き放たれていくのだ。

社会に溢れる犯罪の戈を止める――武偵として。

終業式が終わって講堂から出る際、出口付近は俺たち在校生で混雑していた。

武偵高では4月に全員が名札を付けるという形骸化した規則があるんだが、その名札を教務科が大講堂の廊下で配るという運営ミスをしたせいだ。

そこで白雪の手を引いて歩いてたら、人ごみの向こうにアリアと理子を見かけ……あとレキがいれば旧バスカービルが揃うぞと思ったんだが、どうも来てないっぽかった。

電話してみたら国際電話のコール音がするだけで――そこで人ごみに押されて右往左往してる中空知を見つけたん

で、50円払ってコール音を聞かせたらMTSとかいうロシアの通信キャリアの携帯呼出音だと教えてくれた。レキはまだロシアにいるって事か。

なんとか名札を受け取り、大講堂の外で俺・白雪・アリア・理子が合流すると……

「こういう式典があると、未来への期待に胸が膨らむわね」

爽やかな笑顔で青空を見上げたアリアがそんな事をのたまい、

「期待に」

「胸が」

「膨らむぅ？」

俺・白雪・理子がそれぞれアリアの胸が膨らんでない事を服の上から目視確認し、

「なんであんたらセリフ割って言えてんのよ！」

最後はこれがなきゃアリアさんじゃない、二丁拳銃のガバメントから鉄砲玉が飛び出して——

そうして、俺たちは2年を終えた。始まった時と同じ、銃声と共に。

さて、それはそうと——

その後すぐ、お呼びじゃないのが現れた。

「おーアリア女史。お疲れ様ですよ。こっちこっち。こっちです」

最初は生徒たちに隠れて見えなかった……春物のトレンチコートを引きずる、メガネでお下げで眉の太い女子小学生。に、見える大人。

かつて俺やアリアと新宿～原宿～表参道で派手なカーチェイスを繰り広げた——

外務省 欧州局 事務官・銭形乃莉だ。

大講堂の隣……梅・桃・桜を一カ所に集めて植えた中庭にアリアを呼び出した、銭形は……俺とアリアが揃ってるのを見ても、別に目くじら立てる様子は無い。

その理由は——

すぐに、分かった。

「いやーしんどかったです。副大臣命令をくらってからこっち、ツイッターとかフェイスブックを駆使して、徹夜に次ぐ徹夜の大捜索。全員じゃないですけど、なんとかこれだけ集めたですからビックリしろです。はい、サプライーズ！」

ダブダブの袖を振るうようにして銭形が示した中庭には、去年4月のバスジャックからアリアが助けた武偵高生や、ハイジャックから助けた乗客、ＡＮＡのパイロットとＣＡ、ココ姉妹に乗っ取られた新幹線から助けた人々と思われる一団がいたのだ。

他にも沢山の老若男女がいるんだが、どうやらここに居るのは……

みんな直接であれ、間接的にであれ、アリアに助けられた人たちらしい。

中庭に集った彼ら彼女らには菓子やらジュースやらが振る舞われており、ちょっとしたお花見パーティーみたいになってる。

その中心の辺りには、アリアの顧問の連城 黒枝弁護士と、1年の間宮あかりがいる。

その間宮が、アリアの活躍を針小 棒大に語っている相手――

――その、人物に。

俺も、理子も、目を見張る。

白雪はこのイベントが何となく予見できてたらしく、アリアの方を見る。

そのアリアは、この中庭に踏み込んだ瞬間から絶句して……

柄にもなく、小さく震えてさえいた。

嬉しくて。

嬉しくて。

長年の願いが叶って。

「ママ……！」

「アリア……！」

そう。

ゆったりしたロングスカートのワンピースを着て、春風に長い髪を揺らし、花咲く庭の真ん中に佇んでいた、その人は。

アリアの、母親。

神崎かなえさん。だったのだ。

釈放……されたんだ。

「……ママ……！」

そこにママがいる事が信じられない、という目で、アリアは震える足を……

ヨロヨロと一歩ずつ、前へ進めていく。

「おい星伽白雪。何を奏上したか知りませんが、実質、お前からの書翰が効いたですよ。宮内庁経由で内閣府が法務省を動かして、神崎かなえについては、法務大臣が検事総長に対する指揮権を発動させて裁判を止めさせたです。これは間々起きる事ではあるですが、それにしても即日釈放なんて久々に見たです」

よく見ると銭形は昼間から少し酒が入ってるらしく、ペラペラとそんな事を語ってる。

名指しされた白雪は、聞こえなかったフリでアリアに付き添って歩いている。

これは、夢じゃない。本当に、日本政府が……

超能力世界の核物質・色金について知りすぎていた故に拘束していたかなえさんを、釈放したのだ。日本から緋色金の本体が無くなってしまった以上、それを警戒する事も利用しようと企む事も意義が薄くなってしまったから。

それに加え、今の銭形の発言でもピンと来たが……政府筋は、アリアを畏れての対応をした感じがある。かなえさんのこの唐突な解放っぷりが、それを物語っている。

では、『白雪の報告』にあった何を政府が畏怖したのか？　何に対してビビったのか？

言うまでもない。

超々能力者（ハイパーステルス）、『緋弾のアリア』の降臨（こうりん）だ。

実際のところレーザーを撃つぐらいしか今はまだできないが、その能力は未知数。今後何が飛び出すか分からない緋弾のアリアと敵対するのは、国家レベルでもイヤな話なのだ。

今の銭形のリークでそこも分かっちまったが、その情報が、瞬にして内閣や省庁に行き渡った理由は、考えるのも畏れ多いが……『緋緋色金という国宝が天空へ還（かえ）り、その力を身につけた少女が出現した』旨を、白雪が元々コネのあった宮内庁に報告し――その話が、やんごとなき御方（おかた）の御聴納（ごちょうのう）を賜（たまわ）ったのだ。そして、それについて何かしら仰（おお）せになった。

「……」

そして今、俺（おれ）は、ただ、ただ……

万感（ばんかん）の思いを込めて、抱き合うアリアとかなえさんを見つめている。

よかったな、アリア。

よかったな……！

「ママ……ママぁ……！」

「……アリア。ここの人たちに聞いたわ。ううん、聞かなくても、ここの人たちが祝ってくれてる事が何よりの証（あかし）。あなたは――立派な武偵（ぶてい）になっていたのね」

「……ママ……うぁぁ……うわあぁあー……！」

間宮（まみや）の前だってのに、アリアはもう何もかも忘れて――

かなえさんの胸に顔を埋めて、泣きじゃくってる。

かなえさんも、まるで女神のようにアリアを抱擁（ほうよう）してあげていて……

それを見てたら俺（おれ）ももらい泣きしそうになっちまって、

「――無罪放免（ほうめん）って事でいいんだな？　仮釈とかじゃなくて」

ちょっとしゃがんで銭形（ぜにがた）と目線の高さを合わせつつ、ギロリと睨（にら）んで涙をこらえた。

「疑うんなら最高裁判事の法規命令書でも見るがいいです。実質そういう事が書いてあるですよ。神崎かなえ女史は釈放。アリア女史の強制送還も、お前の国外退去推奨も全部まるっと解除です」

「……」

俺、そんなん推奨されてたの？　あの時。やんなっちゃうね。

だが、ともあれ――

アリア。

お前はやっぱりもう、独唱曲じゃないのかもな。

俺と2人の二重唱でもない。

こんなに沢山の……

お前の周囲にいるみんなとの、合唱曲が開かれてるんだからさ。

よかったな。アリア。本当に、良かったな。

人ごとながらあまりに嬉しくて、マジでもらい泣きしちまいそうだったので――

俺は恥ずかしくて、中庭をコッソリ後にした。
（理子あたりに泣き顔を見られたら、写真撮られて一生イジられるだろうしな）
そんなひねた事を考えつつ……このめでたい話を寮に戻ってリサにでも話そうと思い、ちょうど来た学園島循環のバスに乗る。
で、座席について携帯を見たら、着信とメールが来ている事に気づいた。
（……高天原、先生……？）
いけね。高天原先生からの電話に気づかないでスルーしちまってたよ。
メールの内容は、すぐ教務科の職員室に来て下さいとのこと。
イヤだなぁ。武偵高3大危険地域の1つ、教務科。しかも美人教師の高天原先生による名指しのご指名。やっと担任が替わると思って内心ちょっと喜んでたのに。
とはいえ、封建主義的な武偵高では教師の命令は絶対。
高天原はそういうタイプじゃないが、すぐ来いと言われたらすぐ行かないと命に関わる体罰が行われかねないのが常だ。
なので気持ちは焦るのだが……不幸中の幸いで、着歴は今さっきのもの。このバスにも教務科前の停留所があり、俺は本当に割とすぐ教務科の前に到着できた。
バスから降り立って、教務科棟を怖々仰ぎ見ていると……
「遠山君。君も呼ばれたのか」
おっ、珍しい顔に出くわした。
石雅斗――1年の時には同じクラスだったんだが、2年の時X組という特進クラスに入った英俊だ。
実際この男はアリア、レキ、そして昔の俺と同じSランク武偵。強襲科・狙撃科・車輌科を掛け持ちしてた超人で、武偵高生とは思えないほど勉強もデキる。
洒落っ気のない男で、女にモテるタイプじゃなく、ツラも体格もゴツめ。身長は180ってところだ。マジメ一徹

の仕事人間で、一石が任務をサボってる姿、遊んでる姿を見た者はいない。
法令を遵守し、仲間――特に年少者を必ず守り、頑健な心身を持ち、リーダーシップもある。卑怯な事、ズルい事は決してしない。
そんな性格だから周囲の信頼も厚く、たぶん2年じゃ一番頼りにされてる男だ。
ただ……ちょっとカタすぎて、俺とはあまり合わないタイプなんだよな。
嫌いってんじゃないけど、正直、武偵には向いてないと思う。どっちかというと警察官とかのが適職だろうよ。一石には。
「一石――お前も教務科に呼び出し食らってたんなら、俺的には一安心だぜ。叱られる話じゃなさそうだからな」
「さあ。それはフタを開けてみなければ分からないぞ」
ははは、と朗らかに笑う一石だが……確かに、相手は教務科だからな。何が飛び出してくるかは謎だ。
「じゃあ行くか。お前と2人で呼び出されるなんて、1年の4月以来だな」
「そうだ、思い出した。あの時も遠山君と2人だった」
武偵高では――似た字面の氏名の生徒がいる場合は、混同を避けるため下の名前の字を名簿上カタカナやひらがなに開く。
俺と一石は1年の時それに該当し、教務科に呼び出されて、それぞれ似た名前の生徒とジャンケンさせられたのだ。で、揃って負けた。
いろんな事が違う俺たちだが、ジャンケンの弱さだけは共通してるんだよな。
「雑談なんだが、一石――お前、SDAランキングって知ってるか？」
「……その話は、やめよう」
「お前何位だ。アジアで」
「55位だよ」
やった！　こいつ、俺より人間やめてるぞ。
というのも一石が在籍していた2年X組とは、主に海外の警察・軍警察・軍の特殊部隊、外人部隊、軍事顧問団な

どに雇用される超タフな生徒を在籍させておくクラス。16歳から即戦場行きのハードコースなのだ。

サッカーで言えばユースに置いとくのは勿体ない人材だから、とっとと大人のチームに――しかも海外チームに送り込んで、武者修行させてこようという育成強化枠。

X組への進級は1年修了時に教務科から打診があり、本人が許諾しなければ入れられる事は無いんだが……当時、俺はEランクだから、アリアは身分があるから声が掛からず、レキにはその話があったそうだが、断っていた。だが一石はそれを受けた。

「いやーそいつは凄いなあ、尊敬するぜ一石。俺は71位だ。お前のおかげでランクが1つ下がって悔しいぜ」

ガチでこっちを殺しにくるテロリストさんや兵隊さんを相手に、非殺を義務付けられた武偵が突っ込んでいくムリゲーを、年間やってれば――そりゃ人間やめ人間ランキングも上がりましょうよ。プププ。

「何だい遠山君。悔しいと言いながら、そんな嬉しそうな顔をしないでくれ。あの奇妙なリストはアメリカの格付け会社が勝手に……」

「ハイハイ」

俺はスキップしちゃいそうな気分だが……

分かるぜ一石。お前も地獄みたいな高2時代を送ってきたんだろ。お前は1年の頃からとにかく強かったが、それが更に思いっきりレベルアップしたような感じがあるもんな。さっきの3年たちみたいに、うまく隠してるが。

アリアやレキと同様、やっぱりSランク武偵とは絶対ケンカしたくないね。

と、俺たちは喋りながら2人で教務科に入り……職員室に、着く。

「一石マサトです」

「遠山キンジです」

先生たちは疎らだったが、さりげなく一石を盾にしつつおそるおそる中に入ると……

「あっ、2人とも。揃いましたね。じゃあ、こっちへどうぞ」

高天原先生が机から何やらA4の茶封筒を取り、衝立で仕切られたブースへと俺たちを案内してくれた。

教務科の職員室は、見た目だけはよくある職員室で――
その談話用のブースも、古びた低いソファーとテーブルがあるだけの狭い空間だ。
「……」
そこにはもう1人、知らない生徒がいた。黒髪セミロングの、女子だ。
キレイな子だが、チラッとこっちを見ただけで挨拶ひとつしないな。
レキの色違い・髪型違い版って感じがする。
「えーっと。みんな、忙しいところごめんなさいね」
ちょっと苦笑いしながら、高天原先生はソファーに座る。タイトなミニスカートで低いソファーに腰を沈めるから
中が見えそうで一瞬焦ったが、そこはさすが先生。中の書類を出した封筒を太ももの上に置いてガードした。助かっ
たぜ。
だが今、書類の表面の端っこが一瞬チラッと見えた。
秋霜烈日章――検察庁のマークだ。きな臭くなってきたな。
俺たちもそれぞれ、席につくと……
「一石君、佐伯さん、遠山君には――武装検事局から、お手紙が来ています」
メガネの下のおっとりした目を細めて、高天原先生がそう切り出した。
（……武装検事局？）
それは、父さんが生前所属していたところだ。
武装検事とは、超法規の公務員。国家社会の治安維持のため、刑事事件の捜査・起訴を行う検察業に於いて――超
法規の武力を以て、正義を貫く役職だ。
それは内閣総理大臣に任命される、国家公認の正義のヒーロー。武偵や警察はもちろん、ヘタしたら自衛隊でも解
決できない巨悪にさえ立ち向かう責務を負う。それがどんな敵であろうと、日本を害する悪に背を向け逃げる事は許
されない。
「突然の連絡だったんだけど、本年度の武検選抜が――明日からの3日間で行われるの。今年の卒業生も何人か受け

るんだけど、3人には飛び級でそれを受けてもいいって連絡が武装検事局から与えられました。この1年の活躍を独自に調査して、興味深い人材だって思ってくれたみたいよ。どうする？」

武検選抜……武装検事選抜試験……!?

それは文字通り武装検事を選ぶ国家試験。知力・体力・精神力・判断力・統率力・戦闘力といったあらゆる能力が問われる、命懸けの試験が何次にも亘って続く地獄の国試だ。

合格者は、年に1人出るかどうか。それがゆえに武装検事になれる人間とは正に完璧な超人であり、エスパーより少ない確率でしか世に現れないとも言われている。だが、

「ちょっと待って下さい先生。武装検事はそもそも大卒の検察官じゃないと――」

と、この話に面食らった俺が言うと。

「はい正解。3人が受けても、きっと武装検事になんかなれません。で、私もおかしいと思って探りを入れてみたら――武装検事局は慢性的に人材不足なんで、来年度から武検補、武装検事補佐官って官職を新設するみたいなのよ。今年度の武検選抜の受験資格が大幅に規制緩和されてるのは、落ちた人の中から武検補を採ろうっていう事なんじゃないかな。だからこれからは、武検補として活躍して、武検に出世するっていう叩き上げの道もある時代になるハズよ。もちろん全部、私の推理だけどね」

父が殉職している俺の手前、高天原は明言しなかったが……

武力で悪を断罪する武装検事は、殉職率が高い。

高いなんてもんじゃない。定年までに、3割近くが死ぬ。

聡明・屈強で、正義の心を持ち、公務員の薄給でも命懸けで戦う、そんな神様みたいな人材をボロボロ死なせていたんじゃ……『慢性的な人材不足』は避けられない。

だから検事局は――

（ふざけんなよ。やるもんか。つまりその話は……）

要するに――

「――辞退します、その話。武検補とは、弾よけでしょう」

黒髪セミロングの……

佐伯とかいう女子が、俺と全く同じ推測をクールな声で口にする。

つまり武検補とは、貴重な武装検事を守る身代わり地蔵。武装検事の座をチラつかせて正義漢を集め、動く防弾チョッキとして使い捨てられる『若い衆』ってことだろう。

「――俺も辞退します。どうせ落ちる試験を受けるなんて時間のムダなんでね」

俺も、ケーッ、と、毛玉を吐くネコみたいな顔で断る。

たぶん義務なんだろうからしょうがないんだろうけど、高天原もそういう生徒を死地に送り込むような話を正式に打診してくるんじゃねーよ。受けるワケないんだから、勝手に断っといてよそういうの。

さて帰ろう、と、気分を害した俺が立ち上がろうとした時――

「先生、ありがとうございます。受けます。受験票を下さい」

高天原に手のひらを差し出した一石に、俺と佐伯は目を丸くして振り向く。

まさか受けると言い出すヤツが出ると思ってなかったらしい、高天原先生もだ。

おい、一石。この話の本質が見抜けないお前じゃないだろ。今の高天原の話と俺たちの辞退があった上で、なんで……

と、尋ねるまでもなく。

「遠山君。君に話した事は無かったが、僕の夢は武装検事になる事なんだ。13年前、幼い僕と妹の命を救ってくれた――キミのお父上のような、武装検事に」

――何だって？

父さんが、子供の頃の一石を……そんな事があったのか？

熱く話す一石の声は、スイッチが切り替わったように真剣だ。

内容的には俺に語りながらも、視線は――驚いて受験票を出さずにいる先生に向けて、説得するようなムードを醸し出している。

「そのチャンスが、思いがけない形で降って湧いた。僕は、機会を逃したくない。大学を出るまで受けられないだろうと思っていた試験を受けられるのは、好機だ。1年目で合格できずとも、2年目、3年目と繰り返すうちにコツも掴めていくハズだ。武検選抜は25歳まで毎年受験でき、その回数に制限は無い。僕はきっと、なれる」

一石は途中から、俺よりも先生に対して語るようにムードを切り替えていく。

その巧みな話術で、高天原が受験させないよう説得しにくい空気ができあがっていく。

「でもお前、落ちて武検補として声が掛かったらどうするんだ。もし断ったら、検事局はお前に『上の命令に従わない人間』って印象を持つ。それは次の選抜に致命的な――」

「声が掛かったら、武検補になる。先生の仰る通り、そこから武検に這い上がる道もあるだろうから」

そこまでの覚悟かよ、一石……っ。

と、俺は黙ってしまう。

佐伯は……「バカなヤツ」という感じで、一石を一瞥するだけだ。

元から一石と面識はほぼないらしく、特に感情を込めた視線ではない。

「……分かったわ。じゃあ、一石君は残って。あとの2人は、お疲れ様」

高天原先生が、そう言い……

一石を置いて、俺と佐伯は職員室から立ち去るしかない。

だが立ち去りぎわに、俺は――

「……一石。叶えろよ。その夢」

もうこうなりゃヤケだ、とばかりに応援する。

マジメな一石には、ピッタリかもしれんしな。武装検事。

「ああ、叶えてみせる。ありがとう、遠山君」

と、一石はそのゴツい顔を上げて応えた。勇ましく眉をツリ上げたまま。

夢に向かうチャンスを得た、その燃える瞳の輝きに……

（……）

俺(おれ)はどこか、羨(うらや)ましいものを覚える。
フラフラと流されてばかりで自分のやりたい事をできずにいる、自分への——
微(かす)かな、焦りと共に。

manga-zone.org

5弾　神崎家の事情

晴れて自由の身となったアリアの母親・神崎かなえさんは、思ったよりずっとノビノビした感じのようだった。元ホームズ家の一員は、数年投獄されたぐらいなんともないんだなあ。

翌日の夕方、アリアから『ママとディナーを作るから、あんたも手伝いに来なさい』というメールを受けた俺は、取るものも取りあえずチャリで女子寮へ急行した。

それは料理の手伝いをしたかったからでは全くなく、アリアに怯えているわけでもなく、メールの文意が『アリアも料理する』と読めたからである。

（このままじゃかなえさんの身が危ないッ、それに女子寮が大パニックになるぞ……！）

アリアは俺の部屋で『ケーキ作る』と気まぐれに言い出して粉塵爆発を起こし、それでガスコンロを誘爆させた前科がある。

そのトラウマでアリア＋料理＝爆破という刷り込みがされた俺は、せっかく釈放されたかなえさんが女子寮のＶＩＰルームごと爆破されるのではという不安に駆られたのだ。

なお、アリアは去年の一時期オムライスだけは作れるようになってたのだが……その後作り方を忘れたらしく、今は１人じゃ目玉焼きすら作れない貴族丸出しなアリアお嬢様に戻っている。

夕焼けの中、慌てるあまりローソンの角で転倒したり、チャリを降りてからもポストにぶつかったりしつつ……俺は息を切らせて、アリアの部屋に駆けつける。

すると――

「おつかれさま。いらっしゃい、キンジさん」

スリッパをパタパタ鳴らして出迎えてくれたのは、かなえさんだった。

夕方の家に入ると、エプロンをしたキレイな大人の女性が出迎えてくれる姿。

俺はその光景の不思議な懐かしさに、焦りも忘れて――

「あ、ただい……」

なんでか『ただいま』と言いかけてしまって、赤くなって口ごもる。
そんな俺を見て口元に小さく手をあて、クスッと笑ったように見えたかなえさんは……
日本人にしては少し明るくブラウンがかった、ふんわりウェーブする長い髪にバレッタを留めている。料理をしやすいように、後頭部で少しまとめたのだろう。
広いエントランスには西日が差し込み、その髪に天使の輪みたいな艶を与えている。
窓から穏やかに吹き込んだ春風が、少しばかり甘ったるいクチナシみたいな香りを俺に届けてくる。
「……っ……お邪魔します」
熟れた感じの甘い香りにテンパってしまった俺は視線を逸らし、うつむく。
かなえさんは――女神様みたいなイメージの人だ。
身長が165ぐらいありそうな事もあるが、女性として完成してる感が凄い。
そんなに化粧っけはないのに、アリアのママだけあってとにかく美人だし。
「……」
俺が片膝をついて靴を脱ごうとすると、かなえさんの……ふくらはぎの中ごろまである、ゆったりしたクリーム色のスカートが目の前で揺れている。
ロングスカートで脚線は見えないものの、腰の高さから見て、日本人離れした長い脚をしているようだ。そこは短足というか全体が短いアリアに遺伝しなかったんだな。
と、俺が武偵の習慣でかなえさんの身体的特徴――長い脚をチラ見した時、すっ――と、かなえさんがしゃがんだ。
それは俺が屈んだから目線の高さを合わせた思いやりらしかったんだが、
（……っ……！）
いきなり目に飛び込んできた光景に、俺の目が逆に飛び出しそうになる。

ゆったりした長いスカートは安全度が高いと思って、油断してた。
……かなえさんは品良く、キッチリ膝を揃えてしゃがんでくれている。
しかし元々ややX脚気味らしい上、安定性を欠かぬために、膝から下の足を少し広げてしゃがんでくれちゃっているのだ。
一方ロングスカートの前面は膝に持ち上げられるようになり、立てた膝のすぐ下で裾を終えている。
そのせいで、かなえさん本人の視界からは気づく由もないんだろうが――
下腿部は膝を頂点としてスカートをちょっと被せた『A』の字みたいなアーチ状の門を形作っており、その肉体の門の向こうには――スカートの内部、白くむちむちと肉感的な大人のふとももがかなりバッチリと見えてしまっているのだ！　いや、それだけじゃない。むっちり熟したふとももの間。人間の門の奥の奥。奥さんの奥。そこッ……！　うっすらと肌が透けて見える薄布が、ぷっくり見えてるような見えてないようなっ……！
（……ッ……！）
ビビった俺は自分の靴ヒモを思いっきり引っ張り上げてしまい、たたらを踏む。
武偵には後ろ向きに転んで後頭部を打たないようにするクセがあるので、踏ん張って、前に踏み出し――
「つ……！」
「あら。どうしたの？」
受け止めるように両手を突き出して、笑顔で待ち構えていたかなえさんに――
――ぽふん、と、抱き留められた。
「……っ……！」
鏡を見なくても、自分が……アリアばりの急速赤面術をやってるのが、分かる。
や、やわらかい。
胸だけじゃない。俺を抱き留めた腕も。俺が手を突いてしまい、確かな弾力を感じつつ指を埋めさせたふとももも。そして――「まあ」と耳元で放たれた吐息の香りも。
何より、ムードも。何もかもが、柔らかく……いつもトゲトゲと固い、俺という存在を包み込んでくれる力があ

る。それが、接触した瞬間に伝わってきた。
（……母さん……）
本能が。
思いたくなかったそのキーワードを、俺によぎらせた。
俺には――母さんの記憶が、ほとんど無い。
だから昔から女性、特に、年上の女性に対する接し方が分からずにいる。
そしてシナプスの接続が通常の男子とどう異なる配線になってるのか分からないのだが、年上の女性に弱いのだ。
特に、かなえさんみたいな母性溢れるタイプには、とことん。
思い出したくても記憶の絶対量が少なくて思い出せない『母さん』という存在が……
生き返ったかのような気分に、させられる。
「――大丈夫だった？　足もと」
そっと首をかしげて、顔と顔がくっつきそうな距離から心配そうに聞いてくる、かなえさん――
「だ、大丈夫です」
大丈夫じゃないのはそっちの足下だよ、と、焦りながら思う。
かなえさんはそのままずっとでも抱きしめてくれてそうだったが、俺は自らその優しい体から後ろに離れる。
すると、
「キンジさん。私ね、さっき違うなあって思ったの。キンジさんの方が正しかったわ」
肌を隠すような、しかし圧倒的に豊満な胸の形を明瞭に浮かべる薄手のセーターを着たかなえさんは――その胸の上に、手を置く。
これはメーヤやリサも見せた動作だが、胸がメロン・スイカ級のサイズだと『胸に手を当てる』という仕草が『胸に手を置く』ことになるのだ。
「な、何がですか」
壁に手をついて体を伸ばし、少し行儀が悪いが立って靴を脱ぐ事にした俺――の横で、かなえさんはさりげなく自

分のセーターの中の何かを摘まむような手つきをした。どうも今の身体接触で僅(わず)かに肩ヒモ(ストラップ)の位置がズレた下着を、服の上から整えたらしい。

「『いらっしゃい』って言った時、違うなあって思った。キンジさんが『ただいま』って言いかけた時、それが正しい感じがしたわ。だから、ヘンに思うかもしれないけど……かなえさんはまるで少女のように無邪気な笑顔を浮かべて、「おかえりなさい」

と、言ってくれた。

俺が……無意識に、母さんならそう言うだろうなと思っていた言葉を。

「た……ただいま」

改めて、俺もその言葉を返す。そう言われたら、こう返すしかないもんな。

そんな気恥(きは)ずかしいプレイの後、アリアの部屋のリビングに入って――

（なッ……そんな、バカなッ……！）

驚きのあまり俺は足を止め、挙動不審なほど周囲を見回してしまった。

相変わらず広いアリアの部屋に、ありえないモノが出現していたのだ。

まず、買い物用のエコなバスケット。『食事といえば外食かデリバリー』でおなじみのリアル海外セレブことアリアお嬢様が、マイバスケットを保有しただなんて。

バルコニーに現れたプランターには、ハーブが植えられてる。家庭菜園……だと……？

サボテンやプリザーブドフラワーすら枯らした実績のある、あのアリアが……？

さらに査察(ささつ)するとアリアの部屋にはアイロン台やドラム式洗濯機、ミシンなどの配備が次々と確認された。そんなバカな！　いつの間に！　アリアと家事は混ぜたら危険なんだ。アイロンは小火(ボヤ)に、洗濯機は家中が泡風呂に、ミシンではアリアが俺(おれ)のブレザーと自分のセーラー服を縫い合わせ、着たら綱引きみたいになった歴史がある。全部俺の部屋で。

「……アリア、これは……うおぉオオっ!?」

キッチンで包丁を持ってたアリアと対面した俺は、ここ1年間でも指折りのピンチ顔でバックステップしてしまう。

「キンジあんた、真っ青よ？　そのくせそんなに汗かいて。寒いの暑いの、どっちなの」

眉を寄せたエプロン姿のアリアを前に俺が冷や汗を拭う中、

「料理は『習うより慣れよ』よ、アリア」

「はいママ」

おたまと小皿を持ってクリームシチューの味見をするかなえさんとアリアは、楽しげにそんな会話をしている。おかげで料理しながら。

（……な、なるほど……ッ）

これは恐らくリサ・メヌエット間でも見られた女子力の継承システム。

男で言えば父が息子とキャッチボールをしたり、兄が弟にケンカのコツを教えたりして男子力を上げさせるのと同様の行為だ。アリアは白雪やリサには寄りかかるだけだったが、かなえさんが相手だとこうして家事を学んじゃうのか。信じられない事だが、これは現実なのだ。

……腰が抜けた俺は、ヨロヨロと革張りのソファーまで退散する。

にんじんさん♪　じゃがいもさん♪　ふんふふん♪　と、かなえさんの歌＆ハミングに、俺は異世界にでもいるような気分にさせられる。

なにせアリアの部屋に入って5分も経過してるのに銃声が聞こえないんで、逆に不安になるのだ。違和感で腹痛がきた。ストッパ飲も。

俺は塹壕戦の如くソファーやバーカウンターからチラチラとキッチンの状況を窺うが、かなえさんはさすがママ。料理の手際はアリアというスーパー足手まといがいても白雪やリサに匹敵し、何事にも余裕がある感じだ。

唯一、かなえさんが手間取っていたのは、

「えーっと、オーブンにするには……」

口元に指先をあてて見ていた、電子レンジだ。
どうも、機械はニガテらしい。
もちろんアリアは自動温めボタンしか押した事がないので、幼児みたいにママの様子を見上げてるだけの役立たずだ。
なので、そこは俺がキッチンにお邪魔して――こういうのは、記号化されてたりするがレンジの表面に使い方のヒントが描いてあるもので――ピッ、ピッ、ピッ、とオーブン・モードにする。なんだ、簡単にできるじゃん。
すると、かなえさんは手を口にあてて驚き、
「まあ。キンジさん、見ただけで分かっちゃったの？」
「は……はい、なんとなくここに描いてあるんで。何度に設定します？」
「２４０度にできるかしら」
「はい……っと。切る時は、ここの『とりけし』を押せば止まると思います」
「ありがとう。助かっちゃったわ」
俺より5cmだけ背が低い、かなえさんが――グラタンの入ったレンジを一緒に覗き込む仕草で、顔を近づけてきている。
女性の接近にビクつく俺が目を逸らすと、前屈みになったかなえさんのエプロン、その下の薄手のセーターの襟首から真っ白な胸の谷間が見えている。
（ッ……！）
俺は慌ててソッポを向き、それで今度はアリアと目が合い、腰のベレッタに手を伸ばすぐらい身構えたんだが――
俺が白雪や理子の胸をチラ見すると『なに見てたのバカキンジ！』とそれを鋭く見抜くアリアが……「？」と、アホの子みたいな顔でキョトンとしてきた。
どうやらアリアは、まさか自分の母親を俺が女性として見てしまってビクついてるとは思いもよらないみたいだ。
なので、そっちのレーダーをオフにしてるらしい。罪悪感のようなものは感じてしまうが、とにかく助かったぜ。
「ふふっ、さすが男の子ね。おばさん助かっちゃった」

俺の脳内セリフとややハモって微笑んでくるかなえさんも、まさか自分が俺にそういう目で見られているとは気づいてない表情。年の差がありすぎるからだろうな。

「男の子、って歳じゃないですよ。それに、おばさんでもないです」

俺がなんとか平静を装って、実際お姉さんに見えるかなえさんにそう言うと――

「まあ、嬉しいわ。男の子……じゃなくて、1人の立派な男性にそう言ってもらえて」

かなえさんは少し赤らめた頬を隠すように手をあてて、ふざけるように色っぽく身体をくねらせるのだった。

……この辺も、俺と同年代の女子には無い大人の余裕があるよなぁ。

テーブルに並んだクリームシチュー、海老グラタン、ハーブ添えのキッシュは――

良い素材で作られ、栄養バランスの取れたメニューだと男子の目にも分かるものだった。

俺たちにキッシュを切り分けてくれたりする、テーブルマナーが百点満点のかなえさんとは対照的に、アリアは

「それでね、キンジは原潜に拳銃一丁で突っ込んできたり、爆弾を仕掛けられた新幹線の上で銃撃戦したりね、あ、あとヤクザのアジトにね」

食事中の話題選びのマナーがなっちゃいない。美味しいものをいただいてるんだから、俺のトラウマを次々掘り返すのはやめろってばよ。

しかし、かなえさんもさすがアリアのママ。

相模湾上空で俺の乗ってたステルス爆撃機が爆発した話とか、スカイツリーで吸血鬼を撃った弾を俺が掴んでUターンさせた話とか、めちゃくちゃな時系列でアリアが語る俺の武勇伝を「あらあら」と笑顔で聞いてくれちゃってる。

（おっとりした性格、って言えばそうなんだろうけど……）

留置場で面会した時は、時々キリッとしてたのにな。かなえさん。

家庭では、のんびり屋さんだ。とにかく。
アリアは「ねえママ」「それでねママ」と甘え声で積もる話をしている。かなえさんも、それを幸せそうに聞いている。全部全部、受け止めてあげる姿勢だ。
なので母娘の団欒をジャマしないよう、俺は黙って2人を見る。
で、見てると気づかされるんだが、パッと見ではあまり似てないこの親子……肌の白さ、長い睫毛、鼻や口元の形がよく似てる。やっぱり、血のつながりって分かるんだな。
見れば耳の形もよく似てたりで、それが面白かった俺がちょっと苦笑いしてると――
「キンジさん、なあに？」
ジロジロ見られたかなえさんは、髪を整えるような手つきをしつつ、くすぐったそうな苦笑いを返してくる。
「あっ、いえ。すみませんッ。かなえさんとアリアを見てたら、やっぱり親子って似てるんだなぁって思って……」
俺が正直にそこを言うと、
「あまり言われないから嬉しいわ。キンジさんは？　お父さん似？　お母さん似？」
などと、かなえさんは聞いてきた。
「……爺ちゃんとかには、ちょうど半分半分って言われますけど。俺は母さんの顔をよく覚えてないんで……」
これも俺は、かなえさんに聞かれると素直に答えてしまう。
すると、かなえさんはハッと口元に手をあて……
「……ごめんなさいね。気を悪くするような事を聞いてしまって……」
かなり焦った様子で、オロオロと謝ってきた。
リサにも似たようなリアクションをされた事があるが、両親の事は俺にとって昔の事だ。
「あ、いえ。別にいいんです」
とはいえ、家族の話題は――兄、姉、弟、妹、どいつを出してもややこしい話になる。なにせ国籍だけでも日本・エジプト・アメリカの3種類あるし、姉なんか1人なのか2人なのかもよく分からん状態だからな。
なので俺はそれきり黙り、家族トークは発展させたくない空気を軽く流しておいた。

するとそれがミスチョイ。
かなえさんはオニキスみたいに黒目がちな瞳を哀しげに少し潤ませて、『いま傷つけた償いにも、私がこの子のマ
マになってあげなきゃ』的な使命感を得ちゃったような感じになってますよ……イヤな予感がするなぁ。

そんな平和なディナーの後、
「アリア、お風呂に入っちゃいなさい」
「はいママ」
とかいうデンジャラスな会話が聞こえてきたので、
「あ、じゃあ俺、帰ります」
久々にテレビでバラエティー番組でも見ようとしていた俺は、
するとかなえさんは、あれっ？　という顔をして、
「泊まっていってくれるのよ？　私すっかり、そのつもりでいたんだけど……」
と、世話好きな人がそれを中断させられてガッカリしたような表情になった。
この会話が聞こえてたハズなのに平然とバスルームへ行くアリアを横目に、
「泊まる、って……いや、それは……」
アリアにもだがかなえさんにもヒス化の危険性をバリバリに感じてる俺が、どう断るか下手なアドリブを考えてい
ると――
「ふふっ」
ゆるく握った手を口元にあてて、かなえさんが品良く笑った。
「……何ですか？」
「キンジさんって、カワイイわね。予想外の事があると、すっごくカワイイ顔するの」
「えっ、そうなんですか」
「うん。今もしてる」

そんな事を言いながら、薄手のセーターとロングスカートのかなえさんは……きしっ、と、ソファーに腰を下ろしてきた。

アリアの部屋のソファーはスプリングが弱めで、腰を沈めるとそこがけっこうな斜面になる。２人が並んで座ると、お互いの斜面がお互いを引っ張り込もうとするので——腰と腰、肩と肩が自然とくっついていく感じになる。

バスルームから、アリアがシャワーを使い始めた音がする。

リビングには今、俺とかなえさんの２人っきりだ。

「カワイイだなんて。言われたことないですよ」

などと喋るのをカモフラージュにしつつ、失礼にならない程度に体を傾けて避けようと試みる俺。

「男の子はそうかもね。でも、すごくカワイイわ」

また『男の子』扱いするし。と、俺が少し拗ねた顔になると、かなえさんは「あっ」とそれがＮＧワードだった事を思い出して……クスクス笑う。楽しそうだなあ。

「ごめんね、おばさん物覚えが悪くて」

その、人称にも違和感があるので、そこを話題にしつつ俺は引き続き体勢を傾けて避けようと頑張る。

「お、おばさんって感じじゃないですよ。さっきも言ったけど」

「まあ。じゃあおばさんじゃなかったら、何なのかしら」

なんだか、かなえさんに……誘導尋問されてる気分になってきたよ。

「……母さん、みたいだなって……」

かなえさんはアリアのお姉さんみたいな感じなんだが、そう言ってもおべっかみたいでバツが悪い。なので、答えはそれしかなかった。

かなえさんもその回答を期待していたようで、

「……私のこと、お母さんだと思ってくれていいからね」

と、俺の事をそっと抱き寄せる。

それはそれは優しく、包み込むように。

どうやらさっき、俺に両親の事を聞いてしまった罪滅ぼしのつもりらしいな。
母親の記憶が無い哀しい俺を、そうやって慰めてくれているつもりらしい。
そこまでは、いいんだ。俺は傷ついたりはしてないけど、慰められる理由も客観的にはあるのかもしれないんだし。だからこの件は、美しい話としてここで終わってほしい。
（終わってほしいんです、けど……！）
……イケナイ大人のボディーが、この美談に思いっきり水を差すんですよ……！
抱き寄せられている都合上、かなえさんの巨乳は今、俺の顔面の真ん前に来ちゃってる状態だ。セーターのキーホールから覗く、白磁みたいな肌も。さっき避けようと頑張った努力が、これじゃ水の泡だよ。
何より、ソファーが腰と腰の密着を強いるせいで感じられる、このおっきめの下半身の柔らかさ。大人の女の人って、こんなに……柔らかいのか。白雪やリサも柔らかい系だが、同年代の女子とはまた別次元の柔らかさだ。
（……っ……！）
優しくしてあげてるつもりらしいかなえさんに、頭を胸へと抱き寄せられて――
限界まで息をガマンした俺は、結局苦しくなって、むしろ甘い香りを思いっきり鼻から吸い込んでしまう。
うっ……この成人女性特有の、甘ったるい香り……！　それにアリアっぽい、クチナシみたいな甘酸っぱいスメルが混合されてるとか、ひょっとしてこれは女性の香気の究極形なんじゃないだろうか？
コイツは……『ホンモノ』だ。女ざかりなんて言葉もあるが、生物として、動物として、女としての本番のフェロモンを感じさせられる。おっかなびっくりじゃなくて、どんどん子供を産む時期の女体が醸し出す――とんでもなく艶っぽい、色香……！
（いかん、血流が――っ……！）
対するヒステリアモードは、本来子孫を残すために備わっているもの。女性として完成しきっているかなえさんに、男性中枢は間違いなく反応してしまっている。
ここまでは相手がアリア――パートナーのママだという非倫理的なシチュエーションが防波堤となっていたものの、ここで血流が身体の中心・中央へとなだれ込んできた形だ。

って、いやいや、なだれ込んできちゃダメだろ！
いくら美人で若々しいからって、クラスメイトのママにだなんて！
いや、そういうドラマとか、あるにはあるけどさ！　来期のホークス入団が噂されてる偉大なるスラッガー、ロベルト・ペタジーニ選手の奥さんは学友のママだけどさ！　って、そんなデータを思い起こすな俺の脳ッ！
「……あ、あのッ、やっぱり――」
帰ります！　と言うためにかなえさんから体を離すが、
「キンジさん？　どうしたの、汗が……」
かなえさんもかなえさんで、まさか娘のクラスメイトが自分を1人の女として見ているとは引き続き考えていない。さっきの宣言通り、我が子のように優しく接してくれている。
さっきのアリア家事シチュに続き、また別の汗をダラダラかいてた俺の額を――
かなえさんはテーブルから取ったティッシュで、ポンポン、と拭いてくれる。
その動きに、ぷるんぷるん、と……セーターをパツンパツンに内側から押し広げている巨大な胸が連動して震えている。爆乳というのがふさわしいその双丘は胴体の左右に弧を思いっきりハミ出させており、頻繁に腕とぶつかってさらに躍動させられている。
「あ、あの、俺つ……もう……！」
――帰ります！
と言いかけて、俺は――ソファーから後ずさる動きで、ずるっ！　と、床へ落っこちた。
尻もちをつく形にはなったんだが、下には起毛のカーペットが広がっている。フトンに落ちたような、柔らかい感触だ。
だが、問題はかなえさんが――
「あっ……きゃっ！」
俺の額を拭こうとしていた手が空振って、前につんのめってきた事だ。
避けるワケにもいかず、俺は彼女の全てを受け止める形で……

自分の体をクッションにする感じで、下敷きになった。
「……っ……！」
「あんっ……！」
かなえさんの全身に潰されるというか、包まれるような――失神してしまいそうなほど柔らかくて、いいニオイがして――
なんとマジで、俺は一瞬気を失ってしまった。
戦闘行為じゃ砲弾が掠めても気絶しなかった俺が、大人の女性との身体接触1発で。
「……キンジさん？　キンジさんっ」
とはいえ数秒で意識は戻り、血相を変えたかなえさんが見えてきた。
「あっ……す、スミマセンっ。かなえさん、ケガとかしなかったですか」
「うん。キンジさんのおかげで……キンジさんも無事で、よかった……」
これしきの事で、ちょっと涙ぐんでるかなえさんは――
凛々しかったり色っぽかったりするくせに、こういうまるで少女みたいな一面もある。
今つんのめった動きから、運動神経はやや悪い事も分かった。俺がテンパってた理由に勘付かないあたり、ちょっとドジなところもある人なんだろう。
それでも……かなえさんは、一生懸命お母さんをやろうとしているんだ。
それが、伝わってきた。
あと――こっちも、今の失神は良かったよ。おかげで、血の気が引いてる。ヒステリア性の血が一周して一段落ついた感じだ。ヒステリア・ワイズマンに近いものがあるな。
「もう、ママったら」
気づけば、お風呂上がりのアリアがバスタオルいっちょで瓶のミルクを手に現れており――今の一部始終を見ていた感じで、クスクス笑っている。
アリアに……血流とかそういうのを気づかれてなくて良かった。これがバレてたら、今ごろ風穴竜巻地獄だった

ぞ。

正直、撃たれるまでもなく心底土下座したい気分なんだが、そうされてもアリアは何に謝られてるのか分からんだろうし……どうすりゃいいんだよ、俺、これから今夜……！

去年こんな事もあろうかと風魔に預けていた宿泊袋――スーパーのビニール袋に着替え一式を詰めたものだ――を極秘で配達させ、とりあえず泊まる準備はできた。

（ソファーで寝るとしても、2度もダラダラかいた汗を流さないと寝苦しいだろうな）

なので俺は、アリアが入ったばっかりのバスルームに息を止めて入り……そのあまりの広さに「ケッ、このブルジョワめ」とつい独り言が出ちゃって、クチナシっぽいスメルを吸い込んでしまい、むせる。

神崎家は欧米流で、男女がバスルームに入る順番は特に気にしない。体の空いた人から順にどうぞって感じだ。なので、アリアの後に俺が入ったんだが……これ、かなえさんの後だったら本人がいなくてもニオイだけでヒスってたかもしれんな。

ここは従来、女子しか入った事のないバスルーム。つまりある種の女子風呂だ。ニオイ問題があろうとなかろうとそんな魔窟に長居したくなかった俺は久々の高速洗体術。烏の行水で上がった。

となると次は、かなえさんが入るワケで――

考えるだけでヒスりかねんその姿を想像しないようにと、俺はゲームによる現実逃避を試みようとする。この部屋には理子がWiiごと置いていったマリオカートがあるからな。

冷蔵庫から炭酸水の小瓶を1本もらい、パジャマに着替えた俺は……コントローラーを手に、ワンピースみたいなネグリジェ姿でBBCニュースを見てたアリアを誘いに向かう。

アリアはお堅いニュースを見ていてゲームなんかやる気分じゃなさそうだったが、

「おいアリア、マリカーやるぞ」

「なんでよ」

「負けるのが怖いか」

「は？」

で、コントローラーを手に取るから楽なもんだ。

そうして対戦相手を得た俺はレースゲームをやるんだが、

（ほんと、年上はヒスに毒だぜ……ていうか俺、こんなに女の人を意識した事なかったよな……）

バスルームの水音が気になって、ゲームに集中できない。

アリアはタイムより俺のカートへの攻撃を優先してくるので、腹が立った俺もアリアに赤甲羅やトゲゾー甲羅で反撃。なんだかレースじゃなくて違うゲームになってきたところで……俺は、

「夜更かしはダメよ？　はい2人とも、ねんねねんね」

かなえさんの声に振り返って、ちょうど飲んでたペリエを噴出しそうになり――堪えてグッと口腔からノドへ押し込んだ。が、気管や咽頭を炭酸に苛められ、結局むせる。

というのも、かなえさんがそのグラマラスなボディーに――アリア同様、ネグリジェなる夜着を着用していたからだ！

「……っ……！」

危機を予測できたハズなのに対処せず、現実逃避に向かった20分前の自分が恨めしい。

（バスタオル一丁ぐらいまでは覚悟してたが、そうきたかっ……！）

アリアのネグリジェ姿は見慣れてたから、「これは子供がつんつるてんのワンピースを着てるみたいなもの」という変換が俺の脳内では可能になっていた。

――それが故に、油断があった。

超ミニスカートのワンピースみたいなかなえさんの白ネグリジェは、超能力が無くても内部が透視できちゃうような化繊製。

お牛さん顔負けのラージな胸を下半分しか隠さないハーフカップ下着や、肌が薄っすら見えちゃいそうなレース地のショーツが――見えてるような見えてないような、だ……！

俺がテンパって硬直してると、かなえさんは何がイケナイのか分からないお顔。

「……？」

いや、「……？」じゃないでしょうかなえさん！

かなえさんにそのつもりは無いんだろうけど、そのネグリジェの透け感や下着の形状は確実に男の目を意識した製品なんですよっ……！

という俺の心の声が態度から通じたか、

「あらやだ、私ったらうっかり……」

かなえさんはまだまだ若々しいハリのある、ムチムチと白く輝く太股を甘く隠すような仕草をして――クルリ、と、回れ右した。それはそれで逆さまにしたハートマークっぽいオシリの形がハッキリ分かっちゃって血流に宜しくなかったんだが、

「娘の部屋だからって、ちょっとリラックスしすぎちゃったわ。こんな見苦しい姿を見せちゃって……ごめんなさいね」

あせあせ、と、リモコンを持ってきて――

リビングの明かりを青白い昼光色からオレンジっぽい電球色に変え、薄暗くも暖かみのある光量に落としてくれるのだった。

お、おかげで確かに透け感は和らぎましたがッ。その胸、腰のくびれ、お尻に続く円熟したボディーラインを見せつけられてる事に変わりはありませんから！

……俺の不運のすさまじいところは、俺と女性とベッドが揃うと必ずといっていいほど一緒に寝なきゃいけない流れになることだよな。

と、嘆息してる場合じゃない。

アリアの部屋は1部屋なのに2階層あり、10階が普段の生活空間・11階のペントハウス部分がベッドルームという構造になっている。

で、かなえさんとアリアが連れ立ってそこに上がっていったので「お幸せにー」などと何だか分からん挨拶をして見送り、ソファーで安堵の息をついていると、

「キンジ、あんたもママのおとぎ話を聞いていきなさいよ。幸せいっぱいな気分で眠れるわよ」

階段から、アリア様が余計なご提案。

そんなの、実の母娘だけで幸せいっぱいになって下さいよ……！

こっちは血流がいっぱいいっぱいなんだよ！

「いや、その……えーと……あ、あれ？　膝の内側がシクシク痛むぞ？　こいつは階段を上がる事が不可能そうな痛みだ。いやはや残念だが、俺はこのソファーで寝るしかないみたい」

「あんた、あたしのママが嫌いなの？　さっきから態度がヘンよ」

……ぎくぅ……！　ガバメント出現注意報だぞ、これは……

なので俺は「ひ、膝、治りました」と震え声で言い――死刑台に上がるような気分で、ベッドルームへの階段を上がっていくのだった。

ていうかまだ9時過ぎなのに、もう寝るのか。

星伽家ほどじゃないが、早寝だな神崎家も。

カーペットだった床をフローリングに改装したらしい11階は、歩くとウグイス張り的にキシキシ鳴る。

そもそもなぜ寝室ごときにこんな広さが必要なのか分からん。奥に5人でも寝れそうなキングサイズのベッドがある以外、何もないムダな空間じゃねーか。

6畳間に4人寝てる男子寮の寝室とは、えらい違いだぜ。起きて半畳、寝て一畳。人間、生活するのに空間なんかそれほど要らないんだぞ？

などと心の中でブツクサ言いつつ、かなえさんがベッドサイドのスイッチを操作したか寝室の明かりが落とされてビクッとしたりしつつ――

神崎母娘が横になってるベッドサイドに俺が辿り着くと、アリアは……

さっきあんだけ俺を脅してたくせに、かなえさんの隣で胎児みたいに手足を丸め、すー、すー……と、もう寝ちゃっていた。

……よっぽど……

安心、したんだろうな。

ずっとずっと会いたかったママに会えて、一緒に寝られて。

「キンジさん」

ぼんやりとした橙色の常夜灯の中、仰向けに横になってたかなえさんはそんなアリアに微苦笑しつつ――俺の方に視線を寄越した。

そして人差し指を口元に寄せて、『この子が寝ちゃったところだから、お静かにね』のジェスチャー。

そして、ぽんぽん。

俺が寝るべき場所を示すように、自分の右側のベッドを軽く叩いている。
アリア・かなえさん・俺が川の字になって寝るフォーメーションだ。
ていうか、そ、そんな至近距離で寝れないってば。
（一体なぜ……どうしてこうなった……ッ……！）
今のかなえさんの、俺も当然ここで寝るものと思っている手つきのベッドぽんぽんから感じ取れたんだが……
かなえさんは、さっきの『キンジさんも我が子として扱う』宣言からも分かる通り俺を実年齢より子供だと思ってるフシがある。
アリアが子供っぽいままだから、そのアリアの同級生も子供だという感覚があるのかもしれない。
そのお子様を1人で、ソファーなんかで寝させるのはかわいそうだと思ってるのだろう。
「……っ……」
神崎母娘が横たわる、アリアのベッドを見下ろし……
ゴクリ……と、俺のノドが鳴ってしまう。
ヒステリアモードという持病を持つ俺は、火薬の臭い以上に女性の香りに危険を感じる体質。
そしてベッドとは、女のニオイをたんまり溜め込む蜜壺のようなもの。
そこに女本体が、しかも2人も横たわってるのだから……
嗅覚に優れる俺はベッドサイドに立っただけで分かるが、これは10年に1度の超絶いいニオイ。過去10年で最高と謳われたジャンヌのベッドを上回る上質なニオイだ。
アリアの甘酸っぱい香りとかなえさんの色っぽい香りが組み合わさった、酸味と糖度のバランスが取れたフルーティーな仕上がり。近年にない出来映えだ、このベッドは。
（――って、ソムリエみたいなこと考えてる場合かよ俺！）
これから、ここで寝なきゃいけないんだぞッ!?
ていうか、そもそもこのベッドルームへ来るよう強要してきたのはアリア。で、その際言ってたおとぎ話がされたのかされてないのか分からん内からアリアは寝ちゃってる。

なので俺は下で寝ても撃たれないんだろうが、それはそれで撃たれる処刑タイミングが明朝に延期されるだけだろう。

となるとここは――行くも地獄、戻るも地獄。

どうせ同じなら、かなえさんの親切心を傷つけないためにも行って果てよう。死ぬ時は前向きに倒れて死ね、と、坂本龍馬も言ってたとかいうじゃないか。

そう俺が腹を括ったところで、かなえさんが……

「おいで」

小声で言い優しく手招きしてくるので、俺はベッドに上がり……うっ、やっぱりスゴイな、この女空間。極東戦役で眷属のアジトに囚われた時以上の圧倒的アウェー感がするぜ。

しかし、その女2対男1の数的不利感も有利に働き――なんとかヒスらずに、ベッドに横になるところまでは達成できた。

かなえさんに失礼にならないよう仰向けに寝て、匂いを鼻腔に入れないため呼吸は口で行う。目を閉じれば、まぶたの裏では映画『Matrix』のオープニング映像みたいに素数がダーッと流れて現実逃避を促す。よし。これにて嗅覚・視覚共に万全の防御を固めたぞ。

「……キンジさん。お腹冷やしちゃうよ……？」

聴覚が、あったか……！

甘い甘いかなえさんの声が、耳元で囁かれ――つい目を開けちゃって、俺の体に上体を半分覆い被らせるようにして毛布を掛けてくれているかなえさんのッ！　推定99㎝のッ、バスッ、バスバス、バストが目の前にッ、ブランブランと……鼻を掠めるような位置に！

「お、お、俺――！」

俺は大丈夫だから！　と言おうとした俺は、もちろん声を出すためには息を吸わなきゃいけないわけで。甘ったるいミルクみたいな、というかそこはミルクのタンクなんだから当たり前といえば当たり前の――誰もが甘えたくなっちゃう母性的な芳香を、吸い込んでしまっている。慌てたせいで、鼻腔どころか肺腑の底まで。

「……ッ……！　……ッ！」

斯くして嗅覚・視覚の砦はあっけなく陥落。弱すぎんだろ俺の防衛力！

だが押されたら押し返せの精神で、俺は再び目を閉じ息を止める。

そして、アリアの体のクチナシっぽい香りが染みついている毛布を払いのけにかかった。俺は何のニオイに弱いって、アリアのニオイに弱いんだ。こんなものをいただいた日には、ヒス化間違いなしだからな――！

だが、俺は今かなえさんの胸を見ないようにと目を閉じている。そのせいで手が空振るリスクも考慮して、命中率を上げるため左右の手で同時に毛布を払いにかかった。

その、手が。

かなえさんがちょっと身を引いた事もあり、空振った。不幸にも、右も左も。

「――！」

その際、俺の手は――かなえさんの、ネグリジェ――伸縮性の高い、白くて薄い夜着の胸元に引っかかってしまったのだ。

ぐいっ、とそれを開いて強引に脱がそうとするかのように。右手も、左手も。

ゆったりしたゴム製の肩ヒモは、ハラリハラリとあっけなく左右に外れてしまい。

砲弾みたいな巨乳が、上半分――とはいえド迫力のボリューム感で、露出してしまう。

右も、左も。

「……っ……っ……！」

目を開ければ、俺は上半身を俺に覆い被らせかけているかなえさんの――ネグリジェを、彼女の下からひん剥こうとしている形だ。

この緊急事態に俺は、絶句してしまう。

その無言が良くなかった。かなえさんは自分の薄い夜着を無言で脱がしにかかってきた（ように見える）俺に対し、

「……えっ……!?」

俺的にもまさかの展開なんだが、かなえさん側から見ても別の意味でまさかの展開に、ビックリして長い睫毛の目を見開いた。そして、

「だ……ダメよキンジさんっ。だめっ……！」

ぺらりと落ちかけたネグリジェの胸元を片腕で隠すように押さえた。

落ち着かせるように、俺の手を握って制止しながら。

そして上体を起こし、俺に背を向けて……ほとんど脱げかけていたネグリジェの上を、整えた。緩くウェーブのかかった長いブラウンの髪も、ふわっ、と整える。

最後に、胸を腕でガードしながら……

苦笑いで、振り返ってくる。

「も、もう。ビックリしたなあ。こんなおばさんに、そんな……若い男の子ったら、元気なんだから」

「い、いいえ……ッ……！」

違うんです！

と言いかけたが、そこを思いっきり否定するのもかなえさんに失礼な気がして――俺は、赤くなって言いよどむ。

で、この言いよどみが……

またかなえさんの誤解に拍車を掛けたっぽい。『拒まれた少年のピュアな心が傷ついているだろうから、励まさなきゃ』的に健気な笑顔を向けてくれちゃってるよ。

「でも、おかげで……私も、まだ、花ぐらい咲かせられるかも……？　なんて、ちょっと自信を取り戻しちゃったわ。ありがとうね、キンジさん」

などと冗談めかしたムードではあるものの、かなえさんは嬉しかった的な発言。

ど、どういうことだ。何が嬉しいんだ、少年にベッドで服を脱がされかけて。

女性ってものは――難解だぜ。永遠の謎、神秘だ。いくつになっても。

悶々として、睡もできなかった翌朝7時、鏡に映る自分の目の隈がパンダみたいだとか思いつつハミガキしていた

ら、
「お弁当持った？　ハンカチ持った？　忘れ物はない？」
「持ったってば、無いってば」
俺より先に起きてたかなえさん&アリアの会話が、玄関の方から聞こえてきた。
そういや昨日マリカーをやりながら聞いたが、今日アリアは間宮あかりたちと女子会でピクニックらしい。と言っても、行き先は台場公園だからすぐそこなんだけど。
（……って、もう出るんかい！　俺とかなえさんを置いてッ！）
慌てて洗面所から廊下に出て玄関側を見れば、赤いチェックのジャンパースカート姿でリュックを背負ったアリアは既にお出かけ準備完了って感じだ。
「もうママったら、心配しないで！　後輩には『時間厳守』って厳しく言ってるあたしが遅刻したら、恥ずかしいの！」
「ほら、リボンが曲がっているわよアリア。人生は、ゆっくりと歩みなさい」
セカセカしてるアリアと、おっとりしてるかなえさんが少し揉み合うようになり――
――くいッ、とたんっ！
「みきゃっ！」
「早く走る子は、転ぶものよ」
……!?
す、すげえ。
あり得ないものを見た。
かなえさんがアリアの手首を軽く極め、合気道の四方投げ気味に……アリアをその場で、ひっくり返したのだ。
背中からエントランスに落っこちたアリアのスカートが跳ね上がったので、目は逸らしたが……今のは多分、バリツの技だ。バリツならアリアも使い手だが、かなえさんはそのアリアを軽く倒せるぐらいの達人って事か。
凄いぞ。荒ぶるアリアを止める事ができる人物は、こんな所にいたのか。

頬袋にエサを詰めまくったシマリスみたいに膨れたアリアのおでこを、

「めっ、ですよ。アリア」

かなえさんは指でちょっと押して、優しく叱ってあげてる。

アリアもママには敵わないのが分かってるのか、不承不承だが従ってる感じだ。

なんか、カナと俺の関係みたいだな。

で、気を取り直したアリアが「行ってきますー！」と出ていって――

くる、と振り返ったかなえさんは今の光景に驚いていた俺と目が合うと、

「あら、あらあら。いやだわ。見てたのキンジさん？」

自分がアリアを躾けてたのを見られて、赤くなって苦笑い。

両手をほっぺにあてて、ロングスカートの中の両膝をきゅっとくっつけて恥ずかしがってる。

その仕草がまた、お育ちのよろしいお嬢様をそのまま大人にしたような……なぜこんな可愛らしい人からあんな凶暴なのが産まれたのか、ＤＮＡのミステリーに首を傾げざるを得ない萌え動作だった。いや、首なんか傾げてる場合じゃないんだけどね俺。

6弾　あの娘に薔薇石英の約束を

かなえさんと2人っきりになってしまった俺はビクビクしながら着替え、かなえさんも何やらソワソワしてたんだが――

ここで神のファインプレー。

かなえさんに急に電話が掛かってきて、女子大時代の友人たちが開いてくれる祝賀会に行くとの事だ。

一方の俺は俺で、理子からメールが来た。絵文字に顔文字にギャル文字で暗号文じみたメールだったんだが、『台場においでよ』的な文章だと一応解読できた。

つまり2人とも、近々に予定が出来てしまったので……妙な流れになる事もなく自然と2人で外出して、女子寮の前で別れて自然にバイバイできたのであった。ふぅ……

しかしこの、不自然なまでの偶然による引き離されっぷり。『ひょっとすると』レベルではあるが思い当たるフシがあるぞ。ニューヨークで光屈折迷彩のコートを着て不幸にも女子の着替え会を覗いてしまった時、ロカに掛けられた術。運命去勢刑、だったっけ？　女とイチャつく機会が1回減るとかいう呪いが、今さら発動したのかもだ。

正直これは俺にとって幸運なんで、もっとロカに掛けてもらいたいところだね。

理子からのメールは意味不明なノイズが多いのでそこを取り除いて読むのがコツなんだが、いくら読んでも今回のは『台場においでよ』の情報しか読み取れなかった。

台場には個人的な用事もあったので、女子寮を後にした俺はモノレールに乗り……台場駅から道路沿いに、アクアシティの奥、メディアージュの方へと歩いていく。

この道はバスジャックの時にヘリで上空を通過したトラウマ道路だったんだが、最近は時が解決してくれて俺も普通に歩けるようになっている。

そこを行く途中、フジテレビの前で――

「あ、遠山先輩」

後輩の、火野ライカに出くわした。
女子にしては背の高い火野は、それもそのはず金髪・碧眼の日米ハーフだ。本人は公言してないが、コイツの父親はヒノ・バットというアメリカじゃ有名な武偵で――こいつも強襲科1年じゃかなりデキる女だから、蘭豹のお気に入りなんだよな。
「おう火野。俺、こないだニューヨークでヒノ・バットに会ったぞ」
武偵手帳を取り出してサインを見せると、火野は目を丸くして、
「パパは元気でしたか」
「お前は会ってないのか」
「……」

「覆面をしてたから顔色までは分からなかったけどな、声は元気だったよ」
「そうですか」
そんな短い会話をしたら、もう話題に詰まってしまった。
俺も女嫌いで通ってるが、火野の男嫌いも有名だからな。
……ていうか、あまり会えてないんだな。火野は、オヤジさんに。
ヒノ・バットのプライベートな話とかを聞いてみたくはあったんだが、ヘンにその辺に触れたらイヤな思いをさせちまうかもな。
やめとこう。
「……じゃあな」
火野は火野でスラッとしたモデル体形で、胸もある。無愛想な女とはいえ、できるだけ近くにいない方がヒス的に無難だろう。
と、俺が先を急ごうとすると――
「あ、先輩」
「何だ」
「さっき、自由の女神の辺りで峰先輩とも擦れ違ったんですけど。遠山先輩に会うって、おめかししてましたよ」
「あっそう」
「あっそう、って……デートとかじゃないんですか？」
「呼び出されただけだ。そもそも俺と理子はそういう関係じゃない。誤解するな」
「そうですか。でも、電話してあげて下さいね」
「ああ」
電話？　誰がするかっての。おめかしした理子なんか、歩くヒス爆弾じゃねーか。
あんな可愛い女子に、誰が好き好んで会うかっての。むしろ携帯切っとこうっと。
だが火野、今の情報はナイスだったぞ。理子は自由の女神辺りにいる。つまり海浜公園側に出なければ、ハチ遭わ

せする可能性は減らせるってワケだ。
俺が台場に来たのはたまたま用事があったのと、メー
お～！」とか文句を言われた時に「俺は台場に行った」
と、俺は台場交差点――
マックとかマツキヨのある角から、回り込むような感じでメディアージュに入る。
新入学セールをやってる館内は、桜色。あちこちで新生活を祝う飾り付けがされてて、別にそういうんじゃない俺
的には多少のアウェー感がある。
来てる客も、春休みシーズンで浮かれてる学生や家族連れが多い。
何が楽しいのか知らんが、ワイワイうるせーこった。
「……」
ハンド・ポケットでそいつらの間を縫うように歩き、俺はメディアージュの端っこ……あまり儲かってなさそうな
ハンコ屋に着いた。
よし。ここも5%引きセールをやってるぞ。
だが店番してる店員が、メガネの可愛いお姉さんだ。イヤだなあ。いつもいる爺さんが良かったのに。
「あのー……個人印を作りたいんですが……」
店員さんが女性だと、どうも声が細くなってしまう俺だが――
実は、俺の印鑑は1年の頃に落っことしてフチが欠けてしまっている。俺は金欠のため実印と銀行印を兼用して
て、銀行に電話したら少し欠けたぐらいなら使い続けてもいいよとの事だった。なのでそのまま平然と使ってたんだ
が、こないだ白雪に印鑑が欠けてるとそこから金運が逃げていくとか言われたんだよね。
そういうオカルトは妖怪や鬼やUFOの実物を見ようと断じて信じない俺だが、確かに金運は悪い自覚がある。そ
れはこの印鑑のせいだったのかもしれん。なもんでここは割引セールに乗じ、奮発してハンコを新調しようと思い立
ったワケなのだ。
そんな俺におかっぱ頭でくるっと振り返ったお姉さんは、

「はい！　いらっしゃいませ！」
うわ、明るい。中途半端にカワイイし。身近な感じがして、ニガテなタイプだ。
「最近は印鑑の素材も色々とございまして――木材ですと柘、白檀や黒檀、カエデなどがございます。動物の角や牙ですと、水牛、象牙、そしてなんと！　マンモスの牙もあるんですよ。これらの素材によって、お値段も変わりますので……お客様、素材を決める前にご予算をお伺いしてもよろしいでしょうか？」
おっ。初っぱなから来たぞ、この質問。
本音を言えば安けりゃ安い方がいいんだが、前のは安かったから欠けちゃったんだしな。
かといって高い印鑑の値段なんか、天井知らずだ。なので、
「えーっと……安すぎず、高すぎずで……あと、ここだけの話ですが……俺は女難の相があるようなので、できればそこが何とかなる感じで……あっても金運もなくて……」
我ながらとりとめのない要望を、ゴニョゴニョ言う。
するとお姉さんは目をキラキラさせて、
「分かりました。それでは鉱物がよろしいでしょう。耐久性ではチタンがおすすめですが、ラピスラズリ、琥珀といった天然石の方が運気が上がると言われています。若いお客様に人気なのは、こちらの――」
ペラペラ喋る。
この人、仕事が好きなんだな。
あと半ば、占い師みたいな感じだ。運がどうのこうのって注文は地雷だったかもな。
「素材によっては、彫れる書体も若干限られます。印相の吉凶は各種流派によって変わるのですが――」
お姉さんは楽しげに書体とか印相の説明をしてくるんだが、非科学的な話に興味のない俺にはイマイチ話を聞くモチベーションが湧かない内容だ。
なので、聞いてるような顔をして聞き流していると……ヒマになってきて……
ハンコのサンプルを手にエキサイト気味で身を乗り出してきたお姉さんの、白ブラウスが……なんか、透けてる事に気づいてしまう。

夢中になってるせいでお姉さんは襟首にも隙があり、パステルピンクの下着が――

「ピンクはお好きですか？」

「えっ、あエっ？」

つい本能的に見てしまっていたのがバレたかと思ってテンパり、なんかヘンな声が出てしまった俺に、

「お嫌いでなければ、女難の運勢に強いローズクォーツの素材でいかがでしょう。脆いと言われる事もありますが、近年そこは特殊なオイルで補強が可能でして、そのオイルにもアロマの――」

「ああもうじゃあそれで……お任せしますっ」

かなえさんの件があってから、年上の女性を妙に意識してしまうのが歯がゆくて――

俺はサンプルを見る事もなく、注文だけして席を立つのだった。

アクアフードコートで焼きそば食ってハンコ屋に戻ったら、キラキラしたピンク水晶の『遠山』印が完成していた。

ナニコレ……女子力、高すぎだろ……印の上下が分かる指型もハートマークだし。

だがお姉さん曰く、このハンコは縁結びや異性関連の厄払いの効能がハンパない縁起物。縁結びは要らん機能だが、女難の相を破壊できるアイテムなら心強い。お値段も想定よりずっと安く上がったし、試しに突いてみた『遠山』の字体も気に入ったね。よし、今後はこれを実印・兼・銀行印にしていこう。

ローズクォーツは本来は女性向けの素材とあって、ニュー印鑑はこれまた女子力の高いピンクの小袋に包まれていた。

俺はそいつをポケットに無造作に突っ込み、店を後にする。

（さて、と……たまの休日だから、少しブラブラしていきたい気もするな）

とはいえメディアージュもアクアシティも楽しそうな人が多くて、なんだか居づらい。

1人で映画でも見ようかなとも思ったが、公開中のタイトルには魅力的な物が無かった。

それに、外は春風そよぐ晴天だ。

こんな日に屋内ってのは、もったいないよな。
だが外に出ると理子に出くわすリスクがあるので、俺は――
今のハンコに関連して思い立った理子対策アイテムを、アクアシティで購入しておいた。
それこそハンコぐらいのサイズの細い試験管みたいな小瓶に、色ガラス、星砂、砂金が詰められた物だ。
正式な商品名は知らんが、名付けてキラキラ棒。
これは昔から判明してる事だが、理子は貴金属や宝石といった光り物が好物。キラキラカードが大好きな小学生と同じレベルのアレなんだろうが、それっぽく光るものを見るとガラス片だろうが鯖だろうが一瞬そっちに気を取られる習性がある。
なので理子が出没したら、チャンスを見てこのキラキラ棒を渡す。
ちょうど明日……3月31日は理子の誕生日なので、誕プレとか言えばホイホイ受け取るだろう。すぐ中身がバレないように、これまたピンク色の小袋に入れてあるしな。
で、理子がこれを取り出して「おー！」ってなってぴょんぴょんしてる隙に俺はドロン。
いつもみたいに鬱陶しく付きまとわれる事にはならない、って寸法さ。
（我ながら完璧な計画だ……汝、戦に備えよ……）
9㎜弾の箱に書かれてるその戒め通り、理子への備えをした俺は――
デックスの下のサンクスで高千穂牧場のカフェオレを買って、堂々と屋外に出る。
そして春風の中、海上バス待合所の隣……碇のオブジェの隣にあるベンチに、気分良く座った。そしてレインボーブリッジを眺めながら、まだ冷たいカフェオレを新鮮な空気と共に味わう。
味わって、いると――
「バァ」
視界にいきなり、理子が！　しかもアカンベーしながらの変顔で現れたっ。
ぶほっ！　と、コーヒー牛乳を吹いてしまった俺に対し、理子は理子で液体をかわすという華麗な身のこなし。全身フリフリの改造制服を金魚みたいにヒラつかせて、ぶりっこポーズを決め――きらりんっ。

「やっほーキーくん！」
と、ウインクしてきた。
「ンだよ理子お前！　これけっこう高いんだぞ！」
と、30円分ぐらいの容積を吹いてしまった俺はマジ切れするが……
理子はニッコニコしながら、
「はい、じゃあお詫びにこれあげる。理子の手作りさんですよー」
これまたフチがフリルだらけのハンカチを包みにした、ちっちゃなお弁当バスケットを渡してきた。
開けてみると、中にはクリームやチョコチップでデコられたミニパンケーキが。女子なら「きゃーカワイイー！」とか歓声を上げるタイプのおやつだが、男子が食ってたら正気を疑われるような少女趣味スイーツだぞ？　なので、
「……お前なあ。いや、食うけど。こういうの、男子に作るなよ？」
俺がクレーム気味にそう言うと、理子は――キョトン、とした。
長いまつ毛をした、ぱっちり二重まぶたのお目々を一層ぱっちりさせて。
何そのリアクション。
「う、うん。らじゃー！　キー君以外の男子になんか作らないよ。考えたこともなかったけど、ビックリしたなぁ」
「何に」
「キーくんにも独占欲ってあったんだなぁって」
「は？」
相変わらずワケが分からんなぁ、理子は。
だがまあ、このパンケーキはコーヒー牛乳のオトモに悪くないかもだ。
見た目はともかく、サイズ的にはタマゴ大でちょうどいいし。
「どこから尾けてきてた」
「サンクスから。きっとコンビニ来るだろうなーって思ってて、張ってたの」

「尾行の腕上げたな。気づかなかったぞ」
と、俺はベンチに座ったまま……
隣に理子が思いっきりベッタリくっついて座ってくるのは、もう放っておく。
「おいし？」
「ああ」
これはお世辞ではなく、理子の作ったパンケーキは見た目重視と見せかけて案外美味い。
理子はアリア級の生活破綻者かと思ってたが、意外と家庭的なところもあるのかな。
（バニラ味だな、これ……）
食べながら改めて理子を見ると、さっき火野ライカが言ってた通り……どこがどうとは言えないんだが、おめかしてる感がある。
ただでさえ美少女の理子が一層キラキラ煌めいて見えちゃって、気まずいぜ。
女の化粧ってのは手品みたいなもんで、男にはどこをどうしてるのか見破れない物だ。
リップだかグロスだかを塗ってて唇がぷるぷる潤んでるのだけは分かったんだが、なんとなくそれは『敢えて』っぽい。
つまり理子は俺に唇に注目して欲しいみたいなんだが、なぜだろうね？　解読不能だ。
「そういや、さっき……お前の去年の戦妹の今の戦姉の……強襲科の、火野に会ったぞ。なんか俺とお前について関係を疑ってるみたいだった。その辺、ちょっと誤解を解けたかどうか分からん。迷惑かけてるとしたら、すまん」
ケーキをパクパク食べながら俺が言うと、理子は、ふるふるふる。
ツーサイドアップのテールを揺らし、首を横に振った。そしてクスッと笑い、
「いーのいーの。迷惑だなんて理子ちっとも思ってないよ。むしろこういう事は、周囲のお濠をコツコツ埋めて公認にしてかなきゃだからね」
力こぶを作るジェスチャーで、またもワケの分からんセリフ。

……でもまあ、特に問題は無いみたいだからいいか。
脳ミソ自由形な理子さんの思考なんか、深く考えるだけ時間のムダだしな。
「ごちそうさま」
俺がバスケットを返すと、理子はそれをサッとポシェットにしまい――
笑顔で、片手を差し出してきた。お金ちょうだい、って事かな？
「金は無いぞ」
「そうじゃなくて。お手」
犬ゴッコ？　唐突だな。
だが、今のパンケーキ……俺が被ったコーヒー牛乳の損害よりは、材料費だけでも高額だったろう。理子に金銭で貸しを作っておくのもリスキーなので、俺は右手の指を先だけみんな曲げて……
「ほれ」
ぽん、と、理子の手のひらに乗せた。
拳銃をバスバス撃つくせに、理子の手はちっちゃくて、柔らかくて、温かくて……
その感覚に気を取られた、一瞬の隙で。
ぱく。
と、理子の手が俺の手を掴んできた。
そして、あれよあれよという間に――指と指を絡める、恋人つなぎにされてしまった。
「よーしキーくん！　じゃあデートしよ！」
元気よくスカートを跳ねさせて立った理子に、手を引っ張り――俺も、立たせられる。
「デ、デート？」
理子はふわりと髪を風になびかせて、戸惑う俺を引っ張って少し歩き……
「男女が2人で歩いてて、デートって定義したら、もうそれはデートなの。だからもう、始まってるの」
少女マンガみたいな事、言いやがるし。

だが理子は本当に心の底から楽しそうにしてるのと、こっちには例の理子退散グッズ・キラキラ棒がある。イザ本気で鬱陶しくなってきたら、あれで追い払えばいい。

俺も腹ごなしに散歩したくなったところだし、じゃあ少し付き合ってやるか。

と、俺がついて歩く動きをしたら――

理子はそれをデートに同意した意思表示と見做したらしく、ぎゅ。

勝手に、腕組みしてきた。手は恋人繋ぎのままで。

腕と腕、手と手が、縄みたいに絡み合っちまってる。

（……）

これ、振り払ってもどうせまた組んでくるんだろ？

じゃあもういいや。このまま歩こう。

「えっへへー、えへへー。キーくん、キーくん。楽しいね」

「……お前、落ち着きないなぁ」

「落ち着いてなんていられないよ。そんなのムリだよー」

俺と2人でお台場海浜公園を歩き始めた理子は、ぴょんぴょん。月面を跳ねるように、軽やかなスキップだ。

いつの間にか、両腕でブラ下がるように俺の右腕に抱きついてるし。

そして胸。おい、胸が。

思いっきり、俺の腕に当たってるってば。

ゴム毬みたいな弾力がある、みずみずしい理子胸がっ。

だがそこは腕を組まれた時点である程度覚悟を決めていたのと、風向きが……南風だ。

俺が風上にいるので、理子のバニラっぽい甘々な香りのヒス的刺激は比較的手ぬるい。

なのでギリギリ持ちこたえつつ、俺は理子に引っ張られるまま――

細長い海浜公園を、西へ歩く。

ジョギングコースになっている歩道を避け、細い道をジグザグに進めば……花の茂み、芝生の広場、春の海と、景

色が次々に変わる。
いかにも、単調なものを嫌う理子が選びそうなコースだな。
俺なんかと一緒に歩くだけで何がそんなに楽しいのか分からん理子は、
「理子、今日は何でこんなに楽しいんだろうってぐらい楽しいよ」
俺の腕に抱きついたまま、ウットリ言ってくる。本人にも分からないらしい。
今日は晴天なので公園もけっこう混んでおり、いろんな人と擦れ違うんだが――
理子を連れてると、男も女も擦れちがいざまに皆チラチラ振り返ってるのが分かる。
女連れで歩く……似たようなシチュエーションには白雪とも陥った経験があるんだが、あの時は男ばっかり振り返ってたよな。
（なんというか、見る人みんなを虜にする魅力っていうのかな……そういうのが理子にはあるよな）
理子が美少女だって事ぐらい、俺にだって分かる。
だがこの魅力は、アリアや白雪のものとはまた別モノだ。理子には男女の区別無く皆がファンになってしまうような、そんな――アイドルや女優みたいな魅力を持っている。
そういや昔アリアが言ってたが、理子のママも男女両方から憧れられるタイプの絶世の美女だったそうだ。血は争えないってやつかもな。
しかし、テンション青天井の理子さんは……
喋る、喋る。ラジオDJみたいに、「ねえキーくん」「キーくんあのね」「それでねキーくん」と、うるさいのなんの。しかもマニアックなアニメやゲームの話ばっかりしてくるもんだから、俺としては聞き流す以外にない。
そうこうしてる内に、俺たちは公園のちょっとしたアスレチック・ゾーンに差しかかる。
ここは少し木々に隠れた、知る人ぞ知る場所なので……他に人はいない。
そこで理子はパッと俺から離れてくれて、
「わはー！　キーくんもおいでよ！」
赤いストラップシューズの足で、木製のハシゴを登り始めた。

（……っ……）

その足つきの勢いがいいもんだから、短いフリフリスカートのオシリ側からチラチラと……ハニーゴールドのアレが……ッ……

俺は慌てて視線を下に落とし、ハシゴを避けてアスレチックを回り込む。

その幼児向けの遊具を理子はマジで楽しんじゃってるみたいなので、

「お前なぁ……ガキじゃねーんだから……」

呆れた俺は滑り台の下に佇むのみに留め、不参加の意思を示す。すると、

「ぴゅー！」

口で効果音を言いつつ、楽しげに滑り台を滑ってきた理子が――今度は正面から見えて、摩擦を減らすためか理子が膝を立ててる都合上……またハニーゴールドのアレがッ……！

（……！）

ずざー、と下まで滑り降りてきた理子は笑顔で俺を見上げ、Vサインしてくる。

慌てる俺をよそに、コイツはホントに滑り台を楽しんでただけっぽい。

となると俺だけが、理子に対してそういう疚しい気持ちになってるって事か？

バカみたいだな、俺……ほんと、いかんだろ。こういうの。

最近その辺、ヒステリアモードに対する防衛が甘い。

ここいらでビシッと、自らに活を入れ直すか。

――と、俺は……

「おい理子。そういやお前、明日が誕生日だよな」

例のキラキラ棒をポケットの中で握りつつ、話を振る。

滑り台の下で子供みたいに足を放って座ったままになっていた、理子は――

「――え。う、うん」

さっきまでの元気モードから急にギクシャクした態度になって、こっちを見上げてきた。

ちょっと固まって、ほっぺたも赤くしてるし。
なんだよ、そのテンションの急な方向転換。
だが言葉少なになってくれるのはありがたいな。
「キーくん、覚えててくれたの？　アリアとゆきちゃんのだけじゃなくて、理子の誕生日も……」
「香港で言ったろ、覚えてるって。お前のが一番覚えやすいしな。3月31日。年度末で」
「あ、う、うん。ありがと……じゃ、じゃあ、お、お祝いしてくれるのかナー、なんて。アリアとか、ゆきちゃんにしてあげたみたいに」
理子どうしたんだよ。アハアハぎこちなく笑いながら、目も泳がせて……挙動不審だな。
とはいえ、理子が挙動不審なのは平常運転。これが普通の理子さんって事さ。
というわけで、
「まあ正式には明日だから、正式な感想は明日でいい」
と、俺はポケットからピンクの小袋に入ったキラ棒を理子に差し出す。
滑り台に座ったまま、両手で押し包むようにそれを受け取った理子は……
どっきん、どっきん。
という心音が聞こえてきそうな、緊張の面持ちになった。
何それ。
さて、俺は俺で理子がキラキラ棒に気を取られてる隙にここから逃走するつもりなわけだが……置き去りにするには、ここからも一緒に歩くフリで語って油断させておくべきだ。
なので、理子がピンクの小袋をそっと開けるのと同時に……
「理子。ここからは、黙って俺についてこい」
俺の知らんアニメやゲームの話に辟易してるフリで、うるさい理子へのクレームを装いそう告げた。
そして小袋の中を見て、ぴっきーん！　と硬直した、想定とは少々違うリアクションを見せた理子――とりあえず、動きを止める効き目はあったみたいだ――から、ダッシュで逃走しようと回れ右を試みる。

……だが。

「やるねーキーくん！」

アリアばりに赤面してこっちを向いた、理子の笑顔を見て……計画失敗を悟る。

あーあ。キラキラ棒、足止め効果がそんなに持続しなかったか。

もっと、理子の目を奪い続けると思ったんだけどな。

「アリアには指輪、ゆきちゃんにはバラの花で、じゃあ他に何があるのかなーって思ってたけど、いやーこれはアイデア賞ですよ。ちょっと見直しちゃいました」

「……悪いな。高いモンじゃないんだ」

逃げようとしてたのがバレてもアレなので、俺はもうしょうがなく普通にプレゼントをした体で語る。

「いいよ。理子、高いモノは盗むから」

「お前なー」

「あは、あはは。じゃあ、これ、もらっといたげる！」

袋から中身を取り出さず、理子はそれを後生大事そうに手に握ったまま――

「明日、ちゃんとお返事するね。理子きっちり準備して、待ってるから」

「……準備？　何の」

尋ねた俺に理子は、

「一緒に逃げる準備」

と、ウィンクしながら無声音で言った。

……？　アリアとか白雪から逃げるって事かな？　何か、話題にしてるし。

「でも理子、ちょっと納得もしてるよ。アリアとかゆきちゃんより、理子の方が逃げたり隠れたりするの得意だからね。理子の隠れ家は、あちこちにあるから。そこでしばらく、理子と仲良く暮らそうね」

小声で、まるで俺たちが今まさに狙われてるかのように語る理子だが……

アリアと白雪に、そこまでビクビクしなくてもいいだろうに。
「……今日はこれからどうするんだ」
「もう帰るよ。理子ちょっとドキドキしすぎて、普段の理子じゃいられなさそうだから。それでキーくんにヘンなとこ見せちゃって、やっぱりやめたって言われてもアレだから。せっかく、選んでもらえたんだから……今日はここでバイバイしよ」
ここもよく分からんが、今日これからの俺拘束が、明日に移ったって事か。
まあいいや、それならそれで。
どうせ逃げても理子に追い回されるんだろうし、付き合ってやるさ。
「分かった」
「じゃあ、明日の夜7時……理子の部屋に来て。絶対来てね。あっ、でもキーくんの気がもしも……もしも、変わったら……来なくてもいいよ。来なかったら来なかったで、理子も、そういう事なんだろうなって――他の子と逃げるんだろうなって、諦めるから」
どっちなんだよ。
ていうか、行かなきゃ行かないで後でどうせブーブー文句垂れるんだろ？
「明日の7時だな？　行くよ」
俺がそう言うと理子は、
「う」
どきんっ、と口から心臓でも吐きそうな顔をしてる。
「あのね、理子、アリアとゆきちゃんはそのままでいいと思ってるから。キーくんがもし対等に扱ってくれるんなら――力の限り頑張って、盗むよ」
「何をだよ」
「キーくんの心を。理子、人のもの盗むのが大好きだから。特に、アリアの物はね」
相変わらず、何を言ってるのかよく分からんが……

「……どうせ報われない恋だって思ってても、それをひっくり返すのが『盗む』ってこと。これからの逃避行に、理子、地の果てまでも付き合うから。何もかも捨てて、どこまでも、緒に行ってあげるから。その覚悟があるのは――きっと、理子だけだよ」

ぴょこ、と立ち上がった理子から、ふわり……と、バニラみたいな香りが漂う。

理子はその香りを残すように俺の横を通り過ぎながら、

「気をつけてね。壁に耳あり障子に目あり。明日の事は、誰にも言わないでね」

そう言い残して――

かつて自らがアリアを倒した時に根城にした、ホテル日航の方へと去っていくのだった。

理子と別れ、東京臨海モノレールで学園島に戻り……強襲科棟前の『売ります買います掲示板』や購買のワゴンを冷やかしたりしてると、次第に日も傾いてきた。

（帰るか……）

と、俺はバス代節約のため歩いて男子寮へ向かう。

途中で第2グラウンド脇を通ると、夕焼けをバックに五分咲きの葉桜が揺れている。

理子と一緒にいたせいもあり、思い出したが――

この桜は約1年前、チャリに仕掛けられた爆弾で吹っ飛んだ俺とアリアが枝葉を掠めた木だ。枝葉がクッションになって減速させてくれたお陰で、俺たちは死ぬような勢いでは体育倉庫に突っ込まずに済んでいる。ある種、命の恩人……恩樹？　とも言える木だ。

その木をちょっと眺め上げていると、

「……キンジ」

後ろから、アニメ声が。

振り返れば案の定、私服姿のアリアだ。

手に嚙りかけのももまんを1つ持って、立ち止まっている。
「女子会終わったのか」
「うん。向こうのコンビニでももまん買って出たら、キンジっぽい背中が見えたから」
去年の今頃はコンビニという日本語を知らなかったアリアお嬢様も、今や買い食いまで出来るようになったか。成長したねえ。
俺の横に来たアリアも、ツリ目を微笑ませて桜を見上げ……
「ここ、あたしとあんたが出会った場所ね」
「お前も覚えてたか。まあ、厳密にはもうちょっと向こうの車道だけどな」
「あれから1年。高2も終わりね」
「進級……できたとは思うけどな。その結果が明日まで分かんないとか、武偵高は本当に何でもギリギリすぎるぜ」
武偵高では、全学年のクラス分け発表が3月31日に行われる。進級できなかった生徒は下の学年に名前があるので、そこで同時に分かるシステムだ。
「あんた留年だったら、あかりとか風魔と同級生になるのね。ふふっ」
アリアは自分で言ったジョークに自分で笑ってる。
「よせよ。笑えん」
その光景を想像しただけで、居づらくなっちゃうぜ。今までアゴで使ってきた風魔が、同級生とか。
「でも今年は事件また事件で、あんた勉強あんまりできてなかったみたいよ」
お前が言うか？
「……勉強も最近コツを掴みつつあるところだ。期末もけっこう出来たしな。お前が心配することはない」
萌に個人レッスンしてもらってる事は隠しつつも、実際少し勉強に自信をつけつつある俺が胸を張ると……
「……キンジ、ありがとうね」
アリアが、また礼を言ってくれた。
多分、この1年間の全てに。

「お前、最近変わったな。シャトルでもここでも、俺に『ありがとう』だなんて」
「あたしだって『ありがとう』ぐらい言うわよ」
「言わんだろ」
「言うわよ！　……言わないかもしれないけど、あんたへの感謝の気持ちは持ってるの。じゃあ改めて言わせて。キンジ。いつも優しくしてくれて、ありがとう。あたしはいつもあんたに当たってばっかりなのにね……」
自覚あるんなら当たるなよ！　お前の『当たる』は弾丸が当たるんだから！
と言いたい俺だったが、珍しくしおらしいアリアには何も言わずにおいた。
こういう所をアリアは、優しいと評価してくれてるのかもしれんが――優しいというか、気が弱いだけなんだよ俺は。病気のせいもあって、女子に対して。だから買いかぶりだ。
と、俺が黙っていると――
「……キンジ」
アリアが、俺に向き直る。
何やら、意を決したように。
「さすがのあんたももう分かってるとは思うけど、あたし……あんたに、きちんと言葉で伝えたい事があるの。ママの事もあって、今までずっと後回しにしてきた事」
「……？」
「あたしの気持ち、まだちゃんと伝えてなかったよね。あたし自身の意思では」
暮れゆく空と共に、刻一刻と赤くなっていくアリアは……
何らかの、重大な告白を俺にしようとしているようだ。
だが、それを今この流れの中では言わないつもりらしく、
「でも……あんたにも、もちろん選択の自由はあるわ。だから、時間を……そうね、確かクラス分け発表が明日の夜7時だったから――7時に、あたしの部屋に来て」
などと、アリアは言うまでの間を空ける言い訳を立ててる感じだ。

「ちょうど明日の夜はママも新居を探しに行くって言ってたし……2人で、クラス分けの校内ネットを見るイベントをやりましょ。3年でも同じクラスになれてたら、きっと盛り上がるわ。そしたら2人で、その、ミニ・パーティーでも……でも……」

話が見えない俺が答えあぐねていると、アリアは勢いを失っていく。

「でも、あんたには……その、体質の問題もあるし……あたしのその言葉を聞くのがイヤだったら、来なくてもいいわ。それはそれでそういう事なんだって、あたしもそういうの——きっぱり、あきらめるから」

指示代名詞が多すぎてよく分からんが、アリアは勇気を振り絞って語ってる感じなのでヘンに詳細を聞けるムードじゃない。

だが、

（明日の夜、7時……）

その時間は、ちょうど理子にも誘われてるんだよな。

だが理子は、その事を誰にも言うなと言っていた。

アリアに対して——今ここで詳細を伏せて『その時間には別件が』と言うと、アリアはアリアで探りを入れるだろう。それでアリアが理子に行き着いたら、それはそれで理子に対して俺が気まずい。

なので、俺は少し考え……

アリアが小パーティーを開こうとしているようだったので、

「そのパーティーに、他に誰か呼ぶってのはどうだ？　盛り上げ役に、理子とか」

同時刻に理子とも会えるよう、我ながら自然な提案をする。

するとこれが大失敗。

アリアは、

「なんで理子なんか呼ぶのよ！」

どかーん！　と、ピンク髪の頭から怒りの湯気を噴火させた。
しまった。この非常じゃない怒り方。アリアと理子はケンカ中だったりするのかな？
「バカ！　あんたが！　バカ！　1人で！　バカ！　来なさい！」
1単語ごとに『バカ！』を挟みつつドッタンドッタンその場でオリジナル地団駄を踏むアリアに、
「な、何で急にブチギレんだよ。怒るなって」
「怒ってま――せ――ん――！」
ベロベロベー！　と、アリアは俺にガキっぽい怒りの表現。
いかん。このアリアの動きは……放っておくと、そこら辺の物に当たり散らすパターンだぞ。こないだは自販機を担ぎ上げてブレーンバスターしてたし。
「分かった、分かった。行くから」
アリアによる無差別破壊活動防止のためにその場凌ぎでそう言うと、アリアは……
「く、来るのね？　明日。夜7時」
まだ半ギレのまま、それでも何やら妙に嬉しそうな表情になるという顔芸を見せた。
「おっ、遅れたらタダじゃおかないからね！」
「はいはい」
「『はい』は一回！　そっ、それとキンジっ。この約束は、誰にも言うんじゃないわよ。ジャマされるから。それこそ理子になんか絶っ対っ教えちゃダメよ」
犬歯を剥いてビシッと俺を指さすアリアが、そんな事を言うので――
理子に時間をずらしてもらうよう相談する事も、できなくなってしまう。理子も理子で、俺が『ちょっと別の用事ができた』とか言うと調べてきそうだからな。
……なので……
これは、当日ドタキャン作戦で行こう。アリアか理子のどっちかの部屋には行くとして、もう片方には5分前ぐらいにいきなりキャンセルの連絡をする。そうすりゃ詳細を調べる間も取れないだろうからな。

半ギレのままスキップで去っていき、時々振り返ってブンブン振ってバイバイしてくる不思議なアリアに……

俺も、苦笑いで手を振ってやる。

やけに長く伸びた自分の影の先には、間もなく日没を迎える東京の灯(あか)りが見えていた。

Go For The NEXT!!!　19時のラッキーストライク

約束の3月31日――その夕方が、訪れた。
ていうか、もう18時45分。15分前だ。
（アリアにするか、理子にするか）
ポケットに手を突っ込んでアスファルトの道を早歩きしながら、俺は未だ決めきれずにいる。
アリアの部屋は第1女子寮。理子の部屋は第2女子寮。
間もなく、その分かれ道に差しかかるところだ。
なので俺は、最後の比較検討をする。
まず――
――アリアの方に行く道。
この話は絶対どっちかを断る事になるわけだから、そっちに怒られる覚悟が必要になる。
怒られた時に怖いのはどっちかというと、間違いなくアリアだ。
となると身の安全のためには、アリアを選ぶべきだろう。
明日、3年の始業式から風穴祭りで人間レンコンにされるのはゴメンだしな。
もう1つ――
――理子の方に行く道。
今日は理子の誕生日な事もあるんだが、俺は今、理子に困った預け物があるのだ。
それは、印鑑。俺は昨日、理子の目をくらますために――色ガラスを詰めた細長い小瓶、通称キラキラ棒を渡したつもりだったのだが……間違えて、その直前に新調したハンコの方を渡してしまっていたのだ。サイズや、包みのピンクの小袋が似てたせいで。
印鑑は作りたてだったしローズクォーツだったので、パワーストーン的なプレゼントに見えたのかもしれない。とはいえ『遠山』と彫ってあるので、さすがに理子も間違いだと分かるだろうけど……実印・銀行印として使うつもり

の印鑑を他人が、しかも泥棒さんが持っているのはよろしくない。早急に取り返さなければならないだろう。

（さて、どっちに行くべきか）

１００m四方ずつで碁盤みたいに区切られた学園島の、13区――

建て替え予定のため全店舗閉店している中規模商店ビル、その前のちょっとした広場で俺は立ち止まる。

ここから東に行けばアリアのいる第1女子寮、北に行けば理子のいる第2女子寮。

つまり――ここが運命の分かれ道、ってヤツだな。

広場から見て西南側、幅の広い階段を上がった所にある商店ビルはシャッターが下りていて……長らくそのままになっているせいか、スプレーで派手なラクガキがされてあった。

その広い階段に背を向けて、腕組みしていると……

「両手に花だね、遠山君」

……お？

あまり人通りのないこの広場に、見知った顔が現れた。

――不知火亮。

Aランクの強襲系武偵で、ちょっと底の知れない所のあるクラスメートだ。

「でも、花は、輪しか持てない。それも大抵、第三の花を持たされるものだよ」

そんな事を言いながら、やあやあ、という調子で片手を上げてやってくる。

休日でも防弾制服なのは俺も同じだから、指摘する事もないが――

何で知ってるんだ、って聞くのもヤボだな。

俺はアリアと理子のダブルブッキングについて、誰にも相談してない。

アリアも理子もペラペラ話す感じじゃなかった。

それをどっちも知ってると宣言してきた、この不知火は――

「東池袋高校じゃヒマだったろ。俺1人のために潜入捜査なんかやらされて」

――俺個人を、監視してたんだ。

少なくとも去年の冬、俺が武偵高を退学して、般校にいたあの頃には、もう。
今にして思えば不自然すぎたもんな。
不知火は俺と同時期に武偵高を出て、同じ東池袋高校に通い、同時期に出戻ってた。
友達を疑いたくなかったから、今の今までそうは考えずにいたが――
不知火は誰かの差し金で、いつの頃からか俺を監視していたんだ。
「ううん。けっこう君がアクティブだったから、報告事項は多かったよ。レキさんとか、君の弟さん妹さんに勘付かれないようにするのも骨だったし」
そこがバレてるとなると、きちんと話を合わせてくるし。
「――武偵はウソをつくのも仕事の内だけどな。爺ちゃん婆ちゃんに習わなかったか？　ウソつきは閻魔様に舌を抜かれるんだぜ」
俺が不知火の方へ、足を向けると……
「じゃあ君の舌のためにも、依頼をさせてもらうよ」
「依頼？　今みたいな前フリしといて、俺が受けるとでも思ってんのか？」
「ほら、僕は夏休みのサッカーに出たよね？　あの時、遠山君が1件何でも依頼を受けるって言ってくれたじゃない。後でそれを無期限延期してたの、忘れてた？」
「お前なぁ……」
「ん？　何でもするって言ったよね？」
「……ガキか。だがまあ、分かった。じゃあ言えよ」
――とりあえず、喋らせよう。
情報が欲しい。少なからず不気味だからな、この件。
思い起こせば、不知火は俺とアリアの関係をずっと気にしていた。どちらかといえば、仲を取り持つような立場で。
それは、単に――『男女パートナーで仕事をするクラスメートをイジる』という武偵高あるある……今となって

は、そうであって欲しかったところだ。
というのも、深読みの仕方によっては……あの悪夢のようだった緋緋神事件に俺たちの気づかなかった第三軸があった事になるからだ。
あの事件では、アリアを緋緋神にさせまいとしていた俺たちがいて、アリアをくっつけようとしていた不知火の動きは、結果から見るとどっちの結末に事を運ぼうとしていたのか不明なのだが――
――何らかの意志を持って、どちらかへ導こうと働きかけていた可能性がある。
弱い力ではあれど、力学的には介入していた可能性が。
「この公務を受けたのには、私的な感情もあったんだよ。前にも謝られたけど、僕は昔、君と組むつもりだった。それを武偵殺しの頃から、すっかり神崎さんに取られちゃってたからね。嫉妬なんて女々しいと思うかもしれないけど――美人が希少なように、強い人も希少なんだ。それを横取りされた僕がネガティブな想いを持ったとしても、それは自然な事だと理解してほしいな」
「……公務っつったな。どこの命令だ」
「依頼主からの守秘義務は、最もポピュラーな規則だよ」
涼しいイケメン顔で、受け流すねえ。
「よし分かった。言わせる」
俺は、不知火の戦闘力を――
ヒステリアモードではない今の俺より、強いと見ている。
だが俺は、世界各地で武者修行をしてきたようなこの1年間で……最近ついに、自分の意志でヒステリアモードになる技を編み出しつつあるのだ。
機会が無かったんでテストできてなかったが、こいつはその試し撃ちにちょうどいい。
相手は友達なんで、しくじっても殺される事はないだろうしな。
それに、この状況――俺は負けても失う物がなく、不知火にはある。情報だ。

つまり条件は完全に俺有利。
と、不知火側に、歩踏み出したところで……
――感じ取れた。一斉に。
ここで、やっと。
「……ッ……」
俺が不知火を襲おうとしたのを契機に、向こうが気配を解放したからだ。
それまで分からなかった、強靭で、重厚で、鋭敏な――存在感。
それも、複数！　やばいッ。
不知火にかまけている場合じゃない。
（――いるぞ、後ろにッ――！）
バッ……！　と、振り返ると。
スプレーでラクガキされた壁を背にした、広い階段に……
男が、5人。
ある者は退屈そうに立ち、ある者は横を向いて、ある者は両膝を広げて座り、何人かは気だるそうな雰囲気を伴って出現していた。
見ている方向すらバラバラな5人だが……チームだ。個々人が超人といえる戦闘能力を持っている上で、結束しているのが分かる。個人プレーも、チームプレーもこなす軍団。そんな感じがする。
そして……
その、5人の中に。
（……原田、静刃ッ……！）
いやがる。
真っ黒なコートを着て、口元までをフードで覆ったあの男。
ベルギーで俺を暗殺しかけた、元・眷属の傭兵。

今は背ではなく左腰に2本とも提げているが、その名の由来ともなった黒鞘の日本刀を携えた――妖刀・原田静刃が。片膝を立てて階段の上に掛け、俺を見下ろしている。

ここで会ったが百年目、ブチのめしてやる……！

と言いたいところだが、それが容易ではない事は既に分かっていた。

まず、原田静刃本人。

ヤツはベルギーで戦った時より、その気配が格段に大きくなっている。あれからたった2ヶ月半しか経ってないのに、どういう事だ。『男子三日会わざれば刮目して見よ』とは言うが、不自然な程の急成長ぶりだ。隙が――無い。

そして原田の仲間には、ツメエリの美少年、カッチリとスーツを着た細身の男、和服を着た丸坊主の巨漢――原田ケタ外れに強そうなのが、あと1人いる。

並み、或いはそれ以上に強そうなムードを持つ男が3人と……

その1人は、広い階段の中央前方に腰を下ろしている。

沙漠色のトレンチコートが地面に付くのも厭わず、長い両脚を広げ、膝を立てて座ったその大男は、俺と目が合うと……左手に持っていたラッキーストライクの箱をトントンと指で叩いて1本出し、咥えて引っ張り出し、ジッポーで火を付けた。

この男の、雰囲気は――

人というより、鬼に似てる。そしてそれより大きいのだ。まるで閻魔大王だぜッ……！

（――クソッ……！）

俺の全感覚器が、本能的に退路を探っているのが分かる。

マズイだろこれは。何なんだよ、あの男は……！

勝てないぞ、絶対。仮にヒステリアモードでも、片手で転がされて終わりだ。日本刀で言えば、正宗の刀。本物の中の本物だ。きっと生前の父さんや戦時中の爺ちゃんと互角だ。

圧倒的な存在感を放つその男から、俺が目を離せずにいると……

「――こんなガキ1人に、俺たちを5人も出すか？」

超然とした、海や空のように大きなものを感じさせるリーダーは腕時計――オメガのスピードマスターを見て、現在時刻を確かめてから――ガサガサ、と、コートの懐から紙を出した。

遠目にも分かる、見慣れたそれは。

……逮捕状……！

「東京地検特捜部の獅堂だ。遠山キンジ。、九時〇〇分、殺人容疑で逮捕する」

そして、ガチャン、と。

俺の手首に、不知火が手錠を掛けた。

警察庁の桜代紋が刻印された、超硬合金の手錠を。

Go For The NEXT!!!

カバー・口絵・本文イラスト／こぶいち
装丁／百足屋ユウコ（ムシカゴグラフィクス）

「灘さん1人でよかったんじゃないですか？　ランカー・ハントって事で」
「俺は今19位だ。71位なんか殺ったところで、ランクは上がらん」
スーツの男とツメエリ少年が、トレンチの大男に文句を言うような調子で語っている。
ロンドンで俺を倒したエージェント――サイオン・ボンド級の存在感がある2人がそうボヤく中……中央に座るトレンチコートの男はその2人に振り返らず、フーッ……
と、紫煙をくゆらせてから――
「そのガキをただのガキだと思うな」
俺から視線を逸らさず、低く言った。
獅子が、うなるように。
「可鵡韋、灘、原田、大門坊。シフト・デルタだ。攻性で組め」
どうやらリーダーらしいそいつが、そう命じると――
「ベータでいいだろ」
俺よりも目つきの悪いスーツ姿の男……灘とやらが、ボヤく。
だが、リーダーに逆らうつもりは無いらしい。
5人の、殺気が……
縒り合わさるワイヤーのように合わさっていくのが、分かる。
「遠山キンジ。お前は子供のレベル99かもしれねえがな。大人から見りゃレベル1だ」
その殺気だけで、俺から身動きする権利を奪いつつ――
リーダーが、立ち上がる。
それだけで、この広場の全てが歪んで見えるような錯覚さえしてきた。
「だが17歳。もう大人の端っこに名前を書いてやってもいい歳だ。ここは学校――今夜は少し、教育してやる」
くせっ毛の前髪の間で、リーダーは垂れ目気味の目からそれでも鋭い眼光を放った。

あとがき

バッティングセンターで隣の少年と打った球がビリヤードしました！　赤松（あかまつ）です！

さて！　いよいよ4年ぶりの大祭、アニメ放送が近づいてまいりました！

小説版ＡＡにも書かせてもらいましたが、２０１５年10月より開始予定のＴＶアニメ『緋弾のアリアＡＡ』についてこの場を借りてご紹介いたします。まずは声優さん！

間宮（まみや）あかり　佐倉綾音さん
佐々木志乃（ささきしの）　茅野愛衣さん
火野（ひの）ライカ　Ｍ・Ａ・Ｏさん
島麒麟（しまきりん）　悠木碧さん
高千穂麗（たかちほうらら）　ブリドカットセーラ恵美さん

神崎（かんざき）・Ｈ・アリア　釘宮理恵さん
遠山（とおやま）キンジ　間島淳司さん
星伽白雪（ほとぎしらゆき）　高橋美佳子さん
峰理子（みねりこ）　伊瀬茉莉也さん
レキ　石原夏織さん

この豪華キャストに加え、監督は『魔法少女まどか☆マギカ』や『〈物語〉シリーズ』の演出を手がけた川畑喬さん、シリーズ構成は『ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉』の忠茂文彦さん、キャラデザは『ＧＪ部』や『バカと

テストと召喚獣』の大島美和さん――そして制作は『ゆるゆり』や『恋姫†無双』の動画工房さんで、鋭意制作中です！

今回も素晴らしいキャスト・スタッフ・スタジオに恵まれたアリアのアニメ。

これはもう、見るっきゃないですね！　10月が楽しみです！

シナリオは一部を私も書かせていただきましたので、ぜひ放送を楽しみにしていて下さいね。詳細は『緋弾のアリアAA』アニメ公式ホームページ　http://ariaaa.tv/　でも確認できますので、ぜひご覧になって下さい。

それでは次は、アニメ祭りの真っ盛りに本屋さんでお会いしましょう。

2015年8月吉日　赤松中学（ちゅうがく）

祝!! マリア21巻♡

■こんにちはこぶいちです。

アリアのヒキは毎回衝撃的だと
思うのですが今回も、ですね！

私も読者のひとりとして
続きが楽しみです。

■それではまた次巻で
お会いいたしましょう！

ビビビ

!!

著者
赤松中学（あかまつ・ちゅうがく）
生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。『アストロノト！』で第3回ＭＦ文庫Ｊライトノベル新人賞優秀賞を受賞。本作・武装学園小説『緋弾のアリア』は同作家の2シリーズ目となる。

イラスト
こぶいち
ゆずソフト所属の原画担当。
代表作は『ぶらばん！』『Ｅ×Ｅ』『夏空カナタ』『天神乱漫』『のーぶる☆わーくす』『ＤＲＡＣＵ－ＲＩＯＴ！』『天色＊アイルノーツ』。
小説では『これはゾンビですか？』（富士見書房）の挿絵を担当。
趣味はゲーム、読書。
ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。
http://tyatsume.blog87.fc2.com/

緋弾のアリアXXI

リゴラス・サスペクト
秋霜烈日の獅子

赤松中学

MF文庫J

平成27年8月31日　発行

(C) Chugaku Akamatsu 2015

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

ＭＦ文庫Ｊ『緋弾のアリアXXI　秋霜烈日の獅子』
平成27年8月31日初版第一刷発行

発行者　三坂泰二
発　行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
0570-002-001（カスタマーサポートセンター）
年末年始を除く平日10：00～18：00まで

http://www.kadokawa.co.jp/